

や助ると太佛殿の二階の上山階寺の内へ我先よと逃入ける太佛殿の二階の上より千餘人上  
 り殿の積りとのぼせじと階を引てけり猛火のまさしう押掛ぬ喚叫ふ聲焦熱大焦熱無間阿  
 鼻烟の底の罪人ば是れより遊じとぞみぬし興福寺の淡海公の正願藤氏累代の寺々東金堂よ坐  
 ず佛法最初の釋迦の像西金堂よ坐と自然涌出の觀世音瑠璃を双し四面の廊朱丹を交し二階  
 の樓上願空よ輝し二基の塔忽に煙となるころ悲しけれ東大寺の常在不滅寶報寂光の生身  
 なる御佛と思しめし准と聖武皇帝手づから坐立給ひし金銅十六丈の盧遮那佛鳥窓高く願れ  
 せ半天の雲に隠れ白毫漸よ拜れて満月の尊容を現せかゝる貴き御佛を御頭ハ燒浴て大地よ  
 轉び其身ハ燒會て山のごとし八万四千の相好ハ秋の月早く五重の雲ハ隠れ四十一地の瓔珞  
 ハ夜の星空しく十惡の風ハ漂ひ煙ハ中天に充滿て炎虛空ハ沖り衝火の子散亂て雷の如し  
 親みる者の更ハ眼を當ず幽ハ佛聞人の肝魂を失り法相三論の法門聖教とて一巻を殘  
 らず我朝ハヤ及ず天竺震旦もこれほどの法滅有べしと覺す優填大王の紫磨金を鑿き  
 毘首羯摩の赤梅檀を刻しを纒又等身の佛之況や是ハ南閩浮提の中ハ唯一ツ無双の御佛  
 長く朽損の海あるべし其思ハざりしよ今毒焰の塵よ交て久しく悲を殘し給へり梵釋四王龍

神八部冥官冥衆を驚き噪給ふらんとぞみへし法相擁護の春日大明神いりなるとをか覺しり  
 んされハ春日野の露も色代り三笠山の嵐の音を恨る様よぞ聞へける焰の中ハ燒死する人よ  
 を筭れば大佛殿二階の上より一千七百餘人山階寺より八百餘人此御堂より五百餘人彼佛殿より三  
 百餘人を具に記せば三千五百餘人とぞ聞へける戰場に討るハ大衆千餘人少々般若寺の門に  
 切掛させ少々の頸共持て都へ上られけり明る廿九日頭中將重衡南都を亡ぼし北の京へ歸入  
 凡入道相國斗にて憤晴て喜れたれ共中宮一院上皇ハ縱ハ惡僧をこそ亡さめ多くの御蓋  
 滅すべきやいとぞは歎有ける日來ハ衆徒の首大路を渡して獄門の木に掛らるべしと公卿衆  
 議ありしが東大寺興福寺の亡びぬる淺ましさに何の沙汰も及ばず爰や彼所の溝や隍よぞ  
 捨置ける聖武皇帝の宸筆の正記文よ我寺興福せば天下も興福すべし我寺衰微せば天下も  
 衰微すべしとぞ遊ばされたりされハ天下の衰微せんと疑ふしと皆人淺ましき沙汰せしが其  
 年も聖治承も五年に成にけり

附て云右兵衛佐殿流人の身よて俄よ二十萬騎の勢を師るおとくハ兒女見て怪むべし是  
 ハ平家物語ゆゑ平家の始末をく見しくせしものなり佐殿の成立ハ略してあり源家の棟

築たれば譜代の従者を多く時勢よつれて爰彼所及沿て在じの皆出来り藤九郎盛長なほ  
 の伊豆の配所にも扈從して居けり其後千葉常胤が討ひて鎌倉より入給へり頼政の條も  
 云如く日本中の源氏を夥しく平家といへ共人道相國の政道を惡み怨むの多ければ佐殿  
 に隨ひ屬し者いくばくも夥し秩父三浦和州肥前北條皆平氏之石橋山の合戦伏木隠れ或  
 の奥田與一が討死七騎落等の事ハ佗の書ハ讀んで此物語より畧せりと知り給へり又此冊  
 のはじめは舊都のあれたるさまを云て變るは近衛河原の大宮とあり舊さと書ふる見耳  
 ともども代々の形勢を心得たる上に格別なをなくして弁へがよからん是の第一の卷  
 云二代の后とすせし七十六代近衛院の皇后まで大炊御門有大臣公能公の御安帝崩給  
 ひて太后宮を稱し近衛河原の御所勅修理せしすを大宮所共奉りしが七十七代ハ  
 後白河院七十八代二條院強て后より立給ひしが此帝ハ崩給ふゆる又御幽栖まじくける  
 入道殿を諸事ハ心まかせまじし禮奉るよを都遷るも其儘近衛河原の御所まほせしこ  
 又云四卷目ハ頼政卿自害の時の辭世平家物語より下の句を身のあるとて悲しかりけ  
 るとあるを他書に依てこゝに哀ありけるとせり此哀ハ哀憐悲哀の義ありあらず天晴と

同じ埋木ゆゑ花を咲ざりしが今最期も及でとなくしく軍をよげ忠義の爲も命を捨る  
 のあつばれを云心之左なれば花咲ともあかりしよと云下しふる上の句に相應せま  
 上下の句を心も味ひて知らるゝ又此冊のはじめハ朝敵といわれし人々の名の處入鹿  
 の次ハ大友眞鳥あり是よりいふべき説われどもくなくしければ昔々平家物語の本文  
 又まゐりす

治承五年正月元日内裏東國の兵革南都の火災は依て朝拜を留られ上出御もあし物の音  
 を吹鳴さず舞樂を奏せず吉野の國栖を參らば藤氏の公卿一人を參せられこれハ氏寺職失  
 りよつて二日殿上の宴辭をなす男女打潜め禁中忌布ぞみわしならびに佛法王法ども  
 に盡ぬるとぞ淺ましき法皇仰りけるハ四代の帝王思へば子之孫といかされハ萬機の政務  
 を停られ空しう年月を送るらんとぞは歎き有ける同五日南都の僧綱等関官せられ公卿  
 を停止し所職を沒收せらるるれば形の様はても御齋會の有べきものをも僧名の沙汰ありし  
 り南都の僧綱等ハ皆関官せられ北京の僧綱を以て行るべきか也公卿會議ありしが共され  
 ばとて今更南都をも捨ててよせ給ふなきならぬハ三輪宗の學匠成法法師が忍びつゝ鶴修寺

は隠居たりけるを召出で御齋會形の如く遊行る衆徒の宿老たるも若き者もあひり射殺され  
或の漸殺されて煙の中を出き炎は咽死で亡しかば幾多残る輩の山林を交つて跡と留る者一  
人もなし中よを興福寺の別當花林院僧正永圓の佛像經卷の煙と立具るを見て穴穿しとして  
心打噪がれけるより病付て終に失られぬ此永圓の優は絶世の人よとありしけり或時郭公の  
鳴と聞て

聞ふびよりづらしければ時鳥のつを初音のこゝろとすれ  
と云態を詠て之を初音僧正とのいせれ給ひければ皇の去々年法皇の鳥羽殿に押籠られ  
せ給ひし御事去々高倉宮討れさせ給ひし侍有はさかたしを容易からぬ天下の大事都邊邊  
事よ御惱付せ給ひてしかく渡らせ給ひざりしが今又東大寺興福寺の亡びぬるよし陣召  
ては惱最重らせ給ふゆゑ法皇との外御心を痛給ふは治政所勝残る方あしとせ給ふ同士  
四日六波羅の池殿にて新院終は崩御あり御宇十二年徳政千蒲端詩書仁義の廢るを興し理世  
安樂の絶たる跡を繼給ふ三明六通の羅漢を免れ給ふ幻術變化の權者を遣れぬ道きれば有爲  
無常の習ひとは云ながら理過てぞ覺けるやがて其夜東山の麓清閑寺へ遷し奉り夕の煙よ

承天寺の御齋會の儀に並のぼらせ給ぬ證憲法印の葬送も參會んどて急ぎ山より下られけるが

とや道よて煙と立上らせ給ふを見進せて泣々かくを詠じ給ひける

つゆよみし君がは幸を今日とへハ歸らぬ旅と聞ぞかなしき

又或女房帝隠れさせ給ひぬとらけ給ひり泣々思ひつゞけたり

雲の上は行末遠くみし月の光消ぬと聞ぞかなしき

御年二十一内よは十戒を保て慈悲と先とし外よは五常を濫らせ給ふ禮義を正しう守給ふ末  
代の賢王にてありしけれバ世の惜奉ると月日の光を失へるが如くかやうふ人の願を叶せ民  
の果報を拙き唯人間の境こそかなしけれ

の果... 誦人間の... 平家物語卷之五

平家物語卷之六

小督殿と捕尼と... 新院御誼就と高倉院と稱し奉る高倉宮より... 無かれればこのいかよと尋ねる職人俄のこゆ奏すべし言をかく有の儘は奏聞と天氣殊

彼は快氣を打笑ひせ給ひ林間煖酒焼紅葉と云詩の意とば其等も離れ敬を優しう侍  
 の心氣持と云き却て威感ありじ上は何の沙汰もあかりけり又安元の地傍方違の行幸あり  
 しまらでたよ難人曉唱聲明王の眼と驚す程にも成しらばいひもは寢覺がらよは  
 やり御寮も成れさけりいへんや互に霜夜の烈さあは延喜の聖主國土の民共がいかなる  
 程よお進かふんとして夜の眼として御衣を脱せ給ひけると迄思し召出て吾帝徳の至らぬと  
 ぞの敷有ける長深更も萬んで程遠く人の叫聲しけり供奉の人への開付られず主上の早く聞  
 じ着る何者を見て参れと仰ければ上臥しる殿上人上日の者も仰せて尋さすれば或十學衛  
 ん様の女の童の長持の盃提たるが泣といかよと問ば主の女房院の御所も侍もが此程漸お誠  
 たる我を持て参るも唯今男三三人来て奪取去ぬ今のは装束があらばこそ院の御所も侍のせ  
 給とゆ又とゆしく宿せ給ふべき親さ方もいさす是と思ひ續る悲しさとして泣けり  
 彼女童を具して参りて此よし奏聞したりければ主上聞し召む無懸何者の云爲よむなら  
 んと龍顔小は涙を流させ給ふぞ忝き堯の代の民の堯の心の直なるをまつて心と故に  
 尋集し降参れぬ朕が心と以て心とす故に奸者朝も在て罪と犯す是朕が愧れわらすや

ぞと仰け参るまでと取れけり衣の何の色と仰下されければ然りの色と奏す建禮門院  
 けまだ其時中宮まで渡せ給ふよ左様の色じたる御衣やいよ尋取りければ先より遠色  
 の服しう参りたるを女の童に給ひける未夜深じ又さる目よも違ふまじきにあらずと上日の  
 者餘多様主の女房の局まで送せ給ひひにされれば賤の男携の女あべて此君の千秋萬歳の寶  
 祚を祈しとがや何より又哀さむせり中宮のほう候をれける女房の召仕ける上意思さる  
 龍顔に咫尺と有けり唯尋常白地にてなま真成みは志深ありければ主の女房も召仕  
 せ給て主の如くいつき款待ける當時詔讀み云るとあり生男勿喜歡生女勿悲酸男是不  
 封侯女爲妃立后これハ揚太皇が玄宗皇帝の妃と冊れ楊貴妃とてとやされ其一族  
 く出候まじける時の俚語の幸ひある哉此女御后共持成れ國母仙院と仰られもやせんと  
 て其名を義前とゆければ内侍女御も御あへん主上風説を聞し召其後り召さしけし是  
 御陰志の調ゆるあらず唯世の誘を憚せ給ふゆゑとされれば既ちらよつやと供御を味  
 じゆも後懐もて常夜の殿のみ入か御座其時の願白極殿路よしを承つて主上御座の  
 御座るといふ坐なれゆ感の進らせんとて息を參内有て左様と願慮お掛らせ坐さんよはひ

何條とかいへば件の女房召れ進らすべしと母は料尋らるゝ以及ば基屋願て猶子仕り  
 いとんと奏し給へば主上仰よむと位とすつて彼のまゝなる例もある正しう在位の  
 時左様のとて末代の誹なるべしと聞し召入されば關白殿も方及ばず涙と押あがら罷出給  
 ふ其後主上様の御機嫌の句とぞ深かりけるよ古言なれ共思召出てかゝぞあそびされける  
 忍ぶれ色も出まけり我摠のものを思ふも水の問まで  
 冷泉少將隆房是を給り續て件の妻の前へ給せられた是を取て懐入顔打救め例ならぬ心地  
 出来たりとて里へ歸り折戻と五六日して終へ空く成よびも君が一日の思ひ爲よ妻が百年の  
 身を誤しわかやうの事をやすかば昔唐の太宗帝御基が女を元觀殿に入んを給ひけるを魂  
 散彼娘の既も陸氏に約せりと諫言ければ殿も入らるゝとを止られたりも少を違ぬ今の  
 君のほ心操りなと人すける主上の懸幕のほ涙も思ひ召洗せ給ひたるを中慰め給ひんとて中  
 宮の何方より小督殿とや女房を進らせらるゝと此女房とすは櫻田中納言重教卿の娘よて  
 禁中第一の美人双なき琴の上手と冷泉大納言隆房卿未少將よりし時見初たりし女房よて  
 始の歌と詠文を讀されければ其玉章の數のを讀みしきかかもしが流石情も弱る心よや

竟より藤給ひけりされとを冷り君へ召れ爲方か久悲しくも飽多別の涙も袖にぬたれと平の  
 へす少將いかよもして小督殿を今一目見奉るゝとやと其事とや常は參内せられけり小督  
 殿の傍座ける局の邊彼方此方へ佇立歩き給ひければも吾君へ召れ進らす上り少將いかよ  
 やとも詞とも通もべうらすとて傳の情をたおも掛られず少將もしやと歌一首小督殿の局の  
 御簾の中へ投入らるゝ

思ひかね心は空に陸奥のちかの懸籠近きかひなし  
 小督殿やがて還事をせまはしく思ければ共君のほ爲は誰影とや思れけん手も取ても見給は  
 ずやがて上置と捕せ盡の内へぞ投出さる少將情もさ怨じらわれ共さすの人とこそ見え空帷  
 しく取て懐に引入出られけるが猶立歸り

玉章を今は手よだよとらととやと心よ思ひすつと  
 今の此世よて相みんを離ければ生て居て左も右も人を戀しと思はんより唯死んどのみぞ  
 離れける入道相國此よし風も聞給ひ中宮とすもは女冷泉少將も又智也小督殿も二人の鐘  
 を取れては世の中好まじぬかよもして小督殿を呼出し失んことを宣ひゆる小督殿もいぢか

此源汰を傳へ聞給ひ我身の上は何とも事なり成る君の御心苦しと思はれは或夜内事か  
 辨れ出行術を知す失はれける主上の御心苦しなり夜中の御心ののみんせ給ひは涙は沈み  
 せられ後日市殿の出御なつて月の光を御覽せ思せ坐はる入道殿扱ひ君小督ゆゑ思ひ召洗  
 せら在りと思ふ其ならばとて内侍の女房達を御心苦しめ給らせ参内ある人々をも猜み  
 の目も移立らば入り入道殿の權威と恐れ参り通ふ臣下もなし男女打潛て禁中忌しうぞ  
 みやよける此の八月十日餘りの事なればさし限なき空を共主上の涙も曇らせ給ひ月  
 の光を御覧は御覽せらる夜も深更も及んで人や在りも召れしは唯諸奉る者もなし良有て  
 彈正太弼使國其夜も直宿参り通ふ遊々侍ひはるが仲國侍ふとす上れば汝近う参り仰下  
 さるべき旨ありと宣ふ何事やらんと御前近う参じるに汝若小督が行術や知たると仰らる  
 争が存すべしと下詔や嵯峨の邊片紙折したる内は在とす者も有るを主が名をばしらすと  
 尋参せせんぞと仰り給ひ仲國主の名を知りぬとていかをか尋ね遣れいへすとす上るゆゑ  
 主上覽ふもとて涙垂取らせ給は仲國藤原物を兼ちまよ小督殿の琴彈給ふと高名なかし  
 此月には明き君の御事思ひ出さるるも昔琴彈給ひはたりよも知らし内事よて彈給ひし時寺笛

の役も召れたれば其琴の音の何國よても聞知んるるものを嵯峨野の在家いくほどかあらん  
 打廻つて尋んよきか聞出さであるべきと思ひ左の主人の名のしらすゆゑと尋見いべし  
 縦ひ尋ねわひ共御書などいとすい浮雲とや思されいひめ御書を賜て参りいひんとす上る  
 よ主上理ありとて頼て宸筆を染給ひ下され寮の馬に乗て参れと仰り依て仲國馬出させ  
 明月よ策を揚西をさして歩せける小鹿鳴此山里と詠じけん嵯峨野の邊の秋の比さこそ哀  
 よも覺けり片折戸せし屋を見付て内内を坐すらんと扣き聞ければも琴彈處のなりり  
 けり御堂などへも参り給へるともやと釋迦堂はじめ諸堂を見廻れ共小督殿に似たる女房だ  
 よもなるりけり空しう歸り参りたらん参らざらんより中へいしかるべし是より何地へ  
 を迷ひ行なやとの思へ共何國か玉地ならぬ身を藏すべき宿をさしいかやせんと案じ煩ふ誠  
 や法輪の程近ければ月の光を誘ひれて参り給へるともやと其方へ向てぞ浮岩ける龜山の傍  
 近く松の一村ある方は幽な琴を聞へける峯の嵐か松風か尋る人の琴の音かと覺束あくの思  
 へ共駒を早めて行程も片折戸したる内も琴を彈澄されたり控て聞バ少を紛なき小督殿の爪  
 書よて樂は何ぞと耳を澄せば夫を想ひ戀と訓想夫戀と云樂なりけり仲國さればこそ君の御



權國拔夜馬  
馳驅城野  
承會殿世親國



事思ひ出参らせて樂を多き小曲を弾じ給ふところ優しけれと門はどく打鼓を頼て琴の  
 彈止給ひぬ是の内裏より仲國が御使參りては開させ給へとて敵けを答る者もあけ  
 りやゝあつて内より人の出る音しけり嬉しう思ひ待處も鎖を廻し門細めは開鎖したる小  
 女房の顔斗指出てこれの内裏より御使を給るべき所も侍若門邊にてを侍はんと云ける  
 仲國返事せば門鎖指れんと是非なく押開て入ける妻戸の際なる縁も居て何をやかやう  
 も御渡りいやらん君と御故も思し召沈ませ給ひ御命を已も危ふみへさせはぞのくやさは浮  
 の空とや思すらめ御書給り参いとて取出し奉る已前の女房取次て小督殿へ進せしを披き見  
 給へば君の御消息も有けるやがて御返事書引結び女房の装束一重添てお出されたる仲國  
 返事の上の左右すよ及いねども別の使もいはいこそ直の返事承らでいいかで  
 歸りいべきとすよぞ小督殿實にやと思れけん自ら返事し給ひけり足下を聞給ひつらん様  
 よ入道殿餘りも怖しき事のみすと聞しかば淺猿さよ或夜密に恐びの内裏を紛れ出今い境  
 る處の酒居なれば琴彈とをなかりしが明日より大原の奥へ思召立とといひ定て御姿あど  
 ばかりの名残を客み今は夜を深ぬと聽人もわらじなを勘問昔の名残も流石床しく手馴

し爪琴かきならせし易らも聞出されけりあどて涙せき取給ひねば仲國を坐し候をぬら  
 しける良わので仲國涙をなきはやはるの明日より大原の奥へ思召立とといひ定て御姿あど  
 を變給ひんは後事とを然なきもいひはせを君を何とがし給ふべき夢く吐ひいまじ  
 相うまへて此女房出し参らすは定て供具せし面部青仕下すと留置其屋を守護せしめ寮の  
 馬を飛せ内裏参りたれば夜の明けけるやがて馬繫せ女房の装束の隠し持ながら今の  
 定て御影ありゆらんは誰とてのさぶさと思ひながら南殿も参りたるは主上の未夜邊の邊  
 座は坐る南翔北舞難付寒温於秋雁東出西流只寄三鷹望於曉月とほ心細げは打詠じさ  
 せ給ふ處は仲國の参て小督殿の返事進ませたれば主上斜ならずは感有てさらば汝夕去  
 具にて参るも御影の仲國の入道殿の遠聞給ひん感も怖しけれ共勅誑あれいんも車借て嗟  
 嗟行たるは小督殿参るまじと言ふを種々難し許さて車も乘内裏へ伴ひ参りければ幽ある  
 處も忍びせ夜も召ける程は姫宮は無所出来させ給ひけり坊門女院との此宮の御事なり  
 入道神國小督が失なると云はれ跡方なると感責いのかはを志して朱のいと有長がひは  
 也小督殿果補給尾果を此邊放た後年すま出雲の元來留なれ共か事必なる所也よあされ濃

墨染は寢果懸帳の契も栖れし無下の方見と共に主上のかやらの事共を御惱めかせ給ふ品  
 今の内は襟なりし一ツと聞へける法皇より連續の歎のみ滋かりける去る永方より第一の  
 皇子二條院崩御あり安元二年七月より孫六條院隠させ給ひ天の栖り比翼の鳥地より連理  
 の枝とならんと銀漢の星を指てさしを夢契淺からざりし建春門院秋の露も立かくれ朝の露  
 も消させ給ひぬ年月の隔れ共昨日今日の別別の様も思し召て夢涙を磨給ひぬ治承四年五  
 月より第二の皇子高倉の宮討れ給ひ現世後生戀思し召れつる新院さへ先立せ給ひぬ先  
 角よ託かよなきは涙を滋かりき悲の至て悲さの老て後子よれくれたるより悲さのあし  
 恨の至て恨しき若うして親は先だつより恨めしきいなしと朝綱相公の子息澄明に後れて  
 書れし今こそ思し召知れられ彼一乗妙典の誦誦も怠せ給ひぬ三密行法の修修も功  
 積せ夢座天下諒闇ふなりしかバ大宮人も推並て花の袂と寝しける入道相國斯迄いたく情な  
 う當り奉られたる事を流石空恐しくや思れけん法皇を慰め進らせんとて安藝嚴島の内侍が  
 腹の姫君生年十八も成給ふを法皇へ進らせらる當家他門の公卿多く見送りして偏も女御參  
 りのおとくもぞ有ける上皇隠れさせ給ひ僅も二七日も過さるも然るべからずとぞ入る私語

合れける去程も其比信濃國に木曾次郎義仲と云源氏ありと聞へけり故帯刀先生義賢の次男  
 之然るも父義賢の去ぬる久壽二年八月十二日鎌倉源太義平朝の惣領も討れ其時義仲二歳  
 之母抱て泣く信濃へ下り岐蘇の中三兼遠が許も權頭中原の兼遠の三男も行ていかにして  
 人となし給ひれと云を是ぞまさしく八幡太郎義家の曾孫清和源氏の胤とて兼遠かひく  
 しう請合て養育し漸長大に及び容儀躰佩人に勝れ心を剛み力も強く弓箭打物取とい都て  
 上古の田村利仁於期將軍知頼保昌先祖頼光義家朝臣と云をいかにでり是より増るべきと人  
 々の思ひ付大方ならず十三もて元服も先八幡へ参り通夜して我四代の祖父義家朝臣の此  
 は神の傍子と成て名を入幡太郎義家と号しき且其跡を追ふべしとて寶前も醫を取上木曾  
 次郎冠者義仲と云し之常の乳母の仲三も具せられ都へ上り平家の舉動形勢共をも能く見窺  
 ひけり木曾或時兼遠を呼て抑前右兵衛佐頼朝の東八ヶ國を打從へて東海道より攻上り平  
 家を追落さんとするよし吾も東山北陸兩道を隨へ一日も先小平家を亡し縦日本國も兩人  
 の將軍と仰れんと思ふいかよと宣へ兼遠天も畏り悦で其料よこそ君をバ此二十餘年  
 養育し奉りていかにやうも仰らるゝころさすがに入幡殿の御齋共覺へ以迎頓て謀叛を企先

源氏が東山に陣を敷く。信濃國の補給を頼み、本野行親、番長、藤原、是  
 を信州一國の兵を率ゐり、上野國田原の兵共、義賢の好む依り出來り、其外平家の末  
 裔あり、源氏に得て源氏平家の縁を離れ、木曾の属する者、身も多かり、けり  
 他、青木、藤原、義賢を殺し、源氏の島山を命じ、孤を害すべしと、言ひしが、義賢  
 大に之を嫌ひ、之を義朝の所領を授け、之を教養する、孤の命を以て、之を扶け、しとて、思案す  
 義賢の縁を離れ、行遇是と頼ける、孤實盛を見て、笑ひかゝる、ゆゑ、不便増請、版しが、乳母  
 之を信州へ行て、入魂せし中、三兼遠を頼賢盛の源氏の武士なれども、時勢も依て、平宗盛  
 公の任、兼遠も又然り、當時、明察、格別、親り、兼て、義仲時節を待て、病を揚んと、  
 兼遠共、語合れしが、此節、兼遠、所師、在、其、留、主、以て、俄、此、義、に、及、べ、り、宗、盛、兼、遠、を、呼、出、  
 人し、義仲が首を討て出すべしと、言ふ、兼遠の義仲を不便、言ひ、以て、其謀、叛、を、企、  
 てる、器量、の、者、感、ぬ、ち、殊、山、家、在、て、譜、代、家、子、一、人、も、な、し、父、と、惡、源、太、公、殺、され、然、れ、  
 怨、の、類、朝、に、そ、ち、ら、り、意、恨、を、あ、く、眼、前、某、が、主、人、と、頼、ひ、平、家、へ、何、を、以、て、弓、を、挽、け、  
 全く、問、港、の、弁、者、を、め、い、んと、平、家、の、侍、大、將、共、の、兼、遠、を、擲、置、勢、の、屬、内、は、義、仲、討、手、を、向、

らるべしと、勸、け、れ、共、宗、盛、公、平、信、半、疑、み、て、更、み、決、せ、ず、兼、遠、辨、舌、を、振、て、陳、議、す、る、ゆゑ、と、て、  
 人心を静ん爲早く、歸國し、義仲を討て出せとて、暇を賜ふ、兼遠虎の尾を踏危きを遁れ、  
 歸國す、侍大將共兼遠を遁すまじと、諺へ、共宗盛公、苟も、當家の大將軍なり、何ぞ汝等が、  
 警慮を借ん、とて、大に怒給ふ、ゆゑ、せひ、かく皆退て、知盛卿なら、バ、かく、あら、じ、今、は、勝、を、囃、給、  
 はん、と、私、語、あ、へ、り、又、義、仲、北、國、の、軍、は、齋、藤、別、當、を、討、つ、と、あ、か、れ、と、觸、ら、れ、し、ゆゑ、實、盛、が、手、  
 先、の、軍、す、る、者、な、し、是、昔、の、恩、義、を、思、ふ、て、之、さ、ま、に、實、盛、討、死、の、覺、悟、を、究、髮、髮、の、白、を、染、か、  
 く、し、若、や、さ、て、敵、よ、あ、ひ、し、と、わ、り、平、家、物、語、と、い、は、さ、か、差、ふ、ゆゑ、此、事、を、述、置、  
 四國西國平家も、背太政入道、熱病を薨去、城、資、永、永、茂、が、軍、事、  
 信州、岐、蘇、と、い、ふ、所、の、國、の、南、の、端、美、濃、境、を、れ、バ、都、も、程、近、し、平、家、の、人、東、國、の、背、だ、よ、あ、る、北、  
 國、迄、と、い、か、よ、と、大、に、恐、れ、騒、ぎ、を、け、り、入、道、殿、宣、ひ、け、る、の、繼、ひ、信、濃、一、國、の、者、共、こ、も、木、曾、も、隨、  
 ひ、附、と、云、共、越、後、の、國、の、於、期、將、軍、の、末、葉、城、太、郎、資、永、同、四、郎、資、茂、是、等、の、兄、弟、共、も、多、勢、の、者、  
 之、仰、下、さ、ら、し、身、を、討、て、進、ら、せ、ん、と、宣、へ、バ、實、も、し、人、を、あ、り、い、や、く、唯、今、御、大、事、及、ん、と、  
 呻、く、人、と、あ、り、し、二、月、朔、日、除、目、行、れ、越、後、國、の、住、人、城、太、郎、資、永、越、後、守、に、任、是、は、本、木、曾、退、

討ゆるべき謀を聞へける同七日大臣公卿家よりして魯勝陀羅尼ならびに不動明王書供養せ  
 らるべき兵亂愼の爲とぞ聞へし同九日河内國石川郡に居住しける權守入道義基子息石  
 川判官代義兼是を平家を背頼朝卿より心を通ひし東國へ落んと聞へし平家討手を遣ひし  
 ける大將に源太夫判官季貞攝津判官盛澄三千餘騎を引具し河内へ發向に城の内より義基  
 法師を始めつゝか百騎斗より過ざりけり卯刻より矢合せし一日戰暮し夜も入れれば義基法師  
 討死と子息判官代義兼の痛手負て生捕となる同十一日義基法師が首都へ入て大路を渡さる  
 諒闇の賊首を渡さるゝと堀川院崩御の時前對馬守源義親が首を渡されし其例と聞へし明る  
 十二日鎮西より飛脚到來し宇佐の大宮司公通アていとく鎮西の者共緒方三郎維義を肇曰杵  
 戸次松浦等も至る迄一向平家を背て源氏に同心のよしやたりければ平家の人々東國北國の  
 背上西國迄りくゐるのいかよと眼を見合せて驚き危光り同十六日伊豫國の飛脚來り去年の  
 冬より伊豫國の住人河野四郎通清源氏も同心するも依て備後國の住人額入道西寂の平家も  
 志し深かりしよぞ三千餘騎もて伊豫國に押渡り道前道後の境ある高直の城も推寄さんく  
 ん攻ければ河野通清討死す子息通信の安藝國住人奴田次郎と云者母方の伯父ありしへ趣て

在谷父を討せて安からず思ひいかよをして西寂を討んと疑ひける額入道西寂の四國の狼  
 藉を鎮て今正月十五日備後の朝へ押渡り遊君共を集て遊戯酒宴ある所へ河野父の名を  
 繼四郎通清思ひ切たる者共百餘人相語てつと推寄西寂が方よも二百餘人有ければ其俄の  
 とゆゑ思ひ儲を周章よめさけるが立達ふもの射伏切伏先西寂を虜て伊豫國へ押渡り父  
 が討れし高直の城まで提持行 歸もて首を切たり共又磔も掛たり共いへり其後の四國の者  
 共河野四郎も隨ひ阻ぬ又紀伊國の住人熊野の別當湛境の平家重恩の身ありしが忽ち心變  
 ず源氏に同心のよし聞へし平家の人々東國北國南海西海かくの如く夷狄の聲起耳を駭  
 し逆亂の先表類も奏す四夷既も起れり世既に失ひんとするも平家の一門に於らねども  
 心ある人々驚き悲ぬの無りけり同廿三日院の殿上もて俄も公卿會議あり前右大將宗盛卿も  
 さるゝの今度坂東へ討手の向ふたりといふ共させ仕出したるともなし今度の宗盛大將を  
 承りて東國北國の凶徒等追討すべきよしするも諸卿色代して卿の才狀勇しくいとやす  
 られける法皇を御感ありけり公卿殿上人も武官も備り少も弓箭も携らんほどの人々の宗盛を  
 大將軍として東北の凶徒等を追討すべきよし仰下され廿七日軍の首途して既も討立んとせ

ちられし夜半がが入道殿違例の心地とて止り給ひぬ廿八日ふ入道殿重病と聞へしかば  
 京中六波羅関へりぬかと思れけん疾附より湯水も咽へ入られず身の中熱と火を焼く如し  
 臥し給ふ處四五間が内へ寄者の熱さ堪がたし唯宣ふとい宛々ど斗之誠又凡事とをみへられ  
 幸餘り堪難さや比叡山より千手井の水を汲下し石の船に湛置をれ下りて寒給へバ水夥  
 せう湧上て程なく湯みをなりよけるもしやと覺の水とまかすれば石や鐵の焼たる様も水進  
 て寄付す自ら中水の焰と成て燃ければ黒煙殿中又充滿炎洞卷てぞ揚りけるこれや昔法藏僧  
 都と云し八閻王の請又應て母の生所を尋し又閻王 憐給ひ獄卒を副て焦熱地獄へ遣さる鉄  
 の門の内へ指入てみれば流星などのとくに炎空に打昇多自由旬よ及らん是に過じと覺  
 ける又入道殿の北の方八條二位殿の夢見給ふ猛火夥まう燃たる車の主をなきを門の内よ  
 遣入たる其前後に立たる者或は牛の面馬の面のとく車の前無と云文字斗鐵の札も彫て打  
 きり夢の中其車は何國より何地へと問給へは平家太政入道悪行超過よよつて閻魔王宮よ  
 り車迎の車也とやあの札のと問給へは南閻浮提金銅十六丈の毘盧遮那佛を焼亡す罪よ依て  
 無間の底よ沈べしと閻魔の應よて沙汰有しが其印よいどやける二位殿夢覺れば冷汗肌服を

徹せり此夢を談給へば聞人皆身の毛堅りり靈佛靈社へ金銀七寶を擲馬鞍鐵兜弓箭太刀刀  
 至極取運出して祈りされければ共叶ふべくもへ給はず唯男女の君達跡枕を指湊ひ歎き  
 悲み給ひけり閏二月二日二位殿熱堪難けれ共入道殿の枕を靠て形勢を見奉るに日は副て  
 懸少くみへさせし物の少も覺させ給ふ時思召とあらば仰置とよとありしに入道殿日來は  
 さしを勇々敷おはせしかども命期よをなりしか六世も苦げ又息の下よて宣ふよう當家の  
 保元平治より以降度々朝敵と平け勸賞身は餘り忝くを一天の君の御外戚として丞相の位よ  
 至り榮花既に子孫よ暨ぶ今生の望の一事を思ひ置となし唯思ひ置事とて右兵衛佐頼朝が  
 首を見さるり何より本意なし吾いかも成ん後佛事孝養なとべからず堂塔を建  
 かからず急ぎ討手を下し頼朝が首を刎て我墓の前よ掛べし其を今生後世の孝養よあらんとぞ  
 宣ひぬをしや助るを板よ水を置て臥轉ひ給へ共助る心地もあく同四日悶絶覺地して遂よわ  
 がごと死よどし給ひける馬車の馳違ふ音の天を響地を搖ぐ斗一天萬乘の主いかなる事事在と  
 是程にの等か勝るべし今年六十四老死と云べきよもあらず宿運 忽尽ぬれば大法秘法効驗  
 を著し神明佛陀の威光を消諸天を擁護し給はず况や凡庸よ於てとや身よ替り命よ代んと忠

と存せし數萬の軍族の堂上堂下は並居たれ共是れ目もみへず力も抱ぬ無常の殺鬼をば  
 暫しを暇返すべしと号す又歸り來ぬ四手の山三途川責泉中有の旅の空の唯一所を懸れたる  
 され共日來造り置れし罪業ばかりこそ獄卒を成て迎も來りけり哀ありし次第之同七日愛  
 宕にて煙と骨と六圓實法眼首よりけ舞津園へ下り經島は編けりさしを六十餘州は威を  
 振ひし人なれ共身の一片の煙とありて都の空に立昇り骸の暫時徘徊して濱の真砂に戯れつ  
 空と土とぞ成給ふ罪運の夜不思議のこありけり玉を延金銀と鑿て作られし西八條殿其夜  
 俄に焼にけり人の家の焼るの常の習ひなれ共向者の所爲もや有けん放火とぞ聞へし又六波  
 羅の南に當て入ならば三十八人ばかりが聲して嬉しや水嶋の池の水と云柏子とりて舞躍  
 り咄と笑ふ聲しけり去る正月より上皇隠れさせ給ひ天下諒闇になりぬ幾二兩月と隔て入道  
 相國薨せられぬ心なき惟の若もいふも愛さるべきいかさは是れ夫狗の所爲とぞ沙汰あ  
 り平家の早雄の兵百餘人笑ふ聲を聞途よ尋けるは院の御所法住寺殿より此三年の院を渡  
 り給ひす御所預り備前前司基宗と云もの有其知る者共酒を賣て來集飲けるを楚の折節  
 は音あせぞとて飲けるか次第よ酔ののり加藤は舞師けるは六波羅の兵共是を聞付つと押

寄酒醉共三三人擲擲て六波羅へ率て參盡の内は曳居ければ宗盛卿大床より立て事の子細を  
 亂聞れ實をさまで飲醉たる者を左右なら斬べし様なしとて皆歸されけり上下人の失ぬる跡  
 の朝夕鐘打鳴し例時懺法するは常の風俗なれ共此禪門薨せられて後の聊供佛施僧の營をさ  
 く日夜軍合戦の隙のみ又他事あかりし入道殿の唯人とも是れ事こそ多かりけれ日吉の社へ  
 参り給ひしにも當家他家の公卿多く供奉して攝祿の臣の春日御參詣氏入とぞ共是にのい  
 々でか勝るべきとぞ人守ける何よりも又福原の總が島を築て上下往來の船今の世迄を煩ひ  
 きたるを日出度ければ彼島の去る應保元年二月止旬は築給られし同八月二日俄に大風吹大  
 波立て皆洩失ひけり同三年三月下旬阿波民部重能を奉行して築れけるは人柱を立らるべき  
 ぞ公卿僉議ありしか共其の中々罪業あるべしと石の面に一切經を書て築れたり此ゆゑ經高  
 とのやあり又都遷のときと便不便のいふをあれべきとて叶ぬとせけり  
 平家物語に清盛公の天台慈惠僧正の化身として攝津國清澄寺の慈心房尊惠が夢に閻  
 魔王の物語と直に聞又七言四句の頌を授られ外も一章の頌と是れ入道へとて示され  
 白河院の持經上人の化身と云入道の惡業を世の爲人の爲み自佗の利益となす彼提婆と

釋尊同衆生の利益は異ならずとの一段の餘り兒戯も等しきゆゑ削去てこゝに載す殊  
又四句の頌と云をの閻魔の作もわれいかふも婉拙も覺ゆ

同廿日五條大納言國綱卿を失給ひぬ入道相國とさしも契深かりしが同日に病付て同月卒去  
めりしぞ不思議なる同廿二日宗盛卿院參して法住寺殿は去る應保元年四月十五日遣出され  
新日吉新熊野野間近う勸請を奉り山水木立思召まゝなりしが種々の仕事共よりて此二三个  
年は院も渡せ給はず御所も破壊せしを修理して御幸なし参らすべし旨奏聞せらるし法皇  
何の様を有べからず疾々として御幸なる先故建春門院の御座ける方を御覽されば岸の松汀の  
柳年経て木高くあれり大掖の芙蓉未央の柳是より向ひ給ふ争かば派進まざらん彼南内西宮  
の昔の跡今こそ思ひしられけれ三月朔日南都の僧綱等皆赦され本官は復す末寺庄園一所を  
相違あるべうらざるよし被仰下同三日大佛殿事始あつて奉行より前左少弁行隆を参られけ  
る同十日美濃の目代早馬を以て都へゆける源氏すでは尾張國迄責上り道を塞一向人を遠  
ざせししと預説す是より依て討手を向らるゝ大將軍より左兵衛督知盛左中將清經小松重盛公  
少將有盛上と同丹後侍從忠房侍大將に越中次郎兵衛盛綱上総五郎兵衛忠光悲七兵衛景清  
を先として其勢都合三萬餘騎尾張國へ發向す入道殿薨れ給ひ五旬をたに満ざるふ亂れたる

世とは云ながら淺嶽の有さま也源氏方あり十郎藏人行家右兵衛佐殿の弟卿公義圓其勢六  
千餘騎を從へ尾張河を隔て源平兩方陣取しが六日の夜入て源氏六千餘騎を渡し平家三  
萬餘騎が勢の中へ懸入實の刻より夜明まで戦けるが平家の方い少を騒す敵と川を渡したれ  
ば馬物具も皆濡たるぞ其をしるし討よとて源氏を中み取籠て我討取んと進みける卿公義  
圓深入して討れけり十郎藏人行家散るゝと戦ひ家子郎等多く射させ力及ば河より東へ引退  
く平家頼て川と渡し落行源氏を追物射し射て行よわとこ此よて返し合せ防ぎ戦ふといへ共  
多勢も無勢も叶ふべくもみへさりけり氷驛を後よするとなかれと云よ今度源氏の謀の疎  
也と人々たる十郎藏人行家の引退き三河國は打越矢矧川の橋を引掻橋かいて待かけたり平  
家頼て續き責るゆゑをを終り攻落されぬ猶を續て責んには參河遠江の勢の容易附べかり  
しを大將知盛勞ありとて三河國より都へ歸り上られたり今度を僅よ一陣を破られたれ共  
殘黨を攻されば仕出したるとを無が如し平家の去々年小松大臣殿薨せられぬ今年又入道殿  
失給ひぬ運命の未だあると顯なりしかば年來恩顧の者の外に隨屬者ありけり東國の草

本を皆渡馬のなげはる平家此時尾州より川を前へ陣を以て洲原合戦と云傳へたが  
 扱又越後國城越後守資永受命せし朝恩を報せん爲本會を追討すべしとて三萬餘騎を率し信  
 濃國へ發向す六月十五日より首途して既四五里行たるに俄く空撞響り雷鳴しう鳴て聞  
 夜肉知さず數を閃く電眼を打大雨車軸を漂すや一尋んふみへけるが虚空は喘濁爲して金銅  
 十丈の盧遮那佛を燒亡したる大惡の平家より人する有るありあり召取やと二度叫んで連  
 る資永を始としてこれを聞兵とを身の毛を愈々震はけり郎從一同は斯恐しき天の告を  
 以て唯理を枉て留せ給へと諫ければ弓矢取身のれは依べからずと又二十餘町行たりける  
 黒雲一祥立來り資永が上より發ふとみへしが忽ち身際心惚て落馬したり與り昇館へ歸り  
 打臥と三時ばかり還は死せり飛脚を以て此よし申しければ平家の人と大に恐れ慄れけり  
 同七月十四日改元有て養和と号す其日除目行れ筑後守貞能肥後守に成て筑前肥後兩國を給  
 かと鎮西の謀叛人を平けん爲二千餘騎よて鎮西へ發向す又其日非常の數行れ去る治承三  
 年は流され給ひし人皆都へ召返され前關白入道松殿備前國より上せ給ひ妙音院太政大臣  
 副長公の尾張國より上洛せられた按察使大納言資方卿の信濃國より歸洛とぞ聞へし同廿八日

妙音院殿院參去ぬる長寛の歸洛より御前の雲子や賀王恩遠城樂を彈給ひしが養和の今の  
 歸京に仙洞にして秋風樂を彈給ふ何もの風情折を思召よらせ給ひける後心操こそめで  
 たけれ按察使資方卿を其日同しう院參せらば法皇敬禮有ていりやいかよ此なるの習ぬ部  
 の住居して野曲あどを今の定て迹形わらじと思し召とを先今様一ツあれかしと仰ければ資  
 方卿拍子取て指濃有なる本曾路川と云今やうを是に正しう見聞れたりしかバ信濃ははり  
 し本曾路川と歌とれけるこそ時取ての高名なれ妙音院殿尾張へ流され給ひし時罪あけし  
 て配所の月をみんとおひしれ心ある際の人願ふとぞ難く大臣取て事をもし給ひを彼唐の太  
 子實客白樂天海陽の江の邊に徘徊けん其古を想像鳴海瀟湘路遙く遠見して常の期月を  
 望浦風は唯と琵琶を彈じ和歌を詠じて等閑がてら月日を送り給ひしと或時當國第三の宮  
 田明神へ參詣り其夜神明法樂の爲に琵琶を彈助詠し給ひが本より無智の境なれば情を知  
 れる者もなし邑老村女漁人野更頭を低耳を彈といへ共更も清濁を分ち呂律を知となしされ  
 共胡也琴を彈せざりしかバ魚鱗踊進 虞公歌を發せしかバ深處動搖物の妙を究る時  
 自然に感を催す理なれば諸人身の毛壁と満座奇異の思ひをさす漸深更も及で譜杏湖の内



自然の花林の氣を合み流泉の曲の間より月清明の光を争ふ願くは今生世俗文字の業狂言綺  
 語の謬を以てと云明詠をして秘曲と彈給ひしりハ神明感應も堪給ひず寶殿大は靈動す平家  
 悪行なかりせば今此瑞相をバ争か拜むべきとて大臣感涙を流されしとかや扱も八月七日宮  
 庭にして大仁王會行る是ハ將門追討の例と聞へし九月朔日ハ純友追討の例とて伊勢太神  
 宮へ鐵の甲冑を參らせらる勅使ハ祭主神祇權大副大中臣定高之都と立て江州甲賀の驛より  
 前着しが同三日伊勢の離宮にして遂に死せり又調伏の爲五壇の法承て行ひける降三世の大  
 阿闍梨大行事の彼岸所にして寢死し死す神明も三寶を偕に御納受あしと云と掲焉又太元法  
 承つて行ひける安祥寺の實支阿闍梨ハ卷殿を進せたるを披見せられければ平家朝伏の  
 よしを注進せしここのいかよと仰ければ朝敵調伏せよと仰下されいゆゑつらく當世の脉  
 を見ゆ平家専ら朝敵と存られぬよつて彼を調伏なし何の咎やいべきと申ける此法師奇  
 怪之死罪かと流罪かと沙汰ありしかども大小の總劇は打紛れて何事もなく打過られしが平  
 家亡び源氏の世となり此事鎌倉へ聞へ頼朝卿其器量を賞せられ僧正みあし下されぬ同十二  
 月廿四日中宮院號を蒙らせ給ひ建禮門院とぞ申ける主上いまだ幼少の時母后の院号ハ

暹を始り申傳ふさるほどは今年も暮て養和二年となる節會以下常の如し二月廿一日太白昂  
 星を侵す天文要録にいづく太白昂星を犯せば四夷起又將軍勅命を奉つて國の境を出共みへ  
 たり其三月十日除自行平家の人々大畧官加階あがられぬ四月十五日前權少僧都顯眞  
 日吉社よして兼法法華經一万部轉讀致さるゝとありは結縁の爲よとて法皇も御幸せり何  
 者の申出たるやん一院山門の大衆は仰て平家追討せらるべしと聞へしかハ軍兵内裏へ參  
 して四方の陣頭を警固す平氏の一類皆六波羅へ馳集りける本三位中將重衡卿其勢三千餘騎  
 まで日吉社へ參向す山門は又聞へけるハ平家山攻せんとて登山として大衆東坂本へ降下て  
 ここのいよと檢藏す法皇も感應を盡かせおしします公卿殿上人も色を失ひ北面の輩の内よ  
 の餘りも周章喚びて黄水吐をの多りりけり洛中山門の騒動大方あらず去はばと重衡卿穴太の  
 連れて法皇を逃取進らせして都へ還御なし奉る一院山門の大衆は仰て平家を追付あるべしと  
 云とを平家又山攻せんと云事を見て迹なき慮事あり只天魔の能荒たるよこそと人申ける法  
 皇仰けるハかののみあらんは此後の浮物詣さどや浮事を心よハ任すまじきとやらんと  
 を仰ける同廿日二十二社へ宿幣使を立らる是ハ飢饉疫疾行るゝよ依てこハ一院とある  
 ハ法皇のほと之新

院あれはこそ一院とやなれ新院崩し給ふ  
後の法皇とすてよし却て紛りの口も聞ゆ

越前國火燧の城軍加賀國越前山軍本會殿妙策

同五月廿二日改元有て徳永と号す其日除目行りて越後國の住入城四郎資茂を越後守に任ず  
兄資永死去の聞不吉とて思ひ顔ま辭しけれ共勅命あれは分及べき是よりつて資茂を改て永  
茂と更名す去程に九月二日越後守永茂本會追討の爲越後出羽會津四郡の兵共を引卒し都合  
其勢四方餘賚信濃國へ後向す同九月常國備田河原の陣を取本會義仲の依田の城に在けるが  
三千餘騎よて城より出陣向ふ爰は信濃源氏并に九郎光朝が謀に三千餘騎を七手に分供し赤旗  
を流して手々よと上あそこの墨爰の洞より寄ければ越後勢共是をみかねぬや此國を身  
方の有けるの力付ぬとて勇と悦ぶ處も次第に近う成ければ相圖を定て七手ぐひとつて成赤  
旗共切弄させ兼て用意せし白旗を旗と懸し關を叩と作ければ越後の勢共是を見てこの謀ら  
れよけり敵何万騎あるらぬ取罷られては時よとて周營狼咽けるが或は川へ退入りた  
爰は懸所へ捲り墮され助る者少く討る者多かりける城米草が宗徳と頼切なる越後の  
備太郎會津の森丹房など云々大當千の兵共皆討取はけ永茂も手負でからき命生河に附て

越後國より引退き飛脚を以て汗進しければ平家の人々これを事共せられ京同十六日前右大將  
宗盛卿大納言も還着して十月三日内大臣は成給ち同七日假方のあがりて公卿の花山院中納  
言を結奉て十二人扈從し還給る藏人頭朝宗以下殿上人十六人前駆す中納言四人三位中將  
と三人迄坐り東國北國の源氏等降の如くよ起り合唯平都へ亂入して聞へしは其平家の人  
の風の吹やらん波の立やらんをもし知り給はずかやうは花やうありし事共中へ云かひまぐ  
ぞみへしざるはとよ今年も暮て壽永を二年も成るけり節會以下恒例の如し正月五日朝觀の  
行幸ありけり鳥羽院六歳よて朝觀の行幸ありし其例とぞ聞合ける二月廿一日宗盛公從二位  
よ叙せられ輔と其日内大臣をば上表して辭し給ふ是は兵亂愼の爲とぞやける南都北嶺の  
大衆熊野金峯山の僧徒伊勢太神宮の祭主神官に至るまで向平家を背て源氏よ心り通じけり  
四海よ宣言を成下し諸國へ院宣を遣せども皆是平家の下知と心得ぬなゆる隨附者さらにな  
かりけりさて又三月上旬本會次郎冠者兼仲鎌倉右兵衛佐殿と不供の事あり鎌倉殿の本會と  
追討せんとて十萬餘騎を卒し信濃國へ後向し善光寺へ着れしは本會三千餘騎を卒し依田の  
城より出陣渡り美濃の境なる熊坂山に陣を取乳母の次男へ中三權頭兼遠  
全共四郎兼平を使者よて右

兵衛佐殿の許へ遣し抑御邊の東八ヶ國を打從へ東海道より攻上り平家を追落さんどいしる  
 まふに某も東山北陸兩道を打從へ北陸道より攻上り一日を先平家を亡さんと存る處いか  
 かる子細有てか御邊と義仲中を違て平家を笑れんや但し叔父の十郎藏人殿まそは邊を恨る  
 と有とて義仲が許へ坐つると義仲すげなう應答并成やさんといかに侍へは是迄の打連す  
 たり義仲に於ては全意無らよいすよとされける右兵衛佐殿返辭は今こそ左様やされるれ  
 ども正しう頼朝と討べき企めりと告知らする者あり但しそれよは依べからずとて土肥  
 堀原を先と一數万の軍兵を指向らるゝよし聞ゆるよ依て木曾眞實意趣なきを顯さん為嫡子  
 清水冠者義重とて十一歳あるよ海野望月諏訪勝澤など云一人當千の兵を添て右兵衛佐殿の  
 許へ遣しければ鎌倉殿此上り賊よ意圖なりけり頼朝いまだ成人の子を持す好く更平子  
 に致さんとして清水冠者を相具して鎌倉へ歸へられぬ去程に木曾の東山北陸兩道を打從へ既  
 よ都へ押寄ると聞へけり平家去年の冬北より明年の馬よ秣飼軍有べしと披露ありしかば山  
 陰山陽南海西海の兵ども雲霞の如く馳凌る東山道の近江美濃飛驒の兵り参りされ共東海  
 邊江より東の兵り一人を参らす平家の人よ先木曾を討て鎌倉を討べしと評定有北國へ討手

と差向らる大將軍より小松三位中將維盛公故重盛公 越前三位通感門脇殿の 副將軍より薩摩守  
 忠度清盛公の 皇后宮亮經正參議經盛の物領 淡路守清房清盛公 七男 從五位下知教清盛公  
 の八男 侍大將よ  
 り越中次郎兵衛盛續上總太夫判官忠綱飛驒大夫判官景高河内判官秀國高橋判官長綱三郎左  
 衛門有國を先として以上大將六人然るべき侍三百四十餘人共勢十萬餘騎四月七日辰の一點  
 よ都を立て北國へ趣れける片道を給てければ相坂の關より始て路次よ持達權門勢家の正税  
 官物をも怖す一々皆奪取志賀唐崎三川尻眞野高島鹽津貝津の道の邊を次第よ追捕して通り  
 ければ人民堪ずして皆山崎よ逃散す大將軍の皆進み給へ共副將軍のいまだ江州貝津よ扣へ  
 たり中よを經正の幼少より詩歌管絃の道よ長せし人よて坐ければかゝる亂たる世よも風流  
 のみに心を澄し或朝潮の端み打出遙澳なる島を見渡し伴よいよ藤兵衛尉有教を召われり  
 いかある嶋ぞと問給へばわれまそ聞へたる竹生島よていとすければいさや参んとて有教と  
 安右衛門尉守教以下侍六人具して小船よ乗竹生島へ参られたる比の卯月中の八日のとなれ  
 ば縁よ見ゆる梢よの春の情を殘せりと疑れ洲谷の鶯舌聲老て初音床しと子規折知顔よ告渡  
 り松よ藤浪咲かゝりて賊よ面白かりしかば經正いそぎ舟より下岸よ揚て此島の氣色を見給

ふに心を言及られず彼秦皇漢武或の童男少女を遣し或の方士をして不死の薬を求しむ遂  
 菜をみせんハ竟還じと云て徒舟の中にて老天水茫茫として露滴さりけん蓬萊洞の有さ  
 を是の過じと思われける或經の文は閻浮提の内は湖あり其中は金輪際より生出たる水精  
 輪の山あり天女の栖處といへど則此島の御事として經正明神の廣前より頼井ぬ夫大辨功德天  
 の往古如來法身大士と妙音辨才二天の名は各別とといやせ共此地は一跡よして衆生濟度し  
 給へり一處歩を廻る輩の所願圓滿すべ承りれば頼母しうこそとて醉み法施せら居らる  
 は漸日昏居待の月指ひて海上も照渡り社壇を彌輝て誠は可快かりされハ常住の僧これの  
 開ゆるは事として琵琶を奉る經正是を取て彈給ふ上玄石上の秘曲は宮の中を澄渡り誠は面  
 白かりけれハ明神を感じ給ひけんと思して經正の袖の上は白龍現じてみへ給へり經正餘り  
 の恭さに暫く琵琶指置ておくこそ思ひつゝなられたと

千はゆる神のりのりの叶へるくも色の顔にけり

目の前まで朝の怨敵を平け凶徒を退んと疑なしと船で船が取乗竹生島を山られしとかや去  
 ばとよ木曾義仲の自らの信濃は在ながら越前國火燧が城を搦へける此城郭は籠る勢平泉寺

の長史齋明威儀師富樫人遺佛經稻津新介齋藤太林六郎光明石黒宮崎土田武部入善佐美を始  
 六千餘騎にて籠りける本より究竟の城地盤石時廻て西方は壁と連ねたり山を後みむ田  
 前よあつ其前よ能美川新道川とて流れたり彼二つの川の落合に大石を累擡大木を伐て逆  
 茂木より引柵を夥しう搦上たれば東西の山の根の水壑混て湖は向へる如し影南山を浸し背  
 て兎波たり浪西日を沈て紅ふして隠倫たり彼無熱地の處は金銀の砂は散見明港の流には  
 徳政の船を浮たり我朝の火燈が城の築池の堤を搦へ水を濁して人の心を誰ま繕みくしむ  
 容易渡すべし儼なかりしが平家の大勢向ひの山は宿して徒は日を送ける此城郭は籠り  
 たる平泉寺の長史齋明威儀師平家に志深かりければ山の根を廻り消息を齋堂目に入て平家  
 の陣へ射込たり兵共是を取て大將軍の前よ參城見けるに此川とやハ控古淵はあらず二日  
 山川を難留水を濁して人の心を誰ま繕みくしむ夜よ入足輕共を遣し柵切落させられん水は  
 と落べし急ぎ渡させ給へ愛の馬の足立好所よては後矢とバ仕らんくや者ハ平泉寺の長史  
 齋明威儀師が中状とぞ母たりける平家斜みらず悦び夜よ入足輕共を遣し柵を漸落させられ  
 じらハ城の山川のとゆ程な水は落しけり平家運させずと渡す城の内よも六千餘騎防

其勢無勢對揚也難きよ飛明は平家一附で思ひし宮權入道佛指宿維新  
 介齊藤大將六郎光明 叶しきや思ひけを加賀國へ引越せ白山河内を國を取平家頼て加賀國  
 へ打越富樫林が城郭三ヶ所燒拂ふ何の面をむくも共々へ入りけり國々宿々より飛脚を以  
 て此山都へ入けるよぞ大臣殿を始め一國の人々更悦ひあられけり同五月八日平家の加賀國  
 越前より若て大手搦手二手よ分つ大將は小幡繼盛三位遠征侍大將より越中次郎兵衛  
 盛緒と始として其勢七萬餘騎加賀越前之境なる砥浪山へ向れける搦手の大將は藤原守忠盛  
 皇居宮内正淡路守清房從五位下知政權大將には三郎左衛門尉有國を先とし其勢三萬餘  
 騎能登越中境なる志保山へ向れける木曾殿表比越後の國府に在けるが是を聞五萬餘騎  
 も發して砥浪山へ馳向ふ義仲が軍の吉例なればとて五萬餘騎を七手よ分の先發父十郎兼光  
 行家一萬餘騎の志保山へ向廻り次郎兼光へ今井兼平の兄二世取違ふ非に落合五郎兼行の弟七千餘  
 騎よて北黒坂へ差進す仁科高梨山田次郎七千餘騎南黒坂へ進しけり二萬餘騎の砥浪山の下  
 越長原の柳原林木林より引隠す今井四郎兼平六千餘騎より越前を打渡り日宮林の陣を取木曾  
 殿本陣一萬餘騎小野部の渡をして砥浪山の北の端羽生に陣を取たりけるよぞ諸將より

なる平家大軍あるべけれ平軍の定て掛合の暇あらんかけ合の軍と勢の多少よよるとな  
 じ大勢湯掛つて取籠られての時よから先謀に白旗三十流先立て黒坂の上よ押立たり  
 平家見てはは源氏の先陣向ふる何十程騎が有らん取籠られての時よまじ此山四方  
 岩石なれば搦手へはよ廻らじと暫く下居て馬休むと砥浪山よ下居んよ其時義仲皆く應  
 答林に持成日を待昏し夜よ入て平家の大軍後ろの俱利伽羅谷へ追落さんと思ふとよされ  
 ければ皆一同よ大將の策圖よ當んと覺いよと先白旗三十流黒坂の上よ打立たれば案の如  
 き平家は見て徒早源氏の大勢向ひよるを取籠られな愛ハ馬の秣飼水の便も能くよみゆれ  
 暫く降居て馬人よに懸んよと砥浪山の山中後ろの馬場と云處よ下居たる木曾殿羽生に陣  
 取て四方よ吃と見廻せよ夏山の墨緑の樹間より朱の瑞籬圍見て形削木造の社も前より繼  
 柄立たりける木曾殿國の境内者よ召て尋らるよおれをよ八幡よ渡せ給ひよ所を頼て  
 八幡の沙頭よはよ木曾殿斜らす皆手書よ具せられたりける大夫房覺明を召て吾何心  
 なく尋たるに幸ひお新八幡の寶前よ近付奉つて既よ合戦を遠んとするよ後代の爲且の當時  
 所禱の爲願書一筆進せよと思ふ汝是にて認よとよざるよ覺明馬より下て紙おし通筆を取覺

明其日の爲、赤坂の直垂、黒糸の鎧、黒漆の太刀を帶、二十四差たる黒幌の矢筒、塗籠藤の弓脇、  
 袂み兜の印で高紐、掛たり此法師本備家、あて藏入道廣と云、勸學院、侍ひしが出家の後、は最  
 乗坊信救とぞ名乗り、常、南都へを通ひけり、一年高倉宮三井寺へ入、御の時、山門、奈良へ、腰狀  
 を遣されしが、南都の大衆、いか、思ひけん、其返、腰、此信救、よを辨せける、抑、清盛入道は平氏の  
 續、藤原家の塵芥と書たりしを、太政入道、大、怒、何條、其信救、めが、淨海程の者、を平氏の續、藤原武  
 家の塵芥と書たるぞ、奇怪也、急ぎ其法師、と擲、捕、て、鼻、首、せよ、と、宣、ふ、間、南都、を、堪、ず、して、北國へ、落  
 下、ぎ、水、曾、殿、の、手、書、して、大、夫、坊、覺、明、と、改、む、此、願、書、婦、女、子、の、解、諸、も、願、書、終、け、れ、ば、其、身、と  
 じめ、十三、騎、が、上、矢、の、鏑、を、接、風、書、は、取、添、て、八、幡、の、寶、腹、を、納、め、ける、思、し、ひ、か、を、眞、實、の、志、ニ、ツ、な  
 ぎ、を、照、覽、ま、し、く、けん、妻、の、中、より、山、鳩、三、つ、飛、來、て、白、旗、の、上、に、飛、翔、者、神、功、皇、后、新、羅、を、攻、ま  
 せ、給、ひ、し、時、味、方、の、戰、性、も、異、國、の、軍、強、く、し、す、す、で、よ、角、よ、と、み、み、し、時、皇、后、天、よ、後、新、羅、あり、し、か  
 ら、雲、の、中、より、靈、鳩、三、つ、飛、來、て、身、方、の、楯、の、面、に、置、れ、異、國、の、軍、不、目、に、敗、れ、け、り、又、先、祖、續、藤、原、朝、臣  
 奥、州、の、眞、實、任、宗、任、を、攻、給、ひ、し、時、身、方、戰、ひ、弱、く、因、城、の、軍、強、く、し、て、既、に、危、く、み、み、し、が、頼、義、朝、臣  
 總、の、陣、に、向、ひ、是、は、全、く、私、の、火、よ、から、ず、神、火、な、り、と、て、火、を、放、つ、風、怒、ち、り、夷、賊、の、方、へ、吹、渡、り、因

川の城、燒、落、ぬ、其、時、軍、破、れ、て、貞、任、宗、任、亡、び、け、り、水、曾、殿、か、や、う、の、先、蹤、を、思、ひ、出、て、急、ぎ、馬、よ、り  
 降、兜、を、脱、手、水、漱、を、して、此、靈、鳩、を、拜、せ、ら、る、心、の、中、こ、を、ゆ、し、け、を、源、兩、陣、の、間、繼、三、回、ばかり  
 ぶ、寄、合、せ、た、る、が、源、氏、を、進、す、平、家、も、進、ら、ず、や、あ、つ、て、源、氏、の、方、よ、り、精、兵、を、十、五、騎、撰、て、楯、の、面  
 に、進、せ、十、五、騎、が、上、矢、の、鏑、と、唯、一、度、は、平、氏、の、陣、へ、射、入、ら、れ、ば、平、家、も、十、五、騎、を、出、し、十、五、騎、の、鏑  
 を、射、返、さ、す、源、氏、三、十、騎、を、出、し、三、十、の、鏑、と、射、す、れ、ば、平、家、又、三、十、騎、を、出、し、て、三、十、の、鏑、を、射、返  
 さ、す、源、氏、五、十、騎、を、出、せ、ば、平、家、も、同、じ、く、五、十、騎、を、出、し、百、騎、を、出、せ、ば、百、騎、を、出、し、兩、方、百、騎、を、陣  
 の、面、に、進、せ、互、に、勝負、せ、んと、早、り、ける、を、源、氏、方、よ、り、禁、し、く、制、し、て、態、と、勝負、とな、さ、ず、かく、應、答  
 日、を、俟、暮、し、夜、入、て、平、家、の、大、勢、一、時、は、盛、よ、せ、んと、の、語、平、家、の、夢、に、を、あら、で、借、り、應、答、日、を  
 暮、す、こ、と、誓、な、けれ



まける又備中朝の住人瀬尾太郎兼康の陣ゆる兵は有けれ共其邊や襲まけん加賀國の住人倉光次郎成澄と手に掛つて生捕にこそせられけれ又越前國火燒の城まで反懸せし平泉寺の長吏齊明威備師も囚られ出來る木曾殿其法師へ餘な憎きよ先斬まで首を刎させたる大將惟盛通盛若ありしと加賀國へ引退く七万餘騎の中より僅二千餘騎こそ遁れたれ同十二日奥州赤衝が前より木曾殿へ龍蹄二匹奉る一匹の白月毛一匹の連錢落毛也願と此馬も鞍置て白山の社へ神馬と立らる木曾殿今は思ひ置となしとて坐ゆるが但し叔父十郎藏入殿の志保山の戰こそ覺束あけれいざや行てみんもて四萬餘騎の中より馬人を勝出し二萬餘騎を従へ馳向のる愛ふ水貝淡を渡らんとし給ひける折節潮満て深き渡りぞ知らざりけれ木曾殿先鋒の鞍置馬十匹も追入れたりしと鞍置馬千たる程にて相違なき向の岸も着けるゆゑ是をみぞ渡がらしを渡せやとて二萬餘騎さつと渡り見給へば案の如く十郎藏入殿も手に掛りされ引退き人馬の息を休る處も荒手の源氏二萬餘騎平家三萬餘騎が中へ駈入挿れもみで火出る程にぞ攻たりける大將知教討れける是は入道殿の末子なほは其外兵多々亡びけり平家此所を引退され加賀國へ引退く木曾殿は志保山打越て能登の小田中新王塚の前へ陣を取諸社へ

神領を寄られける多田八幡へ蝶屋の庄菅生の社への能美の庄氣比の社への飯原の庄白山の社へ横江宮丸二ヶ所の庄と寄進し平泉寺へは藤島七郷を寄られける去る治承四年佐殿義兵を起されし始石橋山合戦も佐殿を射たりし武士共皆逃上て平家の味方とありける宗徒の人々よは長井齋藤別當實盛浮葉三郎重親保野五郎景久伊藤九郎祐氏真下四郎重直是らけ軍のあらん程暫く休んどて日毎寄合く巡酒と慰みける先長井實盛が許も寄合たる日實盛すけるは情々當世の跡をみるお源氏方は彌々強く平家の負色も見へていひざ各木曾殿へ參らんはいかよとやに皆左もいはんどやける次の日浮葉三郎が許も寄合し時齋藤別當さてを昨日實盛が許つると各いふにと云ければ保野五郎景久すへみ出流石我等の東國よてい人よも知られ名ゆる者よは吉凶も付彼方此方へ參らんを見苦しかるべく人々の心の知らず景久も於てい此度平家方よて討死と思ひ切いとすに實盛嘲笑と誠い各れ決心をか引んとてすせしと實盛を今度北國よて討死せんと思ひ定ていへば二度生て都へ歸るまじと大臣殿へを申上人よも其様を申置いと云けれは皆此儀も同じ其約束を違はとや當坐も在ける二十餘人の侍共今度北國よて一所お死しけるこそ無難なれ平家へ加賀國藤原に引退きて人馬の



龜をぞ休けり同五月廿日木曾殿五万餘騎よて篠原へ向れける木曾殿の方より今井四郎兼平  
 先五百餘騎を率い馳向ふ平家の方の畠山庄司重能山田別當有重宇都宮左衛門朝綱是より  
 大番役よて折衝在京したりけると大臣殿等い故き者軍の勝を捉はんとて今度北國へ向  
 然れたり彼等兄弟三百餘騎よて打向ひ畠山冷井利廿一日の午刻草を馳せ無事日也隨身并  
 馳して戦ひけるが今井を兵士多く亡び畠山を家守郎從多し割せ力及び引退り平家方は馬  
 橋判官張綱五百餘騎よて攻かへる木曾殿の手取り頼口次郎兼光落合五郎兼行三百餘騎  
 馳冷源平挑戦を以て暫く高橋が勢の國々の駐武者あり延々は落行はせ高橋殿は  
 ゆるる力及す唯一騎南をさして落行處は越中國の住人入善小太郎行重能敵と相とめし  
 を合せて馳來り押並て無手し組入善物身の力を振て落合を討討すや高橋は善を  
 の前輪は推付らつとを動かさずして君い何者を名乗聞らば云れり越中國の住人入善小太郎  
 行重生年十八歳と名乗れり高橋涙をせりしは流し物持無難や去年後れたる長瀬守子  
 在り今年十八歳と名乗れり高橋涙をせりしは流し物持無難や去年後れたる長瀬守子  
 待んとて馬より下りて馬籠居たり又善も休らひ居たりけるが長は敵我を助けられ共い

にもして討つやと思ひ居たるを高橋より心付ず打解物語をかし居ける入善の聞ゆる早業  
 の男にぞ有けり高橋を見ぬ間より刀を抜立ちわが公高橋の内甲を健に刺刺せり瘡處を入善が  
 船等せり馳り三隊かけ來り落合たり高橋は逃げ共手は負たるは越國の餘多かり遊  
 なる時節を其よてつひに討ける平家方より武藏三郎左衛門有國と云侍大將三百餘騎  
 て馳ひければ木曾殿の手より仁科高村山本太郎五百餘騎よて引受双方入り戦ひけり相  
 國餘かよ深入りて戦ひ馬を射させ歩立よなり兜を打落させ大重よ成て切懸り矢種射した  
 る上矢七ツ及射立られ敵方と睨んで立死な死たけける大將かやえなる上は其勢皆けは  
 ぶ落行けり武藏國の住人齋藤別當實盛は存する旨有り赤地の錦の直垂は敵軍系威の鎧着て  
 鐵形打たる兜の緒をじめ金作りの太刀を帶藏生の矢を自滋藤の弓を持連錢草毛の馬は金  
 輪の鞍置で乗たりけるが身方の勢は落行け共唯一騎返じ任せり防戦は木曾殿の手取り手  
 塚太郎光盛すもみ出あなやさしむかある人よて候や御方の御勢落行ひも唯一騎殘り餘  
 優は勝ひ名乗せしむと詞をかくれればかくいふ和殿の誰ぞ信濃國の住人手塚太郎兼光盛と  
 名乗ける齋藤別當よては能敵相手に取て不足なむ但し和殿を下るよいから存する旨はかれ

名乗るも及じよれ組手塚として馳双る處も手塚が郎等主を討せしと中より隔り齋藤も押並  
 べ引組たりあつばれ汝の日本一の剛の者と組たる殊勝さよとて我乗たる敵の前輪も押付少  
 を動さず首掻切て捨よける手塚の郎等の討るを見と左手に廻り鎧の草摺引上て二刀刺弱  
 る處を組伏たり齋藤別當心は矢猛又思へ共軍にハ嵐の手に負つ其上老武者ゆゑ終り下も成  
 けるを手塚變來る郎等に首とらせ木曾殿の前も參光盛こそ奇異の曲者と組打て侍かと思  
 へバ錦の直垂を着て以又大將軍かと思へハ續く勢もいはず名乗くとしててを殺す名ものら  
 ずハ聲は坂東時ふていもすけれバ木曾殿哀是ハ齋藤別當もあらんそれあらんよハ兼仲上  
 州よて稚目も見し時白髪しろうかの精尾なりし今ははや七十も餘り白髪しろかみも成ぬらん又鬚ひげの黒  
 きころ性なまじりけれ堀口次郎兼光ハ年來馴遊で見知らんぞ堀口召せとて呼出さる堀口唯一目見て  
 かな無熱齋藤別當よていと涙なみだを流す鬚ひげ鬚ひげもいかにととさるよ堀口涙をいさへず横後  
 常々物語いひしハ六十は餘て軍よ向んよは鬚ひげ鬚ひげを黒く染掛やがうと思ふ也其ゆゑハ若原  
 ぼ争て免を奪んも長氣ながいきなし又老武者とて人に侮られんも口惜かるべしとすいひしが誠まこと染  
 せぬ洗あらせ御覽ごらんいへと則洗すせられしかバ白髪しろかみも成たり又錦の直垂ひたれ着たるも最後の暇いとまする大

臣殿へ参りてかくすせば實盛が身一ツまはとね共先年坂東へ下りし時水鳥の羽音に愕おどろき矢  
 一ツを射すもて駿州蒲原より迎上りいと老後の恥辱唯此事には今度北國下りいハ定て  
 討死仕うたし實盛をとい越前國の者よていひじが近年は領に附られて武州長井も居住仕すまは  
 右郷への錦にしきを着て歸るとす事のいへハ錦の直垂ひたれを免ゆるいへかしとすければ大臣殿おのも  
 たりとて願を御料ごりょうわかしとぞ聞へハ昔の朱買臣ハ錦の袂たもとを會稽山かいしんに懸かし今の齋藤實盛ハ  
 其名と北國の巷ちやうに揚ありかや朽くせぬ空しき名のと留て骸かみハ越路の末の塵ちりとなることを哀あはなれ去  
 ぬる四月廿七日平家十万餘騎よて都を用し形勢ハ離面りめんを向へしとぞとへさりしよ今五月下  
 旬しゅうも都へ歸登る勢せい僅二万餘騎流を竭つきし流る時ハ多く魚を得といへ共明年魚ういなハ林はやしを焚やて獵  
 時ハ多く獸けものを得共明年獸けものもし後と存じて少くハ殘さるべかりしものをとす人有あじ又上  
 總守忠清なかつら飛彈守景家かげの去り年故入道にせう薨しなせられし時ときいづれも出家して有けるが今度北國よ  
 て子共皆討うたぬと聞て其思おもひの積つみや遠敷とほぢさ死しよ空しく成けり是を始はじとして親おやの子こも後れ  
 妻つまの夫おとこも別れ歎なげき悲かなむと限かぎりし凡京中おほみやの家人かみ門戸かどを閉て朝夕鐘かね打鳴なし聲こゑよ念ねん佛ぶつせしガ  
 遠國とくごく近國きんごくも首かみかくの如し六月朔日しつげつ祭まつり主神しん祇ぎ楯たて大副おほさへ大中臣おほなま親おや俊とよを殿上とのうへの下口したぐちへ召よれ今度兵卒

譲らば伊勢大神宮へ行幸あるべきよし仰下さる太神宮の昔高間原より天降せ給ひて垂仁天皇二十五年三月大和國笠縫の里より伊勢國度會郡五十鈴川の河上下津磐根より大宮柱を廣敷立て崇初奉としより以來日本六十餘州三千七百五十餘社の大小の神祇冥道の中より無双とされどを代々の帝遂に臨幸のあかりしよ奈良の帝の時左大臣史の孫參議式部卿宇奈の右近衛少將大宰少貳藤原廣嗣と云入あり天平十五年七月肥前國松浦郡にて數万の軍兵を集國家を危めんとす其時大野東人を大將として廣嗣追討せられはる帝後祓の爲伊勢大神宮へ給て行幸有し其例とを剛へし後廣嗣の胆前より都へ一日より上り降する馬を持てけはるまは追討せられし時地方の兵共路失討れしとて件の馬より打乗唯で駿海中へ馳入けるをれは後其亡難あれて常の恐るし事共多かりはり天平十八年六月十八日筑前國三笠郡太宰府の觀世音寺供養の導師支助僧正なりしが高座を登り鐘打鳴す時俄よ天降曇々雷鳴し一時彼僧正の上より落掛り其首を取て雲中よ入よける是の摩訶羅刹の所せられしゆるとぞ聞へ七此僧正の吉備大臣入唐の時相傳つて渡り法相宗を日本に渡せしは唐人支助の云を難は還らばと云音ありいかば此僧歸朝の後難を逢ふべしとせしむるかや同十九年六月十八日

結願被り支助と云動を普て南都興福寺の庭に落し人ならび二三百人の聲して虚空に唯と笑ひしはかや此時法相宗ありて依て其弟子共被救靈天蓋を取て塚に築き而臺を築けり今存せりはつて廣嗣が七靈を崇祀肥前國松浦今の院の宮に云わ是は摩訶羅刹天皇の弟持平城の先帝侍誓の勳に依てすや世を亂えし給ひし時帝は新の爲第三の皇女新智内親王を賀茂の齋院に立進させ給ふ是齋院の始あり朱雀院の時を純友追討の例とて入極は是時御神樂あり今度も其例たるべしとてさまの御新共有しとてかや法相宗は木曾義仲歸朝の國府に居て家の子郎等召集め評定す義仲近江國を経てこそ都への上るべきふ例の山僧共の勳ぐとをやめらんづらん掛被て通らんとて安かれ共當時の年家ころ佛法共いとす寺を七し僧と失ひ悪行をば致せ其を守護せんとして上洛する義仲年家と一ツあられんとて山門の衆徒よ向て合戦せんことを建ぬ二の難なるべし是こそ安大事ありやせんと有ければ手書よ具せられし大夫坊覺明すへみ出て守ける山門の衆の三千人待ふが必ず一身同心あるといひ守或り平家も同心せんと言をいひ又源氏も亂んとや大衆をいらん所餘衆を遣し置いべし叛謀も其様のまへいんと木曾殿此義尤然るべしとて書きて覺明は煤炭を普せ

山門へ送られける其趣ハ義仲信平家の惡逆をみるハ保元平治以來入臣の禮を失ふされ其貴賤手を束縛素正を戴 恣ニ帝位を進退し飽迄郡國を領し權門勢家を追捕し卿相侍臣を損亡し其資財を奪て郎從々分與へ彼庄園を沒收して子孫に附治承三年より法皇を離宮ニ押籠奉り卿相雲客を流し高倉宮園城寺入御の時義仲既ニ命令を賜るの間難を舉んと議するハ平賊巷ニ滿上洛の道を失ふ宇治橋の軍三位入道賴政父子命を輕じ義を重じ一戰を勵すといへ共多勢ニ敵しがたく空しく戰死せり依て東國北國の源氏等此度參洛して平家を滅さんと欲す義仲信州を出しより城永茂を敗り越州砥浪加州篠原其外數ヶ度の戰攻れハ落討ハ降る是併ながら義仲が功ハあらず君の爲に忠を盡し民の爲に憂を拂んとする赤心神明佛陀の助給ふゆへ之今や入洛せんとして比叡の麓を過抑々天台の衆徒ハ平家ハ同心するや源氏ハ與力するや若惡徒の平賊を助バ衆徒と戰んしからバ叡山の滅亡應と旋べから悲かな平氏靈標を惱し佛法を滅す問其惡逆を靜んとて義兵を起し忽ち三千の大衆に向て不慮の合戰を致し叡山立地ハ狐狸豺狼の栖と變せんハ醫王山王ハ憚覺ふ此ゆゑを以て行程ハ遲留せば朝廷發意の臣とすめてあかく武略の瑕瑾を遣さん進退に迷ひ豫て案内を啓する所之數ハ

大衆神の爲佛の爲君の爲國の爲源氏ハ同心して凶徒を滅し鴻化を浴せんことと述べて源永二年六月十日惠光律師御坊の宛名あり山門の大衆此狀被見して其の如く或ハ平家ハ同心せんと云衆徒もあり源氏ハ附えんと云もあり野備區となりしが併其兇賊しけるハ我等専ら金輪聖主の天地長久を祈奉る中より平家の當代のは外賊山門に於てよとに歸敬をいたす然といへ共惡行法ハ過て万人是を背國ハ一討手を遣すといハ其却て歸賊ハ是なる源氏の近年度はの軍ハ討勝て武運すでよ聞んば何ぞ當山ハひとり宿運盛ある平氏ハ同心して源氏を敵とせんすえらるく平氏信濃の義を翻し源氏合力の旨を任すべしと三千一同ハ兇賊し七返牒をを送りけれ木曾殿臣下を召集め發明ハ返牒を讀しめらるるハ仰下ざるハ趣委曲御事貴君君忠の爲軍を被され勘等兩年も過ざるに其名號ハ四海ハ流る今又山門の大衆台方の旨を頼越るしぬるうへハ更ハ貴命に従ひ止觀十乘の梵風好相を和朝の外ハ拂ハ瑜伽三密の法雨ハ時俗を覺年の昔ハ同さん衆徒の兇謀かくの如し情ハれを察せよと誓たれハ木曾方中從安塔の思ひをまして悦びぬ平家の是を夢としハ給ハ與福園城兩等の讐儀を銜折なれハ賊ハ其庶まも山門ハ於てハ怨を結となく山門を亦常家は家忠と存せず然らバ山王大師ハ所發す



新判官義康が子矢田判官代義清大江山を經て上洛す其すあへり又攝津國河内の源氏等同心して借入都へ亂れ入よしすなれば平家の人と此上の方及す只一層のいかまを成なるとて方へ向られし討手共皆都へ呼返されけり帝都名所の地鶏鳴て驚きとなし治れる世だもかきのごとし況や亂れたる世よ放てをや吉野山の奥れ奥へ入るやと思召れけれ共諸國七道悉く皆何くの浦か懸かるべき三界無安猶如火宅とて如來の金言一乘の妙法され何のい少も違ふべき同廿四日の小夜更方より前内大臣宗盛公建禮門院の渡らせ給ふ六波羅池邊より來てすさるゝの木曾既よ北國より五万餘騎にて攻上り比叡山東坂本より充満て以其手の橋六郎太夫坊覺明六千餘騎天台山より上り三千の衆徒も一身し唯今都へ亂入よし聞へは人の唯都の内よていかまも成んとす合せはひしが親女院二位殿と愛目見せ進らせんと口惜りいへば院をも内をも取奉て西國の方へ行幸御幸をもなし進せやとぞんじいと寄ければ女院唯今のさる右を足下の言ひよことめらめとて御衣の袂袂と餘るは泪せさかね給ふ大臣殿も直衣の袖絞る手なみへられけるされば法皇と平家親王と西國方へ啓行へしなとすを内と隠し召ひねるや有けん其夜半ばかり接察使大納言資方卿の子思右馬頭實時ばかりを

供にて密に御所を出させ給ひは行儀も知す御幸なる人のさらし知さりけり平家の侍は堀内左衛門尉季康といふ者あり小膳男よて院よを召仕れしが其夜しを伊宿直ふ邊り遠邊上侍はる常の御所のち方を如何か物騒しう女房忍びねに泣などし給へも何事ならんと聞よ俄に法皇見へさせ給ねば何方への御幸やらんとや聲すめお涙まじとて懸き六波羅へ馳來り此まじすたりければ大臣殿定て解とあはらんとし思ひれあかき懸き御尋給ふよ現よも涙せ給へ御前よ侍よ女房連二位殿丹波殿以下一人を働ら給ふひるまやと問せ給ふよ我こそは行儀知たかどすさるゝ方一人をなきまじ大臣殿も力及び給ひて益々六波羅へ歸られける此事追し沙汰し京中の騒動斜ならず況や平家の人と情疎れける有さまの家より敵打入たり其限おれば是よの過じとみへし嫌てハ院も内も取奉つて西國方へ行幸御幸をも成書らせんと支度わりしをかく打捨給ひぬれば頼む樹下よ雨の堪ぬ心地せられせめてハ行幸ばかりを成まひらせよやとて明る卵の刻行幸の御輿を寄さりければ主上今年六歳はきだ幼うまじませば何のは必さく召れけるは同輿よハ御母后建禮門院參らせ給ふ神授寶劔内侍所印輪時札を土鈴鹿等とぞと取具せよと平大納言時忠卿下知有けれ其餘り情痕取取懸動多く盡御座の御



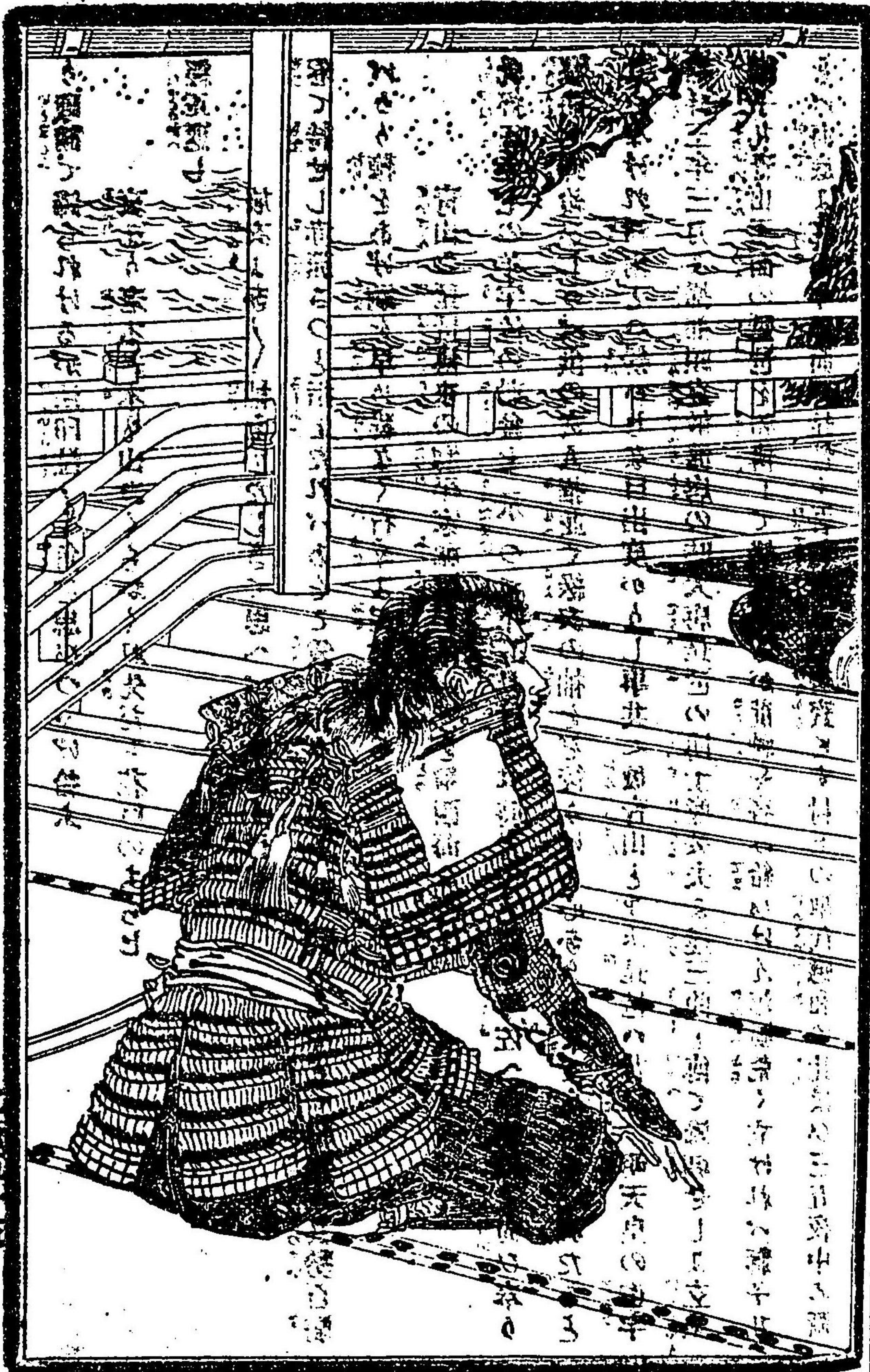
の途へもまゝ入ても洗み限る別路までを後れ先立じとこと思ひしか其今日の御  
 憂有様共よて軍の陣へ逃げし具足し奉り行末をしらぬ殿の空よて憂目をみせ進せんも我身  
 なから方見かるとし其止今度の用意をいひや何國の油よも必安う落着たらば其より迎へ入  
 をこそ進せめとて思ひ切てぞ立れける中門の廊よ出て鎧をとつて若馬引よせ既よ乗んとし  
 給へば若君御君走り出交の鎧の袖草持よ取附こつたれば何處へとて渡らせ給ひいやらん吾  
 も参らん我も行んと慕泣給へば世の縁を廻て三位中將いよせせんかたなくともへられけ  
 るは弟新三位中將資盛を中將清經同少將有基丹後侍從忠房 公五男 備中守藤原同少將五  
 騎馬よ乗ちがら門の内へ打入庭よ加大音揚行幸の途よ延させ給ふらんはいはや今邊運  
 いと聲よよすければ三位中將馬よ打乗出られけるが又引返し縁の際よ打寄馬の町よて御  
 藤を颯と捲上是は實いへ少き者共が餘りに慕ひを左右寄藤んと仕るまで存外運命よなり  
 此と宣ひを敢ちばらんと位給へば庭よひかへ給へる人々を借よ頼を能る又とてよ三位  
 中將の年比の侍に齋藤五齋藤六とて兄ハ十九弟ハ十七になるあも中將の侍馬の左右水の  
 は取付て何國迄を供仕りばはんとすければ汝等が父齋藤別當資盛が北國へ入りし時供

たさんど云しを存る旨が有ぞとて汝等を親置竟に北國は討死したりし故き者ふてかゝ有  
 んま地帯で悟たるまことをの六代を留て行よ必安う扶持すべし者な吾を唯理を非は柱を留  
 れか池と宣ひば兩人の者其力及す涙を押で留りぬ北の方の年來日本まかす情なき汝を  
 そかけての思ひさ進しがとて引被てぞ臥給ふ若君御君女房達の御縁の外影動ひ出陣をわか  
 ひは嘆き叫び給ひけり其聲々耳の底よ留つてされば西海の立波の上吹風の音ききぞを聞操  
 思れける平家の都落ちの池殿小橋殿八條西八條以下入々の家や廿餘ヶ所其外附々の聲の宿  
 房や京白河四五野間が在家よ火よかけし度よ皆焼拂ふ或は聖生臨幸の通や風聞空くて候を  
 嘆し慈興徒跡を留む或は后妃遊宴の御や女房の嵐聲悲み接連の鏡色懸法粧鏡鏡帳め  
 戈林釣津の館楓棘の座燕窩の極多日の經轡を空しうして片時の灰燼と成果ぬ況や御從  
 め逢津に於てをや況や雜人の屋舎に於てをや餘路の及所在や所々數十町と強具忽ち出亡ひ  
 始藤原の御刺棘よ移り藤原院よ遠く感陽宮の煙曉眼を隠しけらんかきやをををををををを  
 の函谷二層の峻きを圍りせしめ其北秋の強きは是を破られ今ハ洪河津川の深きと願しか其  
 東夷の猛りも憂を取れりや豊國もよや忽ち藤原の卿を攻出されて置し無智の境も身を寄死









二番目十五



二番目十六

里倉宮亮  
正御室御所  
青山の琵琶  
之奉る圖

月新

此の御所は...  
 正御室御所...  
 青山の琵琶...  
 之奉る圖...  
 月新...

り殿前へ歸られけるが法印位く角と思ひつゞけ給ふ

衰なり老木若木も山きくらなくれ先だち花のよらヒ  
經正返し

旅衣よきく袖をかたしきて思へば我の意く行なふ

卷て持せし赤紙さつと指止たればあそこ爰に扣き待奉る侍共あそそとて難儀其勢百騎  
バウリ種をわけ駒を早め程なく行幸は遅村奉る

青山の琵琶傳奉の羽平家福源を落部を解西海は深よ

此經正十七の年宇佐の勅使と承つて下られける食時青山を賜て宇佐へ歸り候へば  
秘曲を彈給ひし御供の宮人推並て緑衣の袖をど絞りける心あき奴までをいひ難儀たる

ことなけれ村雨との紛ひせな目出度かりし事共へ故青山とすは琵琶の昔上は明天皇の御宇  
嘉祥三年三月は掃部頭貞敏渡唐の時大應琵琶の博士藤原兼房と逢三曲と傳へ給朝せしは玄象  
獅子丸青山三曲の琵琶を相傳して給り候るが龍神や呑み給ひけん浪風荒く立けれは獅子丸  
とハ海底に沈ぬ事三曲の琵琶を吾朝帝王の御寶とす村上の聖代應和の比はひ三五夜中の新

月の色白くは涼風飄りたりし夜半は帝御涼殿に於て玄象をを遊されける時長月のおと

くする者御前へ参りて優れ氣高き聲を以て唱歌を自出たう仕る帝暫く琵琶を御せ給  
ひて抑致りしかる者よそ何國より來り候るぞと仰られ給て是の昔貞敏は三曲を傳へ給

ひし大唐の琵琶の博士藤原兼房と逢三曲の中は秘曲と一曲奏せる罪は依て魔道は  
沈む仕る今君の御撥音妙は聞へ侍る間参入仕る所之類あり此曲を君は授け奉らせ佛果善

徳を稱す大さな御中御前へ立られたりける青山を取轉柱を給て此曲は君は授奉る三曲の  
中へ上は名は是を其後の君も巨も恐れ給ひて遊し舞をせ給ひ給てしを仁和寺

の中夏山の臺の縁の木間より有明の月の出けるを撥面を書きたりけるゆゑ青山と名付らる  
を象よも相劣ぬ希代の名器之池大納言頼盛卿を池殿は火をかけて出られたるが鳥羽の南の

門はて忘れたるを有とて鑑は附たる赤印共撥り捨て其勢三百餘騎都へ歸り上られけり越  
中次郎兵衛盛頼弓脇狭み大臣殿の御前へ参られ給は池殿は留り依て多くの侍共留

り候奇世は變に池殿迄は其恐れ候へ侍共は矢一ッ射かけ候へやと仰けれは大臣殿

今是程の形勢共を見果ぬ程の不當人のさなく共有なると道へバ力及で射ざりけりさて小松殿の君難いかよと宣へば未ゆ一所もみへさせずと大臣殿都を出て今日だも過ざる暇早人々の心共替り行方見よとぞ宣ひける新中納言知盛卿行末とて頼しうらす唯都の内にていかぬを成せ給へとすつるにとて大臣殿の馬方を世よを恨しげ見給ひける抑池殿の御り給ふの右兵衛佐頼朝卿情と掛られ全は方をバ煉と思ひ奉らす偏に故池殿のは後りまこそ存いへ弓矢入幡照覽いへなを度々怒状を以てすされけり平家追討の討手の使の止ること相傳へて池殿の侍も向て弓を引なくも事あ觸て芳心せられたりしう一門の平家い運盛て都を落ぬ今の右兵衛佐も助けられんとて扱こそ道より引かへされしとかや八條女院都を軍は恐れさせ給て仁和寺の常盤殿も怒て坐ける所へ參籠られけり此頼盛卿とけり女院の乳母宰相殿とや女房に相具せられたりけるよ依て自然のともいひ頼盛助とせ坐せられけり女院今の世が世であらばこと頼母しげをかうを仰ける凡の右兵衛佐科を苦心と存共自餘の源氏等いかやあらん怒一門も引わられて落留りぬ浪

六田河原まで行幸ま運付奉らる大臣殿斜ちらを嬉氣よていかよや今迄の運參いひしと宣へば三位中將少ら者共が餘りも暮いひを左右賺し看んと存外の運參いとやさる大臣殿なと六代殿をバ召具し給ぬ心づよくも留られしと宣へば行末とて頼母敷もいはずとて問も愁氣の涙と流されける落行平家の誰とぞ前内大臣宗盛公平大納言時忠卿平中納言教盛卿新中納言知盛卿修理太夫正二位經盛卿清盛公弟忠度右衛門督清宗卿正三位侍從之本三位中將重衡卿小松三位中將維盛卿同新三位中將資盛卿故重盛公越前三位補盛卿門脇殿殿上人い藏頭信基讚岐中將時實左中將清經三男故重盛公同少將有盛同上丹波侍從忠房同上皇后宮亮經正左馬頭行盛基盛の物領薩摩守忠度從五位上知章知盛卿の能登守教經三男門脇殿備中守師盛故重盛公の從五位下清貞入道相淡路守清房同上若狹守經俊經盛卿藏人太夫業盛經盛卿の乙子太夫教盛兵部少輔正明僧に二位僧都尊親法勝寺執行能圓中納言律師仲快門脇殿經誦坊阿闍梨祐圓武士い受領檢非違使衛府諸司尉百六十人都合七千餘騎是に此三ヶ年が間東國北國度の軍討洩され織も残る所平大納言時忠卿山崎關戸院王の神輿を昇居させ男山の方を伏拜み願く君を始進らせ我々を今一度故郷へ歸し入させ給と八幡宮を祈ら

ねはるを悲しむる各後を 願はば 霞の空のこゝろして 煙のこゝろ心細うを 立升る平中納言教盛

卿 ばかなし 手は 鎌井のたのれ 煙と立のほろかき 修理大夫 經盛

いふことも 煙の波路をぞゆめ 飛下木臣殿の 後前ふ 参のな心憂や 何 地へして 渡らせ給ふらむ 西國へ 下らぬ 落人として 候て 討れ給ひ 愛名を流さ 込給ひんと 口惜ういへし 唯都の内よりの 成せ給んことを 増えいひしと 申ければ 大臣殿 真直のいまだ 知れぬか 不曾とて 東北國より 五萬餘騎を 卒じ 攻上り 比叡山東坂有る 赤橋法皇 を 逃し 夜半より 何地か 幽幸ありと 其は 往來し せず 人々の 都の中は ても 今にも 成んと 申合せ ぬが 其 而女 院二十位 殿より 目録を 進ば せんも 口惜 攻て 行幸 ばかり 成奉り 各とも

引具と 西國の方の 渡下と 一歩をも 思ふも 宜く 左様 あり 真直の 身の 暇を 給つて 都の中よ ていかに 成ぬらん として 遺棄せし 五百の 騎の小松殿の 公達も 属進らせ 手勢三千騎 ばかり 都 今取返す 平家の 御旗の 跡は 残り 留まり ざる 討んと して 真直を 歸り 入よし 聞ひし けり 池大納 言 真直が 身の上 ならん 本意 忘れ 候へ けり され 其 真直の 西八條の 燒跡は 夫 幕引せ 一夜 宿し たり 分け 其 歸り 入給ふ 平家の 君達 一人を おぼへ たり して 其 世の 形勢 心細く と思ひ けり 在源氏の 駒の 跡は 跡は して して 小松殿の 後 墓堀せ 骨も 向ひ 泣々 けり けり あり あり 涙ま して 一 冊の 結果 眞直の 人生 なる あり 必す 滅す 樂 盡て 悲 來ると 云と なる 昔より 書置 たる こと して けり 其 期り かり ける 愛と けり 其 君の 斯る べかり ける ことを 際て 悟らせ 給ひ 佛神 三寶 又 祈 誓 有る 御世 早く せら ば せ せ けり ける ことを 有が たら けり けり けり して 其 時 眞直を 後世 の 傳 任の ため せし こと あり 命 存す 日 けり あり あり 目 あり あり 事 こと 口 しく けり けり 死 期 の 時 の 必 佛土 へ 迎へ 給ふ こと あり 口 説 書 あり あり 高野 人 送り 傍の 土 へ 加茂 川 へ 流させ 行末 頼母 しか かり 思ひ けり 主と 後 後 せり 東國の方 へ 流 行 ける 眞直の 先年 宇都宮 へ 申 預て 其 時 傳 任の ため 今 度 宇都宮 へ 頼と する こと あり 其 好し あり 芳心 けり ける ことを 聞 けり 平家 の 小松 三 位 中 將

惟盛卿の外に大臣殿以下妻子を具せられければ共次々の人々ののみ引擺ふよを及べぬ  
 後會其期をしらきみな打捨てて落行ける人の何れの日何れの時必ず還るべしと其期を定置  
 だよも別れの悲しき習をかし況や是の今日を最期唯今限のとなれば行を留るも互に袖を絞  
 りける相傳譜代の好年來日來の重恩争う忘るべきなれば老たるも若さも皆跡をのみ願て  
 前への進をやらざりけりあるひの磯邊の波枕八重の潮路は日を暮しあるひの遠き口道とう  
 け險さを凌て駒に鞭人をとり舟に棹す者をあり思ひく心くよぞ落行ける平家の福原の  
 舊里よ若て大臣殿然るべき侍老少數百人召て宣ひける積善の餘慶家も盡積善の餘殃身  
 に及ぶが故も神明も放たれ君に捨られ進せ今帝都を出て旅泊し漂ふ上何の瀬か有べ  
 さされ共一樹の蔭に宿るも先世の契縁からず同じ流を掬ふも他生の縁猶深し況や汝等の一  
 旦隨ひ附門客よわらず累祖相傳の家人とあるひの近親の好他も異なるをあり或は重代芳恩  
 これ深きもわす家門繁昌の古の其恩波も依て私を願ふ何ぞ今其芳恩を酬ひざらんや然  
 り十善帝王も三種の神器を帯して渡せ給へばいかならん野の末山の奥までを行幸の供  
 ていかよを成んどの思すやと宣へば老少皆涙を押してゆやしの鳥獸も恩を報じ徳を酬ふ心  
 い之況や人倫のりでか其理を存せざるべき就中弓箭馬上も動をせず習ひ二心あるを以て

取どくと仕れ其止此二十餘年が間妻子を育み所従を顧みいとを君恩ならずと云とあし然  
 日本の外難難百濟高麗契丹海の果雲の終まで行幸の御供仕りいかよを成ひんと異口同音  
 よすたりければ人々皆頼母しげにぞ見給ひける去ほどに平氏の福原の舊里にして一夜を明  
 されける折ふし秋の月下の弦之深更空夜閑にして旅寐の床の草枕露も涙も争ひて唯物  
 のみを悲しき何處るべし其覺ねば故入道相國の作り置給へる福原の所々を見給ふも春の花  
 見の岡の御所秋の月見の濱の御所泉殿松陰殿馬場殿二階棧敷殿雪見御所萱の御所人の館  
 共五條大納言國綱卿承て造進せられし里内裏駕瓦王盤何れも三年が程も荒はて舊  
 昔道と塞さ秋の草門を閉瓦も松生垣も葛茂れり盛傾て苔深く松風の通ふのみ簾絶園露の  
 みて月影のみさし入ぬ明ぬれば福原の内裏も火をかけて主上を始まるらせ人と皆御船に召  
 都を出し程こそあけれ共是を名残の客かりけり海士の焚藁の夕煙尾上の鹿の曉の聲落  
 ふ寄波の音袖も宿かる月の影千草も集蟬蟬總て眼も視耳も觸ると一ツとして哀を催し心  
 を傷まふいふとなし昨日の東關の籠も驢を雙て十万余騎今日の四海の波の上も纒を解

て七手餘人雲海沈として青天既暮忍んとす孤島は夕霧隔て月海上に浮べり極浦の波を  
 分ちて奥れそ行船の半天の雲も遡る日敷経れ都の山川程遠く雲井の餘所よを成よける  
 遙く来ぬと思へ其唯遠のみの涙之波の上白き鳥の簇居るを見給ひて在原の某の隅田川  
 なる事聞けん名も人昵き都鳥今眼の前よみるを恨し壽永三年七月廿五日平家都を落果ぬ  
 世の平家物語は讀て小松重盛公のあす處を賢者の行ひと稱譽す憶ふに浮屠氏よの賢と  
 大聖共すんが人倫五常の道を以論せば物語の旨を以賢者といふべからず相國入道の  
 大徳重盛公のあす處なる處あり小松殿も是の知る所を以賢者といふべからず相國入道の  
 院は雅能奉父の大徳増長す是平氏滅亡の期を速ます處あり重盛公よの侍子も大勢  
 院の雅能奉父の都落の難きより西海に沈て魚餌となる遊子孫の苦思悲歎いくばくぞや草  
 葉の露も雨のちりや喜れんや悲まれんやいづれも命あらん際氣根際よは父相國入道の  
 赤法を蒙り法皇を保護し給んと臣子たる者の勤へ重盛公のなす處の主人を亦く父母を亦  
 子孫を亦く家従も亦く孤獨の人あらば左も右もあるべし身一ツの命を捨るに匹夫を

平家重盛公は小松殿の其身さへ菩提を需れば跡の野ともあれ山ともあれ構ぬと思れば其  
 眷屬たる者の願と少きことならずや是れは重盛公を貴くせんとして却て忠孝も辨ぬ無道  
 人とあすもの之努く左よわらじ重盛公君子さるとの諸書も明か之唯不幸にして短命  
 之熊野の伊神も願て死を求る共不忠不孝不慈あたる所を納受の有べからず青天の天  
 よわり祈て盈縮のあるべきや此冊よ貞親小松殿の墓を堀て述る事あるよ因て聊こゝ  
 よ述ぶ人々其身さへ捨れば忠を孝を立すとも賢者こと心得ば是世俗に毒を流すと云べ  
 し重盛公短命なりしより妄談を附會して却て君子を誣辨せずんば有べからず





の面目をこまみべたりはれ降廿八日法皇都へ遷御すを奉在万節殿に守護し奉る近江源氏山本冠者義高由成差て先陣をうとひ御二十日御見立御高橋今日始と都へ入珍しかりし見物之十郎藏人行家いざ千時にて宇津橋を渡り都へ入陸奥新井官義康太子矢田拜官代義清大江山を經て上洛す交舞津國河内河津の源氏を渡りしは向台都へ就相太凡京中より源氏の勢光満たり勘解由小路申納吉經房卿掩奉遷御所宮在御所御家南大院的殿上の書みひいて義仲行家を召木曾殿其首の裝束赤地の錦の直垂を唐綾の袴着ていがかの作の太刀を帶二十四差たる藏生義高會源房の母を賜ふ御下殿高橋の掛物御侍ける半郎藏人行家の紺地の錦の直垂を照永威の錦袴を兼盛の太刀を兼盛平四差たる大中黒の矢達龍腰の弓を持是を兜を脱て高橋をかひ畏て候ひける前内大臣宗盛を給ひて本家の一族悉く追討す可山仰下はる兩人庭上あり果り承ひて龍田谷宿所をまは依り大膳大夫成忠が宿所六衛西洞院に在を義仲へ法住寺願の南殿と宗盛の御所を行家は賜ふ侍ける主上の外殿の平家より囚れ西海の瀬に漂せ給ふと宗盛料ならぬ御歎き有坐すならぬ御歎きの神器事故あり都へ返し入奉るべき本七西國へ御進されけれ共平家用ひ奉らす高倉院の皇子の主上の外より三所坐ましき中よも

宮を以備君にし奉らんとして平家取奉りて西國へ落下り三四の都も在しけり八月五日法皇此宮達迎寄進せ給ひて先づ三の宮五歳にならせ給ふを法皇あれいかあと仰かれは法皇を見進せ給ひて大よひつからせ給ふ間疾くして出せ給はる其後四の宮四歳にならせ給ふを法皇あれいかあと仰かれは法皇の御膝の上も參らせ給ひ懐氣も坐しける法皇涙流され給ひ此老法師を見ていかで懐氣に思ふべきことを賦の吾孫されとては悦ましく故院の少生に少も進すされほどの忘形見今途は覺せられりつることとては落涙切也淨土寺の三位殿其時は雲が丹後殿にて御前も侍れけるが御位り此宮よてこそ渡せ侍りめとすされしかば法皇仔細よくとせ仰ける内々御占のありしよも四宮位も則せ給はる百王迄も日本國の御主たるべしと勘へやけるは御機は七條修理大夫信隆卿の女中宮の傍方宮仕し給ひしを主上常より召れし程に宮餘多出來させ給ひたり此信隆卿は慈女餘多おはしけれはいつれよても女御后に立進せたると思はれるよ人の家も白雉を千羽飼のまは其家は必后出來と云とわれはとて白雉千羽を捕ま飼れしと世々の御多し此源皇子餘多生まらせ給ひけり中にも四の宮の三位殿のは兄法勝寺の修行能圓法師の猶ひ君はてふとしける法印平家お具せ

られ宮を女房を京都拾遺西國へ移されけるが法印西國より入をさせ宮内引進せ急  
ぎ下り給へを請ふれしかば此の方悦び宮内引進せて西七條まで出されたりけるを女房の兄  
紀伊守教光母の物の付て狂ひ給ふ此宮の御連の唯今啓け給へんとて取留め奉りける大  
の日法皇より厚迎の御車参りしとかや何事を然るべきなら紀伊守教光の四の宮の比爲に  
のしを奉公の人とぞみへしされ其思を思上召寄りけるよや空しう年月を送りける  
が或時教光もしやと二首の歌と詠内禁中へ落書をなしたりける

一聲の思ひ出てあけ郭公老との森の夜半の昔を

籠の内を廻らら屋まし山がらの身のほど隠す夕顔の宿

主上此より賜し召て是は世の事を今迄思召より送りけるを返すを思ふれとて頓て朝思  
禁りて正三位を叙せられけるとや同十日木曾義仲左馬頭も成て越後國を賜り其上朝日將  
軍と云院宣と下されける十郎藏人備後守に成て備後國を賜りける木曾殿の越後を嫌ふゆゑ  
伊豫を下され行家備後を嫌ふ依て備前を賜ふ其外源氏其餘人受領檢非違使執符右兵衛  
尉もなされける同十六日前内大臣宗盛公以下平家の一族百八十人が官職を停て殿上の位

礼を賜ひ其中心に平太納言時忠卿藏頭信基讃岐中將時實父子三人をバ創られず其故に主上  
并に三種の神器事御成り都へ歸し入奉れり時忠卿の膝へ度と仰下されけるよ依て之明る十  
七日平家宗盛備前國三笠郡太宰府よこぞ着給ふ菊池次郎高直の都より平家の供ひ侍ひける  
が天津山の關開て参らせんとて肥後國も打越己が城より引籠り召ともし参らす其外九州二  
島の者共皆参らるる備前國のナながら一人も参らず當時は岩戸の諸卿大藏種直のりぞい  
ひける向平公平家安樂寺も参り終夜歌詠連歌して宮仕給ひて中よを本三位中將重衡卿  
の住まれり故に都の越しき神も昔も思ひ知るらん  
八月二十日御成り覺て曾袖を濡されける同廿日都に法皇の宣命も依て四宮開院殿よて位も即  
中納言御成り春成八十二代後鳥羽院と奉奉し是は攝政の本の攝政近衛殿の替らせ給ひ奉  
願ふ御成り成置て入る管退田せられけり三の宮の乳母泣悲み後悔すれ共かひなき天に三  
つめ日來く國に二人の王なしとせのやせとを平家の悪行に依てこそ京と田舎に二人の王の女  
替りつけ給ふ御成り天皇天安二年八月廿三日隠れさせ給ひぬ御子宮達餘多御位も望をかけ  
給ひ給ひ内平家御成り其上りの宮備前親王と平木原王子共やと王者の才量も心なかけ四





豊後國の洲郡三郡國實卿の國之手島國國臣の代官に據れしが京より頼經の許へ使者を  
 立平家の神明も君も捨られ波の上の落人たり然るを九州二島の者共請取て歡待んまを  
 罷らぬ國に於て一向隨へる事東國を國心し九州の内を退出しやべきよし宣ひ遣  
 するにぞ此趣緒方三郎惟義に下知す惟義の怖しき者の末まで傳るの豐後の片山里よ  
 一人の女を養ふもの有此許へ夜く通ふ男有りしが母性て通ひ來るの向者ぞと  
 問よ來るを見て歸るをさらすと云ふらば朝歸るん時斯きと云はる故朝歸る男水色の狩衣  
 を着たりし頭髪針を刺腕の緒環と云物を附せしを經て行方を察せられたる豊後日向の境ある處  
 波瀾の下大ひなる窟の内へ棄入たり女其口を伴立聞ハ大なる聲して喚きけり女はけるの序  
 姿を見んとて見らば是迄參ひと云ければ洞の内より我の姿はらまを汝我姿を見けり肝  
 魂も身も離れし時の子の男なるべし弓矢打物取て九州二島は比肩者もまじきと  
 教ける女重ねて縦ひのなる姿あり共日來の好みいかでか忘るべきとやさらばとて岩窟  
 の内より臥長い五六尺跡枕へり十四五丈をあらんと覺る大蛇動揺して遣出ける女魂を身  
 に添す召具せし十餘人の所從共周章叫びて逃去ぬ頭髪を刺と思ひし針ハ大蛇の腦髓よぞ立

たりける女歸て程おく男子と生ける母方の祖父育見んとて生立けるが十歳ならざるも父  
 大さく顔長かりけり七歳まで元服させ母方の祖父を大太夫と云まは是をバ大太と名付けける  
 夏冬手足は間なく服破たるも大太と云し之件の大太五代の孫惟義之國司の仰を  
 院宣と号し九州二島へ廻し文せしかば然るべき者共皆惟義に隨ひ屬件の大蛇の日向國に崇  
 祀高知尾明神の神跡なりと傳ふ

緒方惟義九州の平家を退出す前右兵衛佐殿將軍の院宣を賜ふ

去程は平家の筑紫を都を定め内裏造らるべしと公卿會議有しか共惟義が謀叛が依て夫も叶  
 ず新中納言知盛卿の異見は被りけるの彼緒方三郎ハ小松殿の侍家人ハ君達ハ一所向のせ給  
 ひ拵て涉覽いへと此儀尤然るべしとて新三位中將實盛五百餘騎よて豊後國に打越色々  
 やされられ共惟義隨ひ奉らす刺君達をも是まで取籠すべきが大事の中の小事さればとて  
 取籠參らせず只太宰府へ歸らせ給ひハ一所向いかまをさらせ給へりしとて追返しける其後  
 惟義が次男野尻次郎惟村を使者にて太宰府へ申けるハ平家こそ重恩の君にハハ胃と御弓  
 弦を弛し降人をも参りいんが一院の仰の請は九州の内を退出し奉るべきよししたはと







平家兼倉の武威は怖れ都を落其跡は木曾義仲十郎藏人等打入て我高名顔は官加階を賜り利  
 國は嫌ひし條奇怪に又奥州の秀衡陸奥守となり佐竹冠者が常陸守に成て是も兼倉の下知よ  
 隨々彼等をもいとぎ追討すべきよし院宣を賜るべき旨を言さる泰定頓て是よて名諱をも  
 進せ摩へどもは彼の身されば歸洛の上認て進すべし弟よては史大夫重能も此儀をすし  
 せしけれは佐藤嘲笑て當時頼朝が身として各の名諱思もよらず去ながらを致されば左こそ  
 存せめと宣ひける泰定今日上洛の由を言今日手の逗留へとて留められ次の日又佐殿の館  
 へ向ふ直實系威の腹巻一領白う作りたる太刀一振滋藤の弓よ野矢を副賜るうへ馬十三匹牽  
 る三匹は鞍置たり十三人の家子郎等にも直垂小袖大口馬物具よ及べり馬も三百匹迄有りけり

鎌倉出の宿よりも近江の鏡の宿よ至迄宿よ十石づゝの米と置れたりければ澤山あるゆゑ  
 施行よ引れしとぞ泰定歸洛院參し御壺の内よ畏て關東の標を具に奏聞せししかば法皇大よ  
 御感あり公卿殿上人を笑壺よ入せ給ひいかなれば右兵衛佐かくゆゝしき當時都の守護して  
 在義仲の似もせず悪かりけり色白う眉目いよさ丈夫ながら起居舉動の無骨さ言の頑なると  
 限なし理なるかな一歳より三十餘る迄信濃の木曾と云片山里に住馴鹿豕と遊し族なれば  
 何かいよめるべきと面よ密に笑れし之其比猫間中納言光高卿木曾殿に云合せ給ふべきと有  
 てかいたれば郎等共猫間殿入せ給ひていどや木曾殿大聲よ笑つて猫の人よ對面する者か  
 どぞ云れける是の猫よいひのす猫間中納言殿とて公卿よて渡らせいと云ければさらばとて  
 對面ある木曾殿の猫間殿とい得言で猫殿の食時よまれればいとよ物よそへとぞ云れける  
 是の食時分來られたればめ 中納言殿の何のとうさらよわからす可笑かりしが何か世話を  
 しをよるまひやせと云へ 中納言殿の何のとうさらよわからす可笑かりしが何か世話を  
 けていといかでか唯今さるとのいへさと宣へ共木曾殿の何ふても新しき無鹽と云どと心  
 得て無鹽の平葺爰に有はやくくと急がせらる根井小彌太配膳す田舎合子の究て大に窪か  
 りけるよ飯を堆くじひ菜三種して平葺の汁めて進せ其身を同様の膳を据させ相伴し客へ掛

緒環と附て  
密男の行  
衛と記る  
圖



月新

搦も及ず汁を取飯も打かけ一ツの菜を取上是も一處まじ等を以て掻交かへて迄給らるゝ  
 中納言殿の餘り合子のいふせさ召ざりければ木曾殿聲かけきたなしと思ひ給ひそ其の義  
 仲が精進合子にてい進り給へ〜と鞠るゆゑ召でも悪のりなにとや思れけん箸取て召よし  
 して指置れたりければ木曾殿大お笑て扱を猫殿の小食よみ聞ゆる猫飯し給ひたり飼給へや  
 〜と責たりける中納言殿のかやうの跡よ萬興醒て宣ひ合すべき事共一言も云出さず急  
 ぎ歸られけり其後義仲院參せられしよ官加階しる者直垂よて出仕せんと有まじとて俄よ  
 布衣とり装束冠ぎの袖のかゝり指貫の輪よ至るまで頑なると限なし鎧取て着矢掻負弓推  
 張兜の緒を縮馬よ乗たるよ似ざりけりされ共車よ屈乗ぬ牛飼ハ八島の大匠殿の牛飼之牛  
 車を其之けり逸物なる牛の居飼たるを門を出るとして一棧當たれば何かの怖るべき牛の飛で  
 出たるよ木曾殿の車の内にて仰向けよ倒れ蝶の羽を播けたる様よ左右の袖を廣げ手をあが  
 きて起ん〜とせられしが何かの起らるべき木曾殿牛飼といいでやれ小牛健兒よやれ小  
 牛健兒よといわれければ車よ還と云と心得て五六町ころあるかせけれ今井四郎兼平鎧を  
 合せ還付何とて御車をかやうよ仕るぞと云ければ餘りあは牛の鼻が強うひてと涙たりけ

る牛飼木曾殿と中直りせんと思ひけんそれよ手形とア物も取付せ給へとすゆゑ木曾殿  
 手形よ無手と扱付て哀れ支度や牛健兒が計ひか殿の權かよを問れよりし扱院の御所の門前  
 よて車よけ外させ後より下んとせらるゝを京の者の雜色よ召遣われけるが車よ召れし時こ  
 そ後より召れし〜下させ給ひ前よりころとア木曾殿いかでり車成んからよ何條素通りをす  
 べきとて終り後より下られたり其外可笑事共多かりしが皆人恐れてすさす牛飼の終り斬れ  
 ける去程よ平家の讃岐の八島よ在るが山陽道八ヶ國南海道六ヶ國都合十四國を討取ける  
 木曾殿安からぬとことて願て討手に向らるゝ大將よ陸奥の新判官義康が子矢田判官代義  
 清侍 大將よ信濃國の住人海野彌平四郎行廣を先として其勢七千餘騎山陽道へ發向す備  
 中國水島の門よ舟を浮べ八島へ寄んとて閏十月朔日水島さして舟一艘出來るこい泉郎の小  
 船が釣舟かとみる處にさもなく平家方より朝の使の船にけり源氏方の兵共是と見て早上た  
 りし五百餘艘の船共を皆我先よと下しける平家の千餘艘よて漕寄る大將よ新中納言知盛  
 卿副將軍の能登守教經の能登守大音あけいかよ四國の者共北國の奴原の生捕よせられんを  
 心愛とて思ひ御方の船をば組やとて千餘艘の一艘一艘を組合せ中よ舫よ入歩の板を引

渡しくたれば船の中へ平家たり間を作り矢合せして遠き方射て落し近き方太刀にて斬或  
 の熊手よかけて引墮さるゝも又の引紐刺違へ海へ飛入るありいづれ問わり共みへさり  
 けり源氏方の侍大將海野彌平四郎行廣討れけり是を見て矢田判官代義清易からぬとこと  
 で主従廿八小舟を取乘真先お進て戦ひけるが船踏沈めて失ふけり平家の舟は馬を立たりし  
 けり平家共乗傾けく馬共追下し船は引付く遊す馬の足立鞍爪干たる程もをありしかバひ  
 たくと打乗て能登守五百餘騎喚て先を蒐るゝ源氏方より大將の討れぬ我先よと落行け  
 平家平度水島の軍は勝會稽の恥を雪しと悦びぬ木曾左馬頭義仲此由を聞其勢一萬餘騎を  
 従へ備中國へ馳下る愛は平家の身方備中國の住人瀬尾太郎兼康の聞ゆる兵なりけり去  
 る五月北國の戦は加賀國の住人倉光次郎成澄が手は生擒れ其時斬らるべきを木曾殿可憐  
 男を左右なく斬べきみあらむとて弟三郎成氏を預られてはひけるが人わひ心さま誠な優な  
 りしかバ倉光も懇は款待けり蘇子卿が胡國より囚れ李少卿が漢朝へ飯らざりし如く遅く異  
 國お就る昔の人悲めかし所之草鞵毒藥以て風雨と樂き羶肉酪漿以て飢渴よ  
 充夜の寝しと多く盡ひ終日は仕へて木を伐草を刈すと云ふは隨ひけりいかにして敵を伺

ひ射て今一度舊主を見バやと思ひ入ける兼康が心の中こそ痛ならぬ或時瀬尾倉光三郎に云  
 けるの去る五月よりのひなき命を助けられたれば難を難とか思ひ進らすべき今度御台戦い  
 けり命の先木曾殿も奉らんそれお付先年兼康知行ひし備中の瀬尾と云所の馬の草飼好所  
 きては御邊へ船とらせしへ案内者せんと云ければ倉光三郎木曾殿も此よしヤ木曾殿扱ひ不  
 便のととすよ汝先下つて馬の秣などを携せよと宜ふ倉光承つて手勢三十騎瀬尾を  
 具して備中國へ馳下る瀬尾が嫡子小太郎宗康の平家方あるが父暇賜て下ると聞年來の郎等  
 共備其勢百騎斗父の迎へ上りけるは播磨の國府にて行會其より打連下り備前國三石れ宿よ  
 泊りし夜瀬尾が相知れる者共酒を賣せ來湊り終宵酒宴しけるが倉光が勢三十騎斗りを強  
 伏て起しも立す倉光三郎を扱ひてみお刺殺しける備前の十郎藏人の國よて其代官國府よ在  
 ても頼て推計取たり瀬尾をけるは兼康こそ木曾殿より暇給て是迄罷下たれ平家に志  
 しあらん人よの今度木曾殿下らるゝ矢一ッ射掛よやと披露せしは備前備中備後三國の兵  
 共然るべき所從馬物具平家の方へ進せて休居たりし老者共瀬尾は催されあるひのかきの直  
 垂むつめ紐し或の布の小袖は束縛し破腹巻綴着山空穂高箆は矢共少く指て掻負く其勢二

千餘人瀬尾が居所に馳集る備前國福隆寺繩手篠の追を城郭に據り口工火深は千丈又隄を掘  
 掘積かき高矢倉し道度不引で待かたけ十郎藏人の代備瀬尾を討御其下馬迹で京へ上りけ  
 るが播磨と備前の境播磨側にて本會屬より行達此處斯と上げ候水村會屬懸懸り瀬尾斬交  
 弄へるを手に進よじ窮らせしことを安からぬと後條を引れしを今非四郎懸けるに以て瀬尾者  
 討て入へいば千原も斬らんとせしむ此ゆゑに山を崩れ去り頼朝兼平隨つて是に内入りて三  
 中餘騎備前國へ馳下る備前國福隆寺繩手の端邊寺候新候半ありて遠流は西國道の一里を左番  
 井深出まて馬の足も及ばねば三千餘騎が心先も進め其厚及ばず懸懸り第おとせしむ今井  
 播磨みれば瀬尾太郎高矢倉より走らせり大音よ去る正月のふかば命助はら瀬尾を以て客  
 風の芳志より馬を用意しめて二十四指たる矢を指請與請敵を射る兼平當時三郎海野望月  
 請請敵を以て一人當千の勢候其是を事共也射野の敵を候射候も亦人馬を瀬尾引入  
 堀を埋めたりは左右の深田へ射入て馬の章勝候討し太腹より立腹を事共せり候を推寄  
 ありのひは谷津とを腰に舞をく及入れれば瀬尾が馬其勢も討候夜は入は前切た瀬尾の道の  
 賊衆を破りて引退りて備中國板倉川の端に播磨がいで待かけたり兼平續て攻ければ

瀬尾方矢を射盡し討死の者も多し力及ずしんもいば落行瀬尾唯庄從三騎討なされ板倉  
 州は添て緑山の方本落行けり去勢五月彼國の國瀬尾倉倉光太郎成澄が第三郎成其  
 討て口在り今度せし況候はせと唯は騎群と相懸相寄表士町丹波道村の邊も瀬尾返流  
 呼るよと瀬尾の板倉川を西流渡りが川中へ組送落轉次合討るが關の有しよ覆入倉光の水心  
 なき瀬尾の伏練達者なれば水底よを倉光が腰の刀を板取鎧の草摺さしみ上げ柄を拳も通れ  
 候と三月日の暮首領を水玉に浮遊りし討て馬の既と乘損をねれば倉光の馬は腹の懸  
 り落行けり瀬尾孫崎子小太郎宗康候の道千も亦りけり其あまも肥水は千町を馳せ得坐  
 又河邊までこれを見せ跡等は向邊にいりやう我道順本道はたしと千萬が敵候むかふと備四  
 方はれりも逃して逃はかよ事事も今日ゆ小太郎宗康を捨て行かよ新路開き心組せする  
 假令宗康の軍も命候とて再び平家は移るにも宗康をたて六千もあせり幾バ大か盛へよと思ひ  
 二天の子をさへ殺し是をせの洗盆を殺と後指をいれり口惜しきあり馬の頭を立直上元  
 の道は引懸り來れば練のあせり小太郎の脚腰を合ひ歩歩を歩かたう大地は倒れ居たり  
 宗康馬は手飛せり小太郎が平康と改め候も如神は成候と思ふ故にさまでい候は

り小太郎泪を拭らばらと流して此身こそ斯く要期は生れたれば爰處にて自害仕へられ我  
 ゆゑ父の御命を失ひ給ひん事五逆罪と業り侍らん只夙落させたまへと急がせともいやと  
 な斯思ひ定めたる上小太郎と諸共敵をまのころより源氏の荒守五十騎討落武者ござんあ  
 れと駈來る瀬尾太郎父子郎等侍設たるのど立向ひ太郎兼康射變したる矢八筋ありしをば  
 し詰引つ先散や射る死生思はとは知らねども矢庭に敵公騎射おとせ敵軍の中をとり入  
 縦横十文字は討とり切ふせ其後こへよ弁戻り先に太郎が首ふつと打落し又敵の中へかけ入  
 さんくゝ又戦ひ終に討死なしたりけり郎等も主よ少を勢を戦けるが箱手數多とひて生  
 捕れしが翌日命終り則主従三人が首を備中國置が社よ鳥たけける木曾殿わかれ剛の者  
 や是等が命助てこそとぞ云けるとぞ

播州室山軍藏入行家 働 木曾法住寺殿を攻奉り狼藉を成

去程は木曾の備中國万壽の住にて勢揃し既八島へ寄んとす其間都の留主に聞れたる同日  
 次郎兼光西國へ使者を以て殿の渡らせ給ひの間は予部藏人まき清ま書し御奏せられぬれ  
 西國の軍兵をさしめりせられ急ぎ止然し給ひん山やしき大事ゆらんかと申させければ

木曾さらばとて軍を返さる十郎藏入行家の木曾中たぐふて悪かりなんと其勢五百餘騎よ  
 て丹波路より播磨國へ落する木曾の攝津國を經て都へ入るを平家方木曾と討んと大將軍に  
 の新中納言知盛卿三位中將重衡卿侍大將より越中次郎兵衛盛次上総五郎忠光忠七兵衛景清  
 伊賀平内左衛門家長を先鋒とし都合其勢二万餘騎播磨の岡室山に陣を取る十郎藏入行家の  
 平家と軍して木曾と中直りせんと其勢五百餘騎室山へ押よせる平家の陣を五ツに張平内左  
 衛門と先陣とし二陣越中次郎二千餘騎三陣上総五郎兵衛忠七兵衛四陣重衡卿五陣知盛卿  
 かへ給ひまづ一陣家長まばらく戦ふて中をさつと聞く二陣盛次これをも同じく左右へ開くか  
 ら先陣より四陣まで中を開きて通し一同は起つて中へ取籠せめ立る藏入行家の旗れり  
 と面をふらずこゝを最期と勇とふる以知盛々郎等七左衛門同八左衛門同九郎と一人當  
 千の者どもを討とり手勢わづか三十騎を引て左を突右を破つひに圍みと逃出高砂より舟よ  
 飛のり和泉の國まで落延つゝ河内國長野の城ふたて籠れり扱を洛中より源氏の勢充満て軍  
 卒在ま青田をかり刺さへ八幡の神領まで別取て秣として人家を押入て資財を掠め庫藏を打  
 やぶり遺跡を衣服を剝とり其狼藉平家まどるの勝りしるハ入民日夜こゝろ安むる暇さあ



矢の却て汝等が身立べし振ん太刀は却て身を斬べしなど、雷りたりしを木曾殿さき謂せ  
 せとて岡と咄と作りたる樋口次郎二千餘騎新熊野の方より同じく鯨波を合せける今井四郎  
 頼の中へ火を入れて法住寺殿の御所の棟へ射立たりければ折斷風の烈し猛火の天へ燃上り焔  
 の虚空へ吹充て黒煙押掛ければ軍の行事朝暮の人より先に落まけり行事は落る上りとして  
 二万餘人の兵共吾魁と落けるが餘りも憚味て薙刀を倒み突て我足と貫をあり或は弓の弦を  
 物も掛廻さで捨又ハ太刀の室を踏碎て怪我とるをあり咄と押て逃走る七條が末ハ攝津國源  
 氏の固めしが院の御所より木曾勢の落人あらハ打殺せと下知有ゆゑ在地の者共屋根へ橋を  
 突双べ襲ひの石取聚て待居たる處ハ攝津國源氏の落けるをわとや落人として石を散くハ打  
 當れば院方の者ぞ過とたと云けれども院宣なるに唯打殺せくとして打程ハ頭を打破られ腰  
 を打折れて馬より落道く逃るも看打殺さるも多かりける八條が末とハ山伏と堅たり  
 しハ耻める者の討死し強頑者の落て行こハ主水正親兼ハ薄青の狩衣の下ハ萌黄威の腹巻  
 と着て白月毛の馬ハ乘河原を上へ落けるを今井四郎追能變て鬨の音と兵と射貫ハ馬より  
 眞倒ハ落て死す清大外記頼業が子にけり明經道の博士甲冑を鎧ふと是始と云傳ハ近江中

將爲清越前少將信行伯耆守光綱子息伯耆判官光經も射落されて頭捕れぬ又木曾方を背て院  
 へ參たる信濃源氏村上三郎判官代を討る按察使大納言資方卿の孫有少將雅方を鎧立鳥帽子  
 よて軍の陣へ出られ樋口次郎兼光が手ハ擒よせられける天台座主明雲大僧正寺の長吏圓  
 慶法親王を御所へ參らせ給ひしが黒烟既ハ押掛ければ御馬よて急ぎ出させ給ひけるを武士  
 共さんハ射奉るハ太僧正を法親王を御馬より射落され後頸を討れ給ふ法皇ハ御輿ハ召  
 て他所へ御幸なるを武士どもさんハ射奉る豊後少將宗長本關地の直垂ハ折鳥帽子着て  
 供奉せられしが是ハ院ハ渡らせ給ふぞ過仕るをとやされければ武士共皆馬より下て畏ま  
 る何者ぞと尋ありければ信濃國の住人矢嶋四郎行重と名乗テ繼て御輿ハ手を懸進せ五條  
 内裏へ入れ奉り緊く守護し奉る豊後國司刑部卿三位頼實卿を御所へ參籠られけるが焔火す  
 でハ捲くハりし時河原へ逃出されしハ武士の下部共ハ衣裳皆剣取れ眞裸よて立れたり比と  
 十一月十九日の朝なれば河原の風さこそハ烈しかりけり三位の兄越前法橋性意が中間法師  
 けふの軍みんとてハ來かハり三位の裸よて立れしを見付ぬハ淺儀とて急ぎ走り寄此法師  
 白ハ袖ニツハ衣を着てあり其ハ袖をニツ脱て着せ進らせ衣も脱て投掛たり短き衣虛ハ



被て帯もせず後の跡さこそ見苦しかりけん急ぎ歩みもし給はず白衣なる法師を供ふ具し  
 わるこまゝ立徘徊われあるの誰が家ぞこゝあるの何者の宿所なんぞ問給へば見る人手を  
 敵で笑ひひへり主上の船を召て池に浮せ給ひけるは武士を頻に矢と進せければ七條侍  
 從信濃紀伊守教光舟船を侍とれけるが是の内にて渡せ給ふぞや過せなと申さるゝは武士と  
 を馬より下て跳く閑院殿へ行幸なし奉るゝ其儀式の淺ましさを中々愚へ源藏人仲兼の  
 其勢五十騎法住寺殿の西門と堅て防ぐ處は近江源氏山本冠者義高馬は策はせ來りいか各  
 の陣を拘んとて軍をせらるゝや御幸を行幸を他所へ成ぬと承るものをと云ければさらばと  
 て大勢の中へ駈入散れゝは戦へば主從八騎討ちさる八騎が中河内の目下黨は加賀房と  
 云法師武者あり栗毛の馬の口強き乗たりける此馬の餘り口強く乗依がたくいと申す源  
 藏人さらば此馬は乗替よとて栗毛の馬の下尾白き乗替根井小彌太が二百餘騎討ちて扣へ  
 たる河原坂の勢よかけ入散れゝは戦ひてこよて又五騎討れぬ加賀房の主人の馬に乗替へたれ  
 どを終り討れけり源藏人の家の子に次郎藏人仲頼と云をのあり栗毛の馬の下尾白きが駈出  
 たるを見付て下人を呼愛成馬の源藏人の馬と見ふりいりにと申さんいと答ふさてどの陣へ

かけ入たると見たる河原坂の勢の中へこそ入せ給ひなれば馬をあの勢の中より馳出てい  
 と申ければ次郎藏人涙をばらゝ流しわな無慚はや討れ給ひたり幼少竹馬の昔より死なば  
 一所は死んところ契りしよ今の所々も臥んところ悲しけれとて妻子の許へ最期の形勢云遣  
 し唯一騎河原勢の中へ掛入踏踏張立揚り大音は敦躬親王は八代の後胤信濃守仲重が子お次  
 郎藏人仲頼生年二十七あり我と思ん人々寄合や見參せんとして縦様横様蜘蛛手十文字に駈破  
 り駈廻り戦ひけるが敵餘多討取て終り討死しけり源藏人おれをば知給はず兄の河内守仲信  
 打具して主從三騎南をさして落行けるが攝政殿の都をば軍は恐れさせ給ひて宇治へ御出わ  
 らけるに木幡山にて追付奉り馬より下て畏る何者ぞと尋ねりければ仲信仲兼と名乗す  
 東國北國の凶徒等々など思召たればとて御感有り頼て汝等も供も參れと仰に依て宇治の富  
 家殿まで送り進せて其より此人の河内國へぞ落行ける明る廿日本曾殿は六條河原は打立  
 て昨日斬所の首共皆掛ならべて注しされば六百卅餘人ゝ其中は天台座主明雲大僧正三井寺  
 の圓慶法親王の首を掛せ給ひたり是とみる人涙を流さるゝあり木曾左馬頭都合其勢七  
 千餘騎馬の頭一面は東へむけて天も響き大地を動くバウリに鬨を三度作りける京中又騒わ

へり但し是の悦の鯨波とぞ聞へし時に故少納言入道信西の子忠宰相長教五條内裏へ参門より入んとするに守護の武士共救さず案内の知たり或小屋に立入髪剃落し墨の衣袴着て此上の何か苦しかるべき入よとやされしかば其時赦し通しける泣く法皇の御前へ参て此度討れし人々のことを一々物語すなれば法皇明雲の非業の死をすべき者と露思し召寄ざりし物を今度唯我いかにあるべかりし命を代りたるは涙切なりける同廿三日三條中納言朝方卿以下四十九人が官職を留て追籠奉る平家の時の四十三人を停られしが是の既に平家の悪行も超過せり松殿の姫君を取奉りて關白殿の塔に推成其日又木曾左馬頭家の伴郎等と集評定有抑義仲一天の君も向ひ軍に打勝ぬ主上もやあらまし法皇もや成べき法皇も成うと思へと法師もあらんも可咲うらん主上も成とて童あならんも然るべからずとしくさらば關白もあらんと云ければ大夫房覺明進出關白より大織冠鎌足公の御奇執柄家の公達より成せ給ふと今古定例あるも君の源氏にて叶ひいとやさらばとて院の御殿別當は推成れ丹波國を知行となす院の出家あれ法皇も主上いまだ元服さる程の御童形もてましけるを知れざること方角けれ去程は鎌倉征夷大將軍源頼朝卿木曾が

狼藉を静んとて舍弟滿冠者範頼九郎御曹子義經も六万餘騎を相副差上されしが都より軍出來御所内裏皆焼拂ひ天下暗闇と成たるよし聞へしかば左右なら上て軍すべき様をさしとて尾張國熱田の邊お坐しける北面の宮内判官公朝藤内判官時成此とを訴んとて尾張國へ馳下り此よし斯とやければ兩冠者これの公朝關東へ下てやさるべきを其故の子細を存せぬ使ひ返して問る時不審殘るふとぞいこれける今度の軍も所従みな落失討れしかば子息宮内所公茂とて生年十五なるも相具して下しける夜を日は續て鎌倉に至り此よし斯の所鎌倉殿始終一尋訊給ひ是の裁判官が不思議のと申出て君をも惱し奉り多くの入高僧貴僧も失ひけると返すも奇怪之是らを召仕せ給ひ此後も天下の騒動絶まじくいとやされけり朝泰此とを陳せんとして夜を迄かけて道を急ぎ鎌倉も下り宛原平三景時お就てはまゝ陳じやければ鎌倉殿之やのみ目あかきを應答せせんと宣へば日毎は頼朝卿の館に向ふに何少度も取次者おし終は面目なく又都へ歸り上り辛き命生つゝ稻荷の邊は幽なる跡に栖しとて木曾殿西國へ使者を立急ぎ上らせ給へしと成て關東へ馳下り右兵衛佐を討へしと云遣しければ大臣殿始一門皆殺れけるも新中納言知盛卿肩を懸縦ひ洗季も成てい

へばとて木曾あどと語れいのでか都へ登せ給ふべき十善正統の主上三種の神器と帯して渡  
 せ給へば冑を脱弓弦を弛て是へ降人よ參れとアさせ給へかしとアさるゝ大臣殿其機修返事  
 有しか共木曾殿用ひす止ぬ入道松殿義仲を召請盛入道の悪行の人ありしが希伐の善根をも  
 品々あし置れたる故にや穩しう廿餘年保たり悪行斗れて世を治るとのあき物をさせる故を  
 なく押籠たる人々の官途共普救べしと仰られ混ら荒夷の様なれども隨ひして押籠たる人  
 を普許し奉りて本ふ復を松殿の御子師家公其時の未従二位中納言にて座しけるを木曾殿計  
 ひて大臣攝政となし奉る折節大臣明ざりしかバ徳大寺殿其比は内大臣左大將よて座しを借  
 して大臣攝政となしたるゆる人口幸なく新攝政殿を借大臣とぞやしける同く十二月十日法  
 皇よバ五條内裏を出し奉て六條西洞院大膳大夫成忠が宿所へ遷し奉る同十三日歳末の御修  
 法始られ其日除目行れ木曾殿の計ひを以て人々の官加階思ふさまにちし置り平家の西國  
 よ頼朝卿の關東よ木曾の都よ張行ふ後漢の末年蜀魏吳三國鼎立し互よ争ひたるふ勢流たり  
 四方の關々皆閉たれば公家の貢をも奉らず私の年税を止らねば京中の上下只小水の魚早燥  
 に就物産よ息よ異ならず危ながらふ年盡て壽永も三年ふ及びけり

故高倉宮滅亡の時御子の宮を御乳母讃岐守重秀が御出家させヤ具して北國へ落  
 下りしを木曾義仲一旦高倉宮の令旨も賜てわれバかひなくしく養育ヤ頼て還俗させ奉  
 り主よ取立んとて上洛の時具し敵山よ入置奉り法皇へ種々願乞奉れ共聞し召入られず  
 高倉院四宮御位に即給ふ故義仲甚法皇を怨奉る是ぞ狼藉よ及びし事の原と平家物語  
 は此事をいそぎ鼓の判官の讒奏のみ

平家物語卷之八終

平家物語卷之八終

平家物語卷之九

範頼義經宇治勢多を破石田爲久栗津原に義仲を討

青永三年正月院の御所拜禮もあく内裏の小朝拜も行れず平家ハ讃岐國八島の磯よて送り迎  
つ年の肇あれ共備式を事宜からず節會を行れぬ四方拜もあく腹赤も奏せず吉野の國栖を參  
らす青陽の浦吹風和よ日影長閑ふ成行共いつも氷に閉られし心地寒苦鳥の異ならず東岸  
西岸の柳南枝北枝の梅運速開落目よも心よも認らず花の朝月の夕詩歌管絃鞠小弓扇台繪合  
草盡蟲盡の興有し以前を思ひ出語續け永き日を暮し難繪ふ同十一日よ木曾左馬頭義仲院  
參して平家退討の爲西國へ發向すべき由奏聞し十三日首途と定し鎌倉殿木曾が狼藉を諱  
んど範頼義經兩大將よて數萬騎の勢をさし上せ美濃伊勢迄押來ると聞へしに木曾殿大い愕  
き宇治勢田の橋を引て軍兵を分遣す處折節勢も足されども勢多の大手ゆゑ今井四郎兼平八  
百餘騎宇治の手へ仁科高梨山田次郎五百餘騎一口への叔父信太三郎先生義教三百餘騎を向  
たりける東國より攻上る大手の大將軍蒲冠者範頼擲手の大將軍の九郎冠者義經宗徒の大  
名三十餘人都合其勢六萬餘騎之其比鎌倉殿も生食磨墨とて名馬有し生食の梶原源太景季

頻しばしばも所望しよぼうすけれ共自然しぜんのとあらんより頼朝よりとが乗のりべき馬うまを是これも劣あつちぬ馬うまとて磨墨すりすみを給たまはりける  
 其後そのち近江おみ國の住人ぢうにん佐々木ささき四郎しろう高綱たかつなは暇乞ひまごふ參まゐたるは鎌倉かまくら殿どの所望しよぼうの者ものの類いちを有ありけれ共其旨とも  
 存ぞんせよとて生食いけつきを賜たまはりぬ佐々木ささき畏おそて今度いま此御馬このごうまよて宇治川うじがはの具先もろこを渡わたしゆべし若死わかしせり  
 と聞きし召よれバ人ひと先まをせられしと思召おもれゆへとて罷立まかりたつ詰合つめあひの大小おほい名荒涼なこうりやうの才さい様さまやと問と合あ  
 ける扱さを駿河すまがは國の浮島うしま原はらよて梶原かぢはら景季かげすゑ高たかみよ控ひか誓ちかく諸家しよけの馬うま共ともを見みけるは鞍くら押お掛か思おもひ  
 兼かみ飾かざり或ある乗口のりぐちよ引ひせ諸口しよぐちよ牽ひせ幾いく千万せんまを引透ひきとお中ちゆうよも磨墨すりすみよ増まるの無なぞと嬉うれしく思おもふ處ところよ生  
 食いきこを出來いでたる金覆輪かんとくりんの鞍くら小總せうそうの鞆たもと白しろ鬃け白しろ沫うめ噛かせ舍人しやにん餘多あまた附引つひきためず躍おどせられバ梶原  
 打寄うちよ誰殿たれどのの馬うまぞと問とバ佐々木ささき殿どのよゆと三郎しろう殿どの四郎しろう殿どのか四郎しろう殿どのよゆとて引透ひきとおす梶原安  
 のらぬとかな同様どうようよ召仕めしる、景季かげすゑを佐々木ささきよ思召おも替からるゝこそ遺憾えんかんかれ今度いま都みやこへ上ありて木  
 曾殿そでんの御内ごうちよ四天王してんわうと聞きゆる樋口ひぐち今井いまい精根せいこん井いと組くみて死しか西國さいこくよて一人ひとり當千たうせんと呼よぶ侍さむらひと軍  
 して死しぬと思おもひしお今のそれも詮せんをじ愛あいめて佐々木ささきを待受まちうけ引組ひきぐみ刺違さしちがへ好侍こうさむらひ二人ふたり死しし鎌倉  
 殿どの損とんかけん事こととるあやま待まちけるを佐々木ささき何心なにこころなく歩あせ來きるいかに佐々木ささき殿どのの生食いけつきを賜たまふ  
 せ上のほせ給たまふ事ことと聲こゑかけられ哀あはれ此仁このにんも内々うちうち所望しよぼうせしと聞きつる物ものとと心附こころづされバゆ今度いま此は

大事だいじよ上ありゆが定さだて宇治勢うじせい田の橋はしを引ひゆべし乘渡のりわたさん馬うまなし生食いけつきをゆさバやと思おもとも後邊  
 のゆさせ給たまふたまは救すくれなきと承うける増まて高綱たかつなあどがゆ共益ともぎなしと思おもひ後日ごにちよいかあるは勘  
 當たうをゆれ軍功ぐんこうあらバや詫わげんと打立うちたつ前夜まへよよ舍人しやにんと心を合せさしを秘藏ひざうなる名馬なまを盜濟たうさいして  
 いのいかよと云いけれバ梶原かぢはら此詞このことばお忙然まじぜんと腹はらがむて景季かげすゑも盜たうべりしをとて笑わらてぞ除のける佐  
 々木ささきよ賜たまひし黒栗毛くろぐしの突つて太遠たうえんさか傍たがひを拂はらつて馬うまをも人ひとをも食くひけれバ生食いけつきとい名付ななづらる  
 八寸やちすんの馬うま梶原かぢはらよ賜たまひし極ごくて太遠たうえんさか傍たがひを拂はらつて馬うまをも人ひとをも食くひけれバ生食いけつきとい名付ななづらる  
 國くににて二手ふたてよ分瀧わけた殿どのに相伴あひともふ人ひと々武田たけだ太郎たろう加々美かみ次郎じろう一條いちじょう次郎じろう板垣いたがき三郎さんじろう稻毛いなぎ三郎さんじろう榛谷はんが四郎しろう  
 熊谷くまがは次郎じろう猪股ぶたまた小平へい六むつを先まとして其勢そのせい三万五千餘騎さんまんごせんごじゆうき近江おみ國の野路のろ篠原しよはら陣ぢんを取とり九郎くわ御曹子ごそうし義經  
 又また從したがふ安田やすだ三郎さんじろう大内おほうち太郎たろう畠山はたけやま庄司じょうし次郎じろう梶原かぢはら源太げんた佐々木ささき四郎しろう糟屋ぞうや藤太とうた澁谷しぶや右馬みぎうま允平いんへい山武者  
 所ところを先まとして其勢そのせい二万五千餘騎にまんごせんごじゆうき伊賀國いげこくを経て宇治の橋はし詰つめ押寄おしよけり宇治勢うじせい田其橋たけはしを引水底  
 みの亂らん株くわ打うちて大繩おほづなを張逆はりさか茂木もぎよ懸流けんりゆう掛か比ひの陸月りくげつ廿日にじふにち餘あまり比良ひらの高嶺たかね志賀山しがやま昔長柄むかしながはらの雪  
 を消谷きえやの氷解こほり水みづのいづも益えきりたり白浪しろなみ霧きりう懸けん落逆らくさく卷水まきみづを早はやけれバ瀬枕せまくら瀑布たふたぎを顯あらせ  
 り夜よの若わくも明行あけゆきと河霧かぎり深く立籠たちかごて馬うまを鎧よろいを毛色けいろ安定あんていならす義經よしつね河端かはたよ打出水うちいの面おもてを見渡

し人々の心を見んとや淀一口へや向ふべき又河内路へや廻るべき水の落足をや待たさいか  
いせんと宣ふ處武藏國の住人畠山次郎重忠生年二十二あるが進み出此河の沙汰の鎌倉まで  
を皆せり海川俄も出来たるよあらず琵琶湖の未なれば待共水の早し治承の軍より足利  
田原又太郎忠綱十七歳まで渡しけるも鬼神のいよもいひし重忠瀬踏仕んと丹黨を宗とし  
て五百餘騎并しと鎌倉を並ぶ處平等院の長橋の小嶋が崎より武者二騎引けひさか  
け出来たる一騎の景季一騎の高綱人目より何共とへす内先を心掛たるらん梶原の佐々木  
より一段許進んだる佐々木聲かけひかか梶原殿西國一の大河を腹帯の延てみへし縮給へ  
と云ければ梶原左も有らんと手綱を馬の結成は薬弓の弦を口も咄へ左右の鎧踏透し腹帯の  
絆を解て揺擧く縮直す佐々木其間も其をつと馳抜河へ颯と打入たり梶原竊れぬと思ひ  
けん績で乗入のかよ佐々木殿高名せんとて不強せられ水の底より綱をわらんとす佐々木さ  
ぞ有らんとて太刀を抜馬の足も掛る大綱ふつくと打切く宇治川早しといへども天下  
の生食苦もなく真直ま推渡し向の岸より打上る梶原が磨墨の川半より鎧藥形も推流され遙の  
下より打上ぬ佐々木は鎧踏張鞍嵩も起揚大音上宇多天皇九代の後胤近江國の住人此處平家  
物語書か

た悪し凡佐々木四郎高綱宇治川の先陣ぞやと名乗たり畠山五百餘騎劣じと渡所も向ふの岸  
例も委し山田次郎が放つ矢重忠が馬の額籠深し射られ飛揚るゆゑ戸杖突て下立たり岩  
波兜の手先へ颯と押掛たる事共せず水底を潜向の岸も着たりける打上らんとする後に  
扣る者あり誰と問は重親も答ふ大申かさんい大申の我鳥帽子兒なり餘り水早く馬の川中よ  
り押流され力及ばず跡も着て渡し之和殿原のいつも重忠もころ助られんをれとて引擡で岸  
の上へ擲揚る其儘たゞ直り太刀を抜て眞頼も鬚大音聲も武藏國の住人大申次郎重親宇  
治川歩立の先陣と名乗けるを敵も味方も是を聞一度お咄と笑ける重忠の乗替渡り着を待  
乗て敵中へ駆入長瀬判官代重綱も組けるが重忠の坂東一の太力なれば重綱と討取今日の軍  
神も祀ける宇治を堅し兵暫の禦戦けれ共大勢みみ川を渡りて攻打ゆる小勢もて叶がた  
く木幡山伏見をさして落行ける瀬田の大手の稻毛三郎重成が討ひにて田上の供御の瀬と渡  
しける義経飛脚を以て宇治の手破れりと軍の次第注進ある鎌倉殿佐々木のかよと日記を  
披きみ給へば宇治川の先陣佐々木四郎高綱二陣梶原源太景季一番首の畠山次郎重忠長瀬判  
官代重綱と組討其外具も注したり夫手勝手破れしかば本會殿の最期の暇ずさんとて六條の

御所迄参たれ共さして法皇へ奏すべし旨なきゆゑ門前より取てかへし高倉より見とめし女房の有りへ寄て最期の名残惜んとて頼にを出入らす参せし越後中太末光走來り敵既河原迄攻入い何とて打解渡せ給ふ疾く出いへせせ共猶立出ず左いい未光の前立て四手山は待いゆめて腹掻切て死しけるよぞ我を勘る自害よとて漸打出ぬ上野國の住人那波太郎廣純を先として漸百騎計の勢よて六條河原より打出みれば東國勢より掃屋五郎惟廣勅使河原五三郎有重眞先菟雲霞の大勢續來り木曾殿を取巻て撰討よせんとと大將義經の院の御所を守護せんとて五六騎みて六條殿へ馳至らるゝ大膳大夫成忠東の築牆の上に登り慥く見渡せば武士五六騎除背又戰ひ成て射向の袖春風又吹靡せ白旗颯と翻し砂煙立て馳參る成忠淺根木曾が又参りいぞ中院中公卿殿上人女房達迄今度こそ世の失ひ果んど危給ふ處よ成忠重て奏聞しけるの今日始て都へ入東國の武士と覺い皆笠効替つて見いとやも果ぬよ大將軍義經下馬して門を敲せ大音よ鎌倉征夷大將軍頼朝が弟九郎義經宇治の手を攻破り御所守護の爲馳参てい入られよぞやされしかば成忠餘どの嬉さよ急き築牆より躍下るとて腰を衝損じたりけれ共痛さの嬉さは紛て這く御前へ注進す法皇大御感有て門を開させ入ら

れける義經の赤地の錦の直垂の紫下濃の鎧着て鍔形打る兜の緒を締金作の太刀を帶二十四指たる黒の矢筈藤の弓の鳥打の本を紙廣さ一寸斗又切左巻よまさらる是を今日大將の効といひし法皇中門の連子より觀覽有て勇々敷氣ある者共かな皆名乗せよと仰けれ

先大將軍九郎義經次よ安田三郎義定畠山次郎重忠堀原源太景季佐々木四郎高綱澁谷右馬允重資とぞ中上げる鎧の色々替りよれ共頼朝事柄何れも屈竟の兵也成忠承て義經を大床の際へ召て合戦の次第御尋あり義經畏て兄頼朝木曾が狼藉を諍ため頼朝義經に六万餘騎を添差上せし也頼朝の勢多より向ひい未一騎をとへすし義經の宇治を攻破ゆゆ御所守護せん爲馳参し木曾の河原を上りよ落いよ軍兵共よ退せいへバ今定て討取ていべしとことよあげにやさるゝ法皇限か御感よし又木曾が餘黨など参て狼藉をやせめ汝能を守護せよと仰けれ承て四方の門よ堅待程よ兵共馳集り忽ち一万騎バかり成けり會殿自然のよあらば法皇を取奉り西國へ下り平家と一ツよ成んと力者二十八汰て音置れしが義經疾参り緊く守護し奉ると聞て此王夫空く今ハ吐じと河原を上りよ落行よ六條河原三條河原の間まで討るべかりし事度よかりしが取てかへして血戦し小勢よて雲霞の關東

勢を幾度か退拂しかば去年信濃を出しに五万餘騎今日四宮河原と過るに主従七騎も成  
 よけりのいふんよ今井を勢多へ向さらましと幼少竹馬の昔より死なば一所よと契しよ  
 空しく所ふ討れんことを口惜けれと後悔限あかりける又信濃を出しより巴款冬とて二人  
 の美女を具せられしお款冬の勞有て都留りぬ中よを巴の色白く髪脩く容顔秀麗なりける  
 が究竟の暴馬乗の惡所落し弓矢打物取ていひなる鬼神も遇とも一騎當千の女兵之軍とい  
 へ一方の將は向らるゝ高名肩を比る男あし今日も數度の苦戦七騎もなる迄薄手も負す  
 在しが木曾殿の長坂より丹波路へ龍華越して落す唯今井を心惹ひて勢多の方へ落給ふ  
 今井を八百餘騎もて勢多を堅るよ東國の大軍も攻立られ五十騎斗旗を卷せて都の方へ走  
 りけるが天津の打出の濱あて木曾殿も行違互も架の朽せぬを悦び義仲が勢山林に逃散て此  
 邊よを少し隠れ在ん汝が旗を建て見よと今井畏て卷持せしと挑さし上たれば案のこと  
 く彼所此所より馳集て三百騎も及びけいざ此勢もて最期の軍花やかよせん物と甲斐一條  
 次郎が六千餘騎もて扣たるへ面を振す切て入木曾殿其日の裝束よ赤地の錦の直垂も唐綾  
 威の鎧鎧形打たる肯賤物作の太刀を帶石打の矢の射殘を頭高に負成滋藤の弓の握を取鬼

蓋毛と云木曾立の馬も金覆輪の鞍置眞紅の厚綿に押掛を鎧馬上高く大音揚日來り聞けん今  
 見らん左馬頭兼伊豫守朝日將軍源義仲と甲斐の一條次郎と聞我を討て右兵衛佐よ見せ  
 よと呼ぶにぞすの大將を餘す者共漏すな若黨とて大勢もて取籠我討取んと競ひるゝ木  
 曾勢傳廿分の應對あれ共必死の鎧尖烈しく一條が勢數百騎討れ四方へ散亂す木曾勢も五  
 十騎斗も成けるが又も土肥次郎實平が二千餘騎へ切て入双方死骸の山を築しが主従五騎も  
 なりたるゆゑ木曾殿巴を召汝の女なよ疾々何地へも落さるべし義仲最期の軍も女を具せ  
 しいはれんも口惜りるべし疾々とすさるゝを更も肯す君も最期の軍と見せ奉らんとて  
 敵を伏處に武藏國の住人柳田八郎師重と云剛力者三十騎計もて來りける其中へ破て入八郎  
 も押並しが手をさく組伏馬上も頸切切て捨たりける其後物具脱捨東國の方へ落行ける手塚  
 太郎光盛も討死し手塚別當も落し降り木曾殿今井只二騎も成て兼平や一騎の餘の武者  
 千騎と思召いべし射殘せし矢七ツ八ツは漸防矢仕んゆれ見へは栗津の松原もて靜も歩  
 自害いべしとやをいよと我六條河原にていかよも成べきを汝を一ツ所にも思ふ斗に多く  
 の敵も後を見せて今迄を在し兼平涙を流し弓矢取り日來いかなる高名有共最期の不覺の



永代の環まで日本國に鬼神と聞へ給ひし木曾殿の河津と名をさる郎等の手ぬなどあり  
 口惜かるべしと歎く諫す故さらばとて唯一騎松原を以て駈給ふ兼平取てかへし追來敵を  
 防戦ふ木曾殿の瀧水張し深田ありしを知す正月廿一日入相比よて足もとを安座あらす  
 馬を娘舟入たるよ馬の頭さへ見ざりし打共ふれ共揚げこそされ共井のいかにありしと  
 ふが仰ら給ふ處を相摸國の住人三浦の石田次郎爲久進來り兵と放し矢も木曾殿内兜を射さ  
 せ痛手なれば眼府を馬の腹に推當俯し給ふを石田や郎等二人落合頭を取大音よ此日來鬼  
 神と聞へし木曾殿を三浦石田次郎爲久耐取しと叫りける今井遠く是を聞て今の誰を扱んと  
 大音わけ遠からん音よも聞ん還からん眼にも見よ木曾殿の乳夫子よ今井四郎中原兼平  
 生年三十三天王の隨一斯者在といの鎌倉殿を告知給ひん主君戦死あるうへの冥途に仕んため  
 自害するを見置て手本よせよとて太刀の鋒を口よ銜馬より眞倒お飛落置れてぞ失に  
 たる今井が兄堀口次郎兼光の十郎藏人と討んとて五百餘騎卒し河内國長野の城へ寄たりし  
 が討漏し紀州名草は在と聞是へ攻詰けるが都の軍を聞捨置て上る進淀よて木曾殿討死今井  
 が自害を承りさる何れの手へも向ひ主君の供に切死せんと後ろを顧れば五百の勢散

落去て井邊にまなれば茫然たるよ兒玉黨に因の者多く堀口を降参させ命とや乞んとて  
 種々す接るゆゑ堀口空しく降人となる此段剛太將へ申の處義経殊に堀口を惜院へ伺ひ命  
 乞ありけれ共院中の人々女房女童道法住持僧殿を焼高僧貴僧迄失ひたりしよの皆今井堀口と  
 愛彼を聲あり是等を助命あるべき様あしと一同よさるゆゑ竟に死罪よ定ぬ同廿  
 五日新攝政殿傳られ本の攝政還着し給ふ様六十日の間も替られ見果ぬ夢のおとし新攝政と  
 立る處之前關基房公人道松殿の消息を同廿四日木曾を馬頭兼黨五人が頭共都よ入大路を渡  
 云本の攝政の關白基通公清盛公の駕へ  
 さる堀口頸の供せんとを願ふゆゑ監指の直垂立烏帽子あて渡され廿五日に斬れぬ異國周の  
 末虎狼の國表へ諸侯蜂の如く起し時清公角感陽宮よ入といへ共嘲も侵掠るとなく徒よ  
 函谷の關を守て項羽を俟漸々の功よて天下を治し漢朝の基業成ぬ木曾殿も先都へ入らば  
 鎌倉殿も訴指揮に任たらんよ彼浦公の謀にも劣るまじ氣志景辰のよて器量多き者  
 何ぞ人の上よ立得べき身の程を知ら地將軍の号を汚し日利らき桑木よ掛らるゝ古今の癡  
 漢と評す

一谷軍熊谷平山先陣を競ふ生田春軍榎原生三三度の境

去程よ平家去年冬の頃より讃州八島の磯を由攝津國難波海へ押渡り西は一の谷と城郭を構へ東は生田の森を大手の木戸口と定め其間福原兵庫須磨を籠る勢山陽道八個國南海道六個國都合十八個國討從する所の軍兵十萬餘騎とを聞へし一の谷の北の山南の海口狭奥廣く岸高くして屏風を立たざる異ならず北の山際より南の海の遠邊迄大石を累上大木を伐て逆茂木より引深所には大舟共を側て撞桶まかさ城の面の高矢倉よは四國鎮西の兵共甲冑弓箠を積して雲霞の如く列居たり矢倉の前より鞍置馬共千重並重より立たり常々太鼓を敲で亂舞む一張の弓の勢は半月馬の前より掛り三尺の劔の光の秋の霜降の聞は横たへたり高き所より赤旗多く打建たれば春風も吹れ天も騒る唯火炎の燃上り異ならずされ共かく一の谷を渡られてよりの四國の者共聞せず中より阿波讃岐の面々源氏へ心を通ずれ共平家お矢一ツ射きバ源氏用ひまじと門脇平中納言教盛卿越前三位通盛卿能登守教經父子三人備前國下津井よ在と聞兵船才餘艘まで寄たるを能登殿大お患昨日迄我等が馬の草刈たる奴ばら一人も渡すまじと船棹取烈しく遅れ唯源氏への一筋の矢を射んと思ひの外遠負し淡路福良邊迄此國に源氏二人有と聞け故六條判官爲義兼末子賀茂冠者兼嗣淡路冠者義久也是

を大將に頼城搦せしよ能登殿直よ攻らるゆゑ賀茂冠者討死し淡路冠者は痛手負生捕れ其外百三十餘人が頼斬殺せし福原へ交名記し進めし陽脇殿の夫よ第一の谷へ参られ子息連の伊豫の河野四郎が存共参らぬを攻むる河野通信の安藝國の住人沼田太郎の母方の伯父ゆゑ一ツよありしを能登殿忽ち安藝よ押渡り散々よ攻給へ沼田の降参す河野の猶順す五百餘騎の勢五十騎斗に討成れ落行よ能登殿の侍平兵衛爲員よ取籠られ主従七騎よ討成れ舟よ乗んと逃れ行を平八兵衛が一手讃岐七郎義経弓の上手よ五騎射落し主従二騎よなりしを七騎馳來り一騎に紐是河野が郎等二人組で落七郎上よ成て郎等が首を搦んとする所へ河野返し來り讃岐七郎が首搦切深田へ投入大音揚伊豫國の住人河野四郎越前通信生年二十一軍をばかくこをすれ我と思ん人よ寄て留よやを名乗捨助し郎等を肩よ引掛逃延て伊豫へ渡る能登殿河野の討漏せ共沼田降人たるを召具し一谷へ参られけり亦阿波國の住人安摩六郎忠景も平家を背き紀伊國の住人國部有兵衛忠康一所よあり和泉國吹飯浦お城搦せしよ能登殿押寄給へバ叶す京へ逃上り殘る者ども百三十餘人の頸切かけらる又豊後國の住人臼杵次郎惟隆同國の緒方三郎惟義伊豫の河野通信一所よ成て其勢二千餘騎備前國へ渡り今木の

城は籠籠る能登殿三千餘騎よせ渡られしが城兵強し寄手毎度敗軍す敵等の凡の者あらざるゆゑ福原へ遣し數万の兵を呼れける城中是を聞て多勢に巻詰られば叶じと曰柁緒方の豊後へ河野の伊豫へ渡りける能登殿今手近く攻む敵なしとて福原へ参られければ大臣以下諸卿寄合能登殿毎度の軍功を感稱せらる是を能登殿六箇度の戦ひといへり同正月廿九日能登殿經平家通討の爲發向すべきよし奏聞を院より神代以來相傳る三種神器事故なく都へ還し入奉るべきよし仰下さる兩人長と罷出二月四日福原より故入道相國の忌日とせ佛事通行る朝夕の軍直に過行月日知ぬ共去年の今年に廻り來て憂かりし春よも成まらば世の世よであらば供佛施僧の意思を儘ならんかと各差遣て悲み歎れける福原より此次第目行れ僧も俗も官司となり中よも門脇殿中納言より正二位天納言より昇られけると一首の歌を奉て官位に請給りす

けふまでを忘れざるの我身かれ夢のうらも夢とみるかか  
と詠給へり大外記中原御直が子周防介師純大外記にたる兵部少輔正明五位藏人よあされ藏人少輔と召る昔將門東八ヶ國を討從へ下総國相馬郡よ都を立我身平親王と稱し百官を立た

かしにの曆博士をなかりける是の夫にの似べからず舊都の出給へ共三種の神器を帶し萬乘の位に備り給へり叙位除自行れんを宣へけり平氏福原遠攻登じとて故郷に殘留り給ひし人々皆悦合れしが二位僧都藤親の梶井宮年來の同宿ゆゑ風の便もすされ宮より文有旅の空の粧御心苦しけれ共都もいまだ静すあど細くと遊し與え一首の歌あり

大七れすとなたよしの女心をわかたぶく月にたぐへてぞやる

僧都是を顔み押當悲の涙塞みへや去程に二月三日源氏福原と攻べかりしが佛事を聞て供養を遂させん爲延され五日の西塞六日の道廬身七日の卯刻一谷東西の木戸口よて源平矢合と定めけるされ共四日の吉日あればとて大手揃手の軍兵二手よ分て攻下る大手の大將軍浦御曹子範頼相伴ふ人々武田太郎信義加々美次郎遠光小次郎同長清山名次郎教義同三郎義行侍大將みの梶原平三景時嫡子源太景季次男平次景高同三郎景家稻毛三郎重成榎谷四郎重朝同五郎行重小山田小四郎朝攻中沼五郎宗政結城七郎朝光左貫四郎太夫廣綱小野寺禪師太郎遠綱曾我太郎祐信中村太郎時經江戸四郎重春玉井四郎資景大河津太郎廣行庄三郎忠家同四郎高家勝太八郎行平久下次郎重光河原太郎高直同次郎盛廣藤田三郎大夫行泰と先と

して其勢五万餘騎二月四日辰の一點、都を立其日の申酉の刻まで、攝津國昆陽野に陣取た  
 手の大將軍九郎御曹子義經相伴ふ人、安田三郎義興、大内太郎惟義、村上判官代康國、田  
 代冠者信綱侍、大將より土肥次郎實平子息彌太郎、遠平三浦介義澄子息平六、義村島山庄司  
 次郎重忠、同長野三郎重清、佐原十郎義連、和田小太郎義盛、同次郎義茂、三郎宗實、佐々木四郎高綱  
 同五郎義清、熊谷次郎直實子息小次郎直家、平山武者所季重、天野次郎直經、小河次郎實能、原三郎  
 清益、多々羅五郎義春、其子太郎光義、渡柳彌五郎清忠、別府小太郎清重、金子十郎家忠、同與一親  
 範源八廣綱、片岡八郎經春、伊勢三郎義盛、奥州の佐藤三郎嗣信、同四郎忠信、江田源三、廣元、駿河次  
 郎清重、熊井太郎忠元、備前平四郎成春、土屋三郎宗遠、鈴木三郎重家、筑後坊辨慶、是等を先として  
 其勢一方餘騎、同日同時に都を立丹波路に掛り二日路を一日、打て丹波播磨の境三草山の東  
 の山口小野原に陣取ける平家の大將軍の小松新三位中將資盛卿、同少將有盛丹後侍從忠房、備  
 中守師盛侍、大將より伊賀平内兵衛清家、海老次郎盛方、を先として三千餘騎、よて三草山の西  
 の山口に押出し陣を取、其夜戌の刻土肥次郎實平を召て平家の是より三里隔て陣取たり、今宵  
 夜討すべしとて軍議を示し諸勢へ觸し、先小野寺の在、火と掛家より野山草木燃連て盡

よ増りて、明之斯して三里の山を越行、餘波を上たれば平家の明日の軍とて熟睡せし所、ゆゑ  
 將士一向、周章噪て向ふ者一人をかく唯、逃走るを追詰く討取暫時、五百餘人に及べ、手  
 負の數、えれず將士面目なく、や播州高砂より船よて讃州八島へ渡り給ふ備中守師盛、平内兵衛  
 海老次郎二人を具し、一の谷へ参られける大臣殿、大は驚き山の手、大事ゆる各、向れい、こんや  
 とやさるゝ、皆辞し、やされけ、能登殿へ度々の事ながら、此度を頼度よし、やされし、能登殿  
 の返事、漁漁の如く、足立の好方へ向ひ、悪からんへ、向ひ、いとあら、軍は勝とい、よをい、  
 じ、幾度でもいへ、強からん方へ、教經承て、罷向い、べし、一方、打破て、進せ、い、ん、心、安、う、思  
 召れい、べし、と有ゆる、大臣殿、悦で、越中前司盛俊を、先として、一方、餘騎、能登殿、又、附、られ、ける、兄、越  
 前三位通盛卿を、具して、山の手へ、向れ、ける、此、山、の、手、と、や、の、一、谷、の、後、越、越、の、籠、之、通、盛、卿、能、登  
 殿の、假、屋、へ、北、の、方、迎、寄、て、最、期、の、名、残、惜、れ、け、り、能、登、殿、大、に、怒、て、此、手、の、大、事、と、て、教、經、を、向、ら  
 れ、い、が、今、よ、も、山、の、上、よ、り、敵、落、す、程、あ、ら、ば、取、物、を、取、わ、へ、い、ま、じ、縦、弓、を、持、た、り、と、を、矢、を、番、す、  
 悪、か、る、べ、し、矢、を、番、て、も、彎、す、  
 ば、猶、も、悪、か、る、べ、し、増、て、左、様、打、解、渡、ら、せ、給、て、何、の、用、も、合、せ、給、ふ  
 べ、き、と、諫、られ、通、盛、卿、實、も、と、や、思、れ、け、ん、急、ぎ、物、具、し、て、人、を、  
 返、し、給、ひ、け、り、五、日、の、暮、方、滿、殿、の

手ハ昆陽野を立生田の森へ攻近くといへどもこゝ彼所に馬を休馬飼などして悠々と遠路を  
 走焼けり平家方より今寄るやと相待て安さ心をなかりける同六日曙は義經土肥次郎と七千  
 騎を副て一の谷西の木戸へ遣し其身三千餘騎よて後の鴨越と落さんため丹波路より搦手  
 へ向ひるゝ此處甚難所よて道も知がたさが武藏國の住人平山武者所季重能案内知ていひ  
 先仕らんとす義經平山よ向ひ和服の者今日始て見る西國の山の案内者の誠しから  
 ずと宣ふ平山重ねて偽証共覺すい吉野泊瀬の花見ぬ共歌人が知敵の籠たる城の後の案内  
 の剛の武者が知ていとは是又偽若無人よ聞へけり又武藏國の住人別府小太郎清重とて十八  
 歳の若者進み出父義重常よりい敵を襲れ深山に迷ひ老馬よ手綱結て打掛先よ追立て行  
 必道へ出るものこと義經優しうもやせし是の齊の管仲が故事に尤然るべし雪の野原を埋  
 ども老たる馬ぞ道の知るとやぞやとて白草毛の老馬に鏡鞍置白鬚番手綱結て打掛先よ追立  
 深山へ入給ふ二月始のとされは峯の雪村消て花かと思ゆる所も有谷の鶯音信て霞よ迷  
 ふ方もあり上れば青山峯とて登へ下れば梅花芬と薫る往還人の跡絶て莓の細道幽へ爰よ  
 武藏坊辨慶老翁一人具し來れり義經奇み問給へば此山の獵師案内せん爲進來いとや扱ひ

とて近う召今是より平家の城郭一谷へ落さうと思ふいいかよと聞給へば勢い叶ひまじ  
 三十丈の谷十五丈の岩あどよて容易く人の通ふよならずいよ然ら鹿の通ふかと尋給ふよ  
 さんい暖よ向へば草の深さよ臥んとて播磨の鹿の丹波へ越寒き時節の雪の衰よ丹波の鹿  
 の播磨の印南野へ越いとやける義經其時鹿の通ふ所を馬の通ぬやうやある汝是より案内者  
 たれと宣へば此身の年老て叶いひと然らば汝子のなさか一人いよて熊王と云生年十八歳  
 の小冠者を奉る父の鷲尾庄司武久と云問是をば鷲尾三郎義久と名乗せ一谷の先打案内者よ  
 具せられ平家亡び源氏の世と成て後鎌倉と中逢ひ奥州へ下り討れ給ひし時鷲尾三郎義久と  
 名乗一所よ死せし兵也六日の夜半迄熊谷平山搦手よいひけるが熊谷子息小次郎を呼て此手  
 の悪所なれば誰先と云と有まじ土肥が承けたる西の手へ寄一の谷の具先掛んとすよ小次郎  
 尤も誰を好む所然るべくいはんよ然らば平山も此手よ有先や心掛ん密み見て參れと小次  
 郎畏て其様子を伺ふよ案の如く熊谷よ魁を越れまじ人のしらす季重の一引も引まじとて獨  
 言して居たる下人が馬を飼ふよ長食と叱しければ平山左いひぞ此馬名殘を今夜斗をどて打  
 立たり小次郎此由斯と告げればさぞ有んとて直よ打立ぬ熊谷の赤草の鎧紅の緋かけ權太

生田森林軍  
柘原源太  
箴不梅花  
以折管戰  
三圖



栗毛とて聞ゆる良馬は跨り小次郎直家の澤瀉と一入摺たる直垂は藤繩目の甲西樓と云白月毛なる馬は乘兼指の黄塵の直垂小櫻と黄返たるをよるひ黄河原毛なる馬は乘主従三騎落さんととる谷をバ弓手よあし馬手へ馳行程は年來人も通ぬ田井畑と云古道を経て一谷の波打際を打出みればまだ夜ながら土肥實平七千餘騎鹽屋と云處に扣居たるを夜は紛れつと馳通り西の木戸口は押寄みれば城内をまだ静りて音をあし外も魁を境と扣たる者をあらんと思ひ搔櫓際に歩せ寄大音わけ武藏國の住人私市黨熊谷次郎丹治直實子息同名小次郎直家一谷西木戸の先陣と名乗ける城内是を聞よし敵の馬足を疲し矢種を射盡させよとて應答者をあかりける良ゆつて武者二騎後を見ゆるを誰ぞと問は季重と答ふ足下は孰ぞ直實父子に侍いかは御邊等の何よりぞ宵よりと答ふ季重疾に寄べきを成田五郎は死あべ一所と約したれば途中は少し見合たるは平山殿の餘りより早給ふ軍の魁首の身方の勢後置てこそ高名不覺も人お知るれ大勢の中へ只一騎掛入て討れんぬ狗死といや何の詮かひやとや實をと思ひ小坂の有つるを打上せ馬の頭引立身方の勢を俟所は成田逸參は乗ぬけたること謀れし残念と跡より打處は成田が馬の我が馬より聊脚立弱くはにぞ端なく追付正なるを

季重程の者を能を頼り給ふは是方御先へ参るは迹より緩々御出られと詞をかけ五六段先よりなりしがまばらしく後るはまはんとや時は篠目漸行は熊谷平山が聞前にて又名乗置んとて搔櫓まで近き大音に抑以前も名乗つる熊谷直實父子一谷先陣のよし先刻の通りは呼はりける城内是を聞夜通しは名乗熊谷親子を捉來んとて越中次郎兵衛盛續上總五郎兵衛忠光悪七兵衛景清後藤内定經を先として二十餘騎木戸を開き掛出より爰は平山の滋目結の直垂緋威の鎧ニツ引兩の母衣を負目精毛とて聞ゆる名馬は打乗保元平治に數箇度魁首高名せし平山季重と名乗て城熊谷親子を劣しと火出る斗戦ければ平家の侍共引入木戸を閉内みて防けるは熊谷の馬と射られ弓杖突て下立小次郎直家の十六歳の若者弓手の肘を射られて下立たり熊谷直實大音は鎌倉を立しより命の右兵衛佐殿に奉り駭ひ一谷の汀は曝んと思ひ切たる直實を去る氷島室山の軍は勝て高名したりと聞越中上總悪七兵衛はあきか能登殿の坐ぬや高名不覺の敵をこそよと我等父子は寄て見よやと喚さける越中次郎兵衛小村濃の直垂赤糸威の鎧鐵形の冑を着連錢葦毛の馬は乘熊谷父子は向て馳來る熊谷父子獅子の荒たる如く父子相並で競ひかゝるに叶すして引返す黒し返せ下り立て組やと呼る次郎兵衛聞す

引入ゆる上總懸七兵衛達らと舉動や我組んど走出んとするを次郎兵衛鎧の袖を扣君のは大事  
 是ふ限るまじ必死の鋒は争んと有べくもなしと制しけり熊谷の父子乗替の馬は打乗働く  
 程み端武者ながら多く討取分捕餘多せり平山は旗差を討れ安からせ思ひ城中へ蒐入當の敵  
 を討取て出熊谷の先に寄たれ共木戸開ねば蒐入す平山の後れたれども敵打出たる時木戸開  
 たれば入ぬこのゆゑは熊谷と平山が一二の蒐を争ひし也其内は成田五郎も出來り土肥次郎  
 實平七千余騎色々の旗おし立馳つめく戦ひける大手生田森源氏五万餘騎今のひたく  
 と押掛りしが武藏國河原太郎同次郎兄弟の者あり太郎弟を呼大名は手を下さず家人の高名  
 を名譽とす我らの自分手と下さねば叶ひがさし然らば今城中へ紛れ入矢一筋射んと思ふ千  
 万が一生きて歸らんと有がたし汝残り留り後の證人又立とやを次郎承り兄弟の者が一人留り  
 いく程の榮花か保いはん唯一所又戦ひ死ぬいんどて下人共呼寄妻子の許へ最期の有様云遣  
 し馬よは乗す芥下と履生田の森の逆茂木を上り超越中へ入たりけるは星明又鎧の毛安定を  
 らず大音又武藏國の住人河原太郎私市高直同次郎盛直生田の杜の先陣と名乗ければ城中是  
 を聞移つばれ東國武士の怖しは此大勢へ唯二人蒐入何とか仕出べき唯置て愛せよとて討ん

と云者さらはなし兄弟弓矢取ての手だれもてさし詰挽詰さんくくは射る是を見て今此者  
 愛し悪し討やと西國お聞へ一勁弓の精兵備中國の住人眞名邊四郎同五郎とて兄弟あり兄は  
 一の谷よ置る第五郎是を承る弓矢打番能引て暫し保ら切て放てば河原太郎が鎧の胸板後へ  
 くざと射ぬかれ弓杖は絶えぬよど弟次郎肩は引掛生田の逆茂木よ升り踏んとする處を眞名  
 邊が二の矢は鎧の下散草摺の迦と射られと落とす同枕み臥たるを眞名邊が下人落合せ二  
 人の頭を取大將軍知盛卿に見せやせば哀れ剛の者や一人當千の好兵ぞ可惜者共が命を助  
 け見てとぞ宣ひける眞名邊が手始の働を賞し太刀を賜り面目とみへにける河邊が下人走  
 散て河原殿直先掛討死ありしと呼るは梶原平三是を聞私の黨の殿曹の不覺もて河原兄弟の  
 討し。時能を寄よやくと呼り梶原の五百餘騎は逆茂木取除させ城内へ入んとて蒐けるを  
 般よ引付雨の如く射る矢を切拂ひく揉にもみて木戸を押し崩しとつと入次男平次餘り進む  
 間父使者と立後陣の勢續ぬは先蒐は勳賞有まじと大將より仰ぞと云送る平次暫く扣て  
 武士の取つたへたる梓弓引て人のかへすものり  
 とやさせ給やとて喚て馳る梶原平三士卒よ下知し平次討すな續やくと父平三お源太景季



三郎景茂五百餘騎の兵共平家の大軍を切摩け蜘蛛手巴の字の如く掛破り颯と引て出たれ  
 平嫡子源定朝餘々深入してやみへざりし平三源を浮べ軍の先を掛るを子共が爲を源太と  
 討せ吾命生たりと何ういせんいざ返せやと又引かへし梶原平三先に進み大音揚昔八幡殿  
 後三年の戦も出羽國子福金澤の城の責られし時生年十六にて直先かけ弓手の眼を兜の鉢  
 付の板造射つけられながら其矢を抜で當の矢を射返し敵を射落し勲賞を蒙り名を後代に上  
 たりし鎌倉權五郎景政も五代の末梶原平三景時とて東國に一騎當千と呼ばれし兵を我と思  
 ん殿曹も見參せんと呼びりける城中お是の開へたる能敵を漏す余餘すも追取巻けるを  
 故くしに蹴散し源太と心付て見廻せば梅の枝を箴よさし大意にて働ものあり近よりみれ  
 ば源太も馬を射られ兜を打落され郎等左右にあり敵五人が中も取籠られ必死の働する度  
 ん春風箴の梅と散しかゝる烈しさ中よを風流ありてと平氏の上下感賞す平三景時救來り父  
 子して五人の敵三人討取二人深手負せ源太を拘ひ木戸の外へ退し梶原景時二度の境源  
 太景季が箴の梅とて後代迄傳ふる是を撃て三浦鎌倉秩父足利黨の猪俣兒玉野井與横山  
 西黨綴喜黨惣じて私黨私市の黨の兵共源平五に亂れ合喚叫聲山を響し地を動し馳遠響

の音雷の如く射邊ふ矢の篠を衝雨あ似たり或の海手負深疵蒙り引組て刺違又の押く首を  
 取あり掻るありされども平家大軍なれば始終の勝心元なくとへしが七日の曙義經の三  
 千餘騎越に打上り人馬の息休て坐けるが其勢は駭きしや男鹿二ッ女鹿一ッ平家の城郭  
 一谷へ落たりける平家方是を見て近く在ん鹿を我等も恐れ山深う入べきよ此方へ落し  
 しける方一上より敵の落すかやとて大に噪ぎける義經城郭を遙に見下丁試みよ馬少落  
 されしよ或の中よて覆て落或の足打折て死するをあり其中は鞍番馬三匹相違なく落着て越  
 中前司の屋形の前に身振して立たりける  
 一谷落城平家の諸將士討死一門再び海上は漂ふ  
 義經大勢に向ひ馬の主が心得て落さんには痛みの損すまむ義經を手本よせよとて先三十  
 騎ばかり一時は落さるゝ是を見て三千餘騎皆續て落そ其處小石交の砂なりければ流れ落し  
 ば三町斗り颯と落し墮なる處は扣へたり其より下を見下せば大磐石の苦むしたるが釣瓶下  
 しま十四五丈を平わたる其より先へ進めくをへす又後へ取て返す様もなければ各々  
 へぞ最期とあされたるは三浦の佐原十郎義連すゝみ出戦等が方よの鳥一ッ立たぬ朝夕様

の所へ馳行け是ハ三浦の方の馬場ぞとて眞先掛て落しければ大勢みお續て落すは後より落す  
 ず鎧の鼻ハ先陣の首鎧は障程之餘りのゆふせさよ眼を塞曳し聲して馬よ力を附て落す人の  
 所爲との見ず唯鬼神の所爲とぞみへし落しを果ぬる間を咄と作れば山彦よこたへ十万余騎  
 共聞へける村上判官代康國が手より火を出し平家の屋形假屋を片時の煙と燒拂ふ炎一圓お  
 かりければ平家の兵共前の海へ走り入浴は助船いくらも有といへども一般に鎧たる者四  
 五百人千人斗込乗たれば浴より三町計漕出すらち目の前まで大船三艘沈けり其後の好武者  
 斗雜兵に乗べからずとて太刀長刀にて打拂ふかくするの知あがら敵は逢て死もせで乗  
 じとする船は取付揚着臂を打斬れ肘を切落され一の谷の汀に朱を流し列伏けり大手よも  
 濱の手よも武藏相摸の若殿曹面を振す命を惜ず戦ふ能登殿の毎度の軍に一度も不覺を取給  
 り此今度のいかい思れけん薄墨と云馬お策西を指て落給ひしが播磨の高砂より船よて讃  
 岐の八島へ渡られぬ新中納言知盛卿生田の森の大將軍なるが黒煙舞掛るを見て徒早西の手  
 の破れけりとして取物とらずと落られければ其以下の皆逸足は散亂せり越中前司盛俊ハ山  
 手の侍大將にて今ハ落る共叶じと扣て敵を待所は武藏國の住人猪俣小平六則綱走來て

無手と組猪俣ハ關東の力者鹿角三の草薙ハ斬り引裂しと云盛俊ハ人目より三十三人の力を  
 顯せ共六七十人して上下す舟を唯一人して推上推下すと云大力あれば猪俣と取て押へたる  
 又猪俣手足迄瘡て働す暫く息をやすめゆける敵の首を取ハ互ハ名乗てこそと云を盛俊  
 實おもとて某本ハ平家の一門たりしが身不肖よて侍よ下りし越中前司盛俊ハ和君ハと  
 いハバ猪俣小平六則綱を今我命助給ハ御邊の一門何十人たるとも勳功の賞よ替御命  
 斗ハ助け進せんと云ける又盛俊怒て身不肖あれども流石平家の一門ハ源氏を頼ん共思ひよ  
 小ず源氏を又頼るべくも思されし悪き和殿の中様かなとて既ハ頭を搔んとす正亦う降人の  
 頭を取様やあると云れ更ハ助んとて救しけり畔の上ハ腰かけ二人息繼居る處へ緋威の鎧着  
 て月毛の馬に乗たる武者とせ來る越中前司ハ性氣に見ければあれハ猪俣が親しき人見四郎  
 之則綱が在を見て參るに苦しうははずとアせせを近く寄ハ組んと盛俊頻ハ人見と見詰居  
 る傍の由爾を見濟し猪俣起上り拳と握堅め盛俊が鎧の胸板はつと突て後仰ハ倒し起上らん  
 とする處を猪俣上へ乗掛り三刀刺て首を取太刀ハ貫て日來平家方ハ鬼神と聞へし越中前司  
 盛俊を猪俣小平六則綱討取しと呼り其日高名の一の筆ハ附られける西の手の大將たりし薩

摩守忠度細地の錦の直垂は黒糸の鎧、騾は鑄掛地の鞍置百騎斗を、從ていと扣々落給ふ處に武藏國の住人岡部六彌太忠澄追來り敵に見せ給ひす返し勝負はれと云ふ見返り是の身方ぞとて振仰り給ふ内肯をみれば鉄漿黒之身方よかねをめたるのなきものをいかにま平家の公達ならめと押並引組百騎の兵の國々の假武者なれば我先は落散て一騎を落合す忠度の熊野育の大力究竟の早業なれば悪い奴を御方といはれ云せよのしとして引摺み捕て引寄馬上にて二刀落付所にて一刀迄突れしが二刀の鎧もて通らず一刀の内肯なれ共薄手ゆる死せ取て押へ頸を搔んどし給ふ處は六彌太が童殿馳來て馬より飛下討刀振て忠度の右の肘を臂の本よりふつと打落す今のかうとや思れけん暫し除最期の十念唱させよとて六彌太を欄で弓丈のり投退其後西に向ひ十念し給ふ後より六彌太頸と賜りける好首との思へ共誰と知ざりしが箴は結付ふるをみれば旅宿花と云題にて歌一首讀れしとみへ

行暮て木の下蔭を宿とせば花や今宵の主あらまし

忠度

と書れけり是よて薩摩守とぞられけり頼て首を太刀の鋒に貫き大音聲は此日來鬼神とを聞へし平家の大将薩摩守忠度を岡部六彌太忠澄が討奉りしと呼れば敵を身方も是を聞空

最惜武藝といひ歌道といひ好大将にて坐つるをとて鎧の袖を濡しける生田の森の副將軍本三位中將重衡卿の茶褐色を白く黄なる糸して岩は群術織たる直垂は紫下濃の鎧着て鍔形打たる肯金作の太刀を帶童子鹿毛と云駿足は金覆輪の鞍置て乗給ひ乳夫子後藤右兵衛盛長は秘藏せられし夜目無月毛に乗られ主從二騎助船に乗んとて渚の方へ落給ふ所は庄四郎高家梶原源太景季追掛たれば船も乗隙なく湊河掣藻河を打波り板宿須磨を過西へ落給ふ乗たるの童子鹿毛とて名たる良馬ゆる追付と叶す梶原遠矢は馬を射たり進退究て見へたる乳夫子盛長吾馬召れんとぞ思ひけん頼鎧合せ逃延るを三位中將いかも盛長我を見弄何國へ行を日來左の契らざりしをと呼り給ふを虚聴ずして赤効を撥遺跡を閑し逃去ぬ中將今の頼も身と投んと海へ颯と投入給へど遠淺みて沈べさ様なく馬の疵深ければ遠く打せるとも叶す腹切んとし給ふ所へはや庄四郎乗付馬より飛下り三位中將と捕へ我馬も搦乗鞍の前輪も縊附我身の乗替も乗て御方の陣へ引入ける盛長の逃おはせ熊野法師尾中法橋を頼殿れ居けるが法橋死して後後家の尼公訴訟の事まで都へ上るふ其伴して上りければ三位殿深く不便加られし身の一所よいかにも成すして思ふ寄は後家尼公の供して上りしよと瓜彈

して誹ける盛長を流石耻しうや思ひけん扇を顔に管けるとかや扱又熊谷直實の平家の公達  
 助船に乗んとて汀の方へ路行給ふと聞好大將又組んと其道を進み俟所は練貫は鶴縫たる直  
 垂は萌黄勻の鎧鍬形の冑金作の太刀を帯鞆を負幌掛て連錢葦毛の馬は梨子地の鞍置朱の  
 途込藤の弓を横へたる敵一騎沖の船を目がけ海へ颯と乗入五六段泳せける熊谷能敵と見込  
 進み寄いか能大將軍と見ていささなうも敵は後を見せ給ふものか返させ給へくと扇  
 を揚て招きければ招れて取て返し汀は打上らんとし給ふ處は熊谷浪打際まで押双無手と組  
 でとうと落取て押へ頸を搔んと冑を推仰みれば薄假粧して鉄漿立也我子小次郎が離れば  
 りよて容顔誠に美麗也抑いかある人にて渡らせしや名乗せ給へ助け進らせんと申ければ先  
 和殿の誰ぞ物其數にいね共武藏國の住人熊谷次郎丹治直實と名乗ける扱は汝の好敵ぞ  
 名乗ずと首取て人よとへ見知る者あらんと宣ひける熊谷哀大將軍や此人一人討奉る  
 とも負べき軍は勝べき様あく又助やたりと勝軍を負るとをわたり今朝我子が薄手と負す  
 ら直實心苦さよ此殿討れ給ひぬと聞給ひ親兄の歎悲給はん程はくバ久ならん助けや  
 んとして後と願れば土肥梶原五十騎ばかり出来る熊谷涙を流しわれ御覽いへいかに助け

進らせんと存すれ共身方雲霞の如く満々てよを逃しははと同くは直實が手にくけ後の孝  
 養を仕がやはんとすければ唯疾を管取れと宣ひける熊谷餘り最愛何くに刀を立てきとも  
 覺へず目を閉心を消果前後不覺ありければもさて有べくもあければ涙ながら頸を搔切ぬ  
 哀れ弓矢取身程口惜かりし事はなし武藝の家に生れずは何しと唯今かゝるうさめをみるべ  
 き情あを討奉るものかあと袖と顔は打當て雨々として泣居たる頸を裏んとて鍔直垂解みれ  
 ば錦の袋は入られたりける笛を腰にさし入れけるあな此曉城の内まで管鼓し給ひつるは此  
 人々ほさおはし坐けり當時何万騎かおらる御方の内軍の陣は笛を持人のよをわたり上臈は  
 優しきもの哉とて是を取大將軍の足覽に入れみ入る人涙を流しけり後に聞は修理大夫參議  
 經盛の乙子無官太夫敦盛とて生年十七ふなられける件の笛は祖父忠盛笛の上手まで鳥羽院  
 へ下し賜しを経盛相傳有しが敦盛笛の器量たるは依て持れたるとや名を小枝とやける世  
 青葉笛と云是より熊谷が發心の發りしは狂言繪圖の理と云ながら遂は誑佛乘の因となるこ  
 傳るは是は熊谷直實後年伯母嫁久下權頭と領分の境を争ふと有餘倉殿は前々對決の時直實武道  
 を哀れ熊谷名おれとを不辨おて理を持ながら意を達しがたぐ鬱悶して其所の遠侍は皆切弄  
 の弟子と成蓮生と云演邊の軍に門脇殿の末子藏人太夫業盛の常陸國の住人土屋五郎重行と

組て討れ、皇后宮亮經正の武藏國の住人河越太郎重房討取、從五位下清定、淡路守清房の六男七男若狭守經俊の次男三騎打建敵中へ破て入散り、戰ひ一所、討死と新中納言知盛卿の生田森の大將軍なるが其勢多く討死し、又の落失御息從五位下知章侍、お監物太郎頼方主從三騎汀の方へ落給ふ處、兒玉黨と覺しく圓扇の旗差たるが一群追掛たるを監物太郎弓の上手あふければ取て返し、旗差を頸の骨と射て馬より落す、其大將と覺しき、知盛卿は組んと馳双ふる處、お子息知章父を討せしと中へ隔り無手と組でどうと落取て押へ首を掻起揚らんとし給ふ處を敵が登落合せ、知章が首を取、監物太郎又其意を討取ぬ、其後思ふまゝ、働いて討死せり、此紛は新中納言遊延給ひ海甘餘町を馬よて泳せ、大臣殿の舟へ參られける舟より人多く馬立がたきゆを漕へ馬を追廻さる阿波民部少輔重能は馬敵の物も成れぬ、いん射殺し、いんとては手矢番と出けれ、知盛卿たとい何者の馬もする共、唯今我命を助たりし者をとて止め給へ、此馬主人の旗を悲し、船を漕行を暫く、沖迄暮ひ來り深みみて見送り、漸落の方へ行し、がいく度も振かへり見て、其後陸へ上り休居たるを河越太郎重房取て院へ奉り御座り立らる元來此馬の院の御秘藏ありしが、宗盛公内大臣も成て、院下の有し時下ををしを弟知盛

卿へ預られしなり、信州井上立ゆる井上黒と召れしを此度より河越黒と召れし、知盛卿大臣殿も向ひ知章も後れ、監物太郎を討せ、心細う成ては我子の討るを餘所も見ていかかる親おれ、おかく遁れ參りしやらん殊も其子の父を助んとて命を捨るを人の上あらの愛情を忘れたるを嘸全輪しう、いはんに我身の上も成れへ、命は愛しもの、と今こそ思ひ知れいへ、人の思ひ給いん所愧しう、いとて鎧の袖を顔も當泣れる大臣殿意も知章御父の命も代られし、ぞ有がたき手も利心も剛、よき大將なりし、あの清宗と同年もて今年も十六なとて御子右衛門督の座する方を見て涙ぐみ給へ、並居たる面々皆鎧の袖を濡されける小松殿の末子備中守師盛、い主從七人小船も乗落給ふ處、新中納言知盛卿の侍も清右衛門公長馳來りわれ、備中守殿の御舟とこそ見ゆ參り、いはんとや心得て船を漕へ、掛寄しに大の男鎧着ながら船へ岩波と飛乗るも船の些しくるりと踏返し、備中守浮ぬ沈ぬせらるるを畠山が郎等本田次郎親經主從十四騎走來り馬より下備中守と熊手よて引立首を討生年十四歳とや越前三位通盛卿山の手の大將軍たりしが、其勢討れ、又落敵弟能登殿の落られ自害せんとせられし、近江の佐々木黨の木村三郎成綱、武藏の玉井四郎資景、彼是七騎よて取籠討取けり侍一人附居しが何

地へか逃去ぬ凡東西の木戸口時過る程源平數を盡し討れ櫓の前道茂木の下入馬の肉山の  
 ことし一谷の小篠原縁の色紅は變じ生田森の山傍海の汀に射られ斬られ死するは數しれ  
 ず源氏方より斬鼻らる首二千餘之宗徒の人々の越前三位通盛卿弟藏人太夫業盛薩摩守忠  
 度知盛卿の息知章備中守師盛相國入道の六男七男も清定淡路守清房經盛卿の嫡子皇后宮亮  
 經正弟若狹守經俊其弟太夫敦盛以上十八人一旦十四國を征へ勢の風も十餘方都へ近付と唯  
 一日路此度の頼母しう思ひの外義經の武略ゆゑ片時に攻落され主上を始船召潮引れ風  
 に従ひ紀伊路へ趣く船をひり蘆屋の沖に漕出で波に洶る船をひり又須磨明石の浦傳ひ  
 泊定の楫枕片敷袖をまはれつ、腫は霞む春の月心を摧ぬ人をなき淡路の迫門を押渡り  
 繪島が磯は深へ波路遙は鳴渡り友迷せる寒夜衛是も其身の類りなく浦々島々に散浮べ  
 互の生死も知がさく心細うぞなれける通盛卿の侍瀧口時員北の方の御船も参り君湊  
 河の下よて木村玉井等討れ給ひ時員は供討死と常も心得し所像も仰も吾いかよなるも  
 も必存命ては行衛を尋せよとくれづの仰よてかひなき命生強面こそ是迄参りいへと  
 ずけれ北の方左右の返事なく引渡して臥給ふ唯一人附添し乳母の女房も同じく歎沈みけ

夕七日の暮過聞給ふより十三日夜迄起を上り給ひ十四日の八島へ押渡る夜も深船中静り  
 けれ乳母の女房もささるゝ君の討れよしとの聞しが其實とも思ひで在しが此暮程より  
 實も左もほらんと思ひ定め其故の皆人湊河とやらんは討れ給ふものみよて其後生て逢たり  
 と云者一人あし明日打出んとての夜白地なる所よて行合たりしか何より心細げ又打歎き  
 明日の軍よ必討れんと覺るを我いかも成ん後いかの玄給ふべきなど仰しかども軍  
 しいものとなれば一定さるべしとも思ひで有つること悲しけれ其と限と知んよの後  
 世の契もや交さんと思ふも今更歎さ之直からず成たるも日來の隠して語ざりしうども餘り  
 よ心深く思ひれじとて云出たるも殊も嬉しげも通盛三十二も成まで子も無りけるも哀同じ  
 うの男子よをわれかし浮世の忘形見よもと思ひ置計之扱幾月も成らん心地いか有ら  
 んいつとなき波の上船の中の住居なれば閑も身々とやらん時いかの仕給ふべきなど云し  
 ははかきかりける豫言かな誠やとん女の左様の時十も九ツの必ず死ぬるなれば愧がましう  
 方見目を見て空うならんも心愛し静も身と成て後少者と育ちき人の紀念ともみばやと  
 の思へ共それをみん度事よ昔の人のみ戀しうて思ひの數の増るとも戀といよもあらじ

終ふに遁るまじき道こそし不思議に此世を忍び過す共心に任せぬ世の慣ひ思ひ外のとも  
 出来りをぞするそれも思へば心愛し目懸が夢よみへ醒れば儂よ立ぞとよ生て居て兎も角よ  
 人を戀しと思ひんより水の底へも入らばやと思ひ定て有ぞかし足下一人を留て敷をかくるハ  
 心苦しけれども我わが装束の有をば取ていかあらん僧にも奉りなき人の傍菩提とも吊進ら  
 せ我わが御生をを助け給へ書置たる文共の都へ傳へてあと細々と宣へば乳母の女房涙を押  
 へ幼子を振捨老たる親を留置遙々是迄附参らせし志をばいかばのり共思されしや此度討  
 れさせ給ふ君たちの北の方をば敷の程のいづれ疎よいん一蓮へと申し召給ふとを生  
 替せ給ひん後六道四生の間にて何色の道への懸せ給ひん行達せ給ひんを不定なるま身  
 を沈め給はんは由きさばと静よ身々とあらせ給ひいかある岩木の間にても少人を生立の姿  
 を替佛の御名と唱へきさ君の傍菩提と吊ひ進せ給へかし其上都の此事をば離見續参らせよ  
 とてかやうよは仰られしやらん恨しうを承りしと泣口説ければ北の方此事悪うを知らんと  
 や思れけん是の心よ代つても推量り給へかし世の恨しき別の悲しきには身とを投んと云は  
 常の習也されとせざるには有難き例ぞかし我思ひ立とあらば口よも洩すべさかひ今の夜も

更ぬみやや寐んど宣へば實は思召立とあらば我をも千尋の底迄も引具し給ふべし後れ進と  
 其片時を存命へしと覺へしハぬをとては傍よ些打目睡たる隙は北の方船へ起出漫々た  
 る海上のいづれを西とわかねども月の入さの山の端を其方の空と定まつ静よ念佛し給へ  
 沖の白洲の啼千鳥天の門渡る楫の音折から哀や勝りけん忍び聲よ念佛百返斗唱給ひ南  
 無西方極樂世界の教主彌陀如来本願誤らば飽て別れし妹背のなからひ必ず一蓮よと泣々  
 遙よから口説南無と高らかに一聲して海よを沈給ひける一谷より八嶋へ推渡る夜半過なれ  
 船中静て知る者なし其中よ楫取一人寐ざりしが是を見てあの舟舟より女房海へ入せし  
 いと仰る乳母の女房打驚き傍を探れども坐さりりければ唯われよ入々と喚さける數多起出  
 取揚んとすれ共春の夜の習ひ打霞四方の叢雲浮れ来て被共く月朧みてみへ給ひ途程經  
 て取上たれども早此世よなき人も白き袴よ練貫の二衣と着給へり乳母恨かこち歎悶れと  
 を一事の返事さへなく繰り通ふ息だに絶果の春の夜の月を雲井よ傾き闇る空を明行の各殘  
 こを盡ね淨上り給ひぬ權に故三位殿の着背一領残りしを引纏ひ再び海よ沈めける其跡より  
 乳母續て無人を難なく取押へ歩跡の營を偏よ勤るゆゑ故三位殿の弟中納言律師忠快は顔

み頭を剃捨戒を保ち侍主の後世を弔ひける昔より男は後れ姿と替るの常の習ひ身を投る迄  
 の有がたき様香り忠臣二君は仕す真女二夫は見ざる先賢真しくも保ち給へり乳母よいのれ  
 し詞の中にも心お任せ終世の慣い思ひぬ外のことを出來りをすると言されし治世にそら前  
 り出たる二代の後ありまして乱れたる世にいかんぞ不思議出來ざらん此北の方の刑部卿範  
 方の女禁中一の美女よて上西門院の女房小宰相殿とや安元の春十六歳よて女院法勝寺へ花  
 見の御幸あり通盛卿其比中宮亮よて供奉し此女房を見初歌を詠文を尽されけれ共玉章の數  
 のみ積り取入給ふとをあし既は三年も成しかば通盛卿今を限りの文を書て小宰相の詩へ遣  
 り居給ひざりしかば空しく歸る道よて里より御所へ來るを見かけ彼使心利て走通  
 るふりよて彼文を乗れし車の中へ指入たり小宰相車の置べくもなく大路へ捨んも流石  
 よて袴の腰は袂御所へ參られしが所を多きに宮仕して御前よ彼文を落されしと女院早くを  
 取せ給ひ御衣の袂よ引隠させ給ひて珍しき物をこそ求めたは此主の孰なるらんと仰けれ  
 御所中の女房達萬の神佛かけて知りぬはずとのみや其中小宰相斗顔打赤めつやく物を  
 もすされず女院を内へ通盛のやとの知し召れたりけれは扱此文を扱て御覽されは綺爐の煙

の勻殊は深き筆の立所も尋常ならず餘りよ人の心強きも今の中へ嬉しくてあど細くと書  
 て興よ歌一首あり

我戀の細谷川のまろさばしふみらへされてぬる袖かな

女院是の逢ぬを恨たる文や餘り人の心づよきも今の中へ怨となるものを中比小野小町目  
 像殿しう情の道有難かりしかば見人脚者肝魂を傷すと云となしされ共心強き名をも取  
 てける終に人の思ひの積りてて風を防ぐ便もなく雨を漏さぬ業もなし宿は月星の涕  
 り浮び野邊の若菜澤の根芹を摘てこそ露の命をば過しけれ是のいかよを返事有へ  
 ては硯石寄 忝も自ら返事おそはされけり

唯たのめ細谷川の丸木橋ふとかへしての落ざらめや

胸の中の思ひの富士の煙は四れ袖の上の涙の清見が關の涙あれや眉目  
 位此女房を給つて互の志強からされは西海の波の上舟の中迄を引具  
 うれける門脇殿の嫡子越前三位末子業盛も後れ給ひぬ今の頼の能登  
 忠快斗と故三位殿の信共此女房をこそ見給ふべきよ其さへかやうに



細くぞあられる

平家物語卷之九終

平家物語卷之十

平家諸將の首大路を引渡す法皇讃州の平氏へ院宣を下さる

壽永三年二月七日攝州一谷よて討れし平氏の首共十二日都へ入平家お結れたる人々のいかにある憂目をかみんと悲む中よを大覺寺に隠れ居給へる小松三位中將惟盛卿の北の方いとい覺東なく思れたるお三位中將と云公卿一人生捕ありて上ると聞給ひまのをいかにせん」と悶焦れ給ふ或女房大覺寺よ參て三位中將殿とい本三位中將殿の傍事也と承るよしやにぞ然らば首共の中よをやと左てを心易う思ひ給はず同十三日大夫判官仲頼以下檢非違使共六條河原に向て首共請取東洞院を北へ渡りて獄門に梟らるべきよし範頼義經奏聞す法皇此事いゝわらんと思召煩ひ給ひ太政大臣左右の大臣内大臣堀川大納言忠親卿よ仰合さる五人等くやさるゝの昔より卿相の位よ至る人の首大路を渡されし先規なし中よを此輩の先帝の時より戚里の臣として朝家よ仕る東國の兩將よりや狀強ちほ許容有べからずとやさるゝゆゑ渡さるまじと定りしよ兩將重て奏聞す保元の昔を思へば祖父爲義が仇平治の古を願れば父義朝が敵也されば君の汚憤を休先父の恥を雪ん爲命を弄て朝敵を

亡す今度平氏の首大路を渡されき、自今以後何の勇有て凶徒と退いんやと切に訴るゆゑ力及せ給はず遂に渡されぬ見る人幾千萬と云敷を知らず帝闕は袖を列し古の怖忍れし面々路頭は立高みより見下すも有中に移動るの淺猿を憐歎をあり大覺寺に忍び居る、小松三位中將維盛卿の若君六代御前も附奉りし齋藤五齋藤六あまの覺束あまの姿を塞しみければ御首共の皆見知りければ三位中將の傍首のみへすされと涙塞かね餘所の人目も怖しく急ぎ立歸る北の方のいりあやういと問給へば三位殿の傍首のあく傍兄弟の傍中への備中守殿の傍首のみ其外の誰と語りやせば人の上との覺えずとて泣沈給ふ齋藤五又すの街の噂もすの今度の合戦播磨と丹波の境ある三草山の手を堅めおはせしは義經も破られ新三位中將殿同少將殿丹後侍從殿の高砂より船にて八島へ渡らせ給へば此度大合戦にの逢給はずと承る扱三位中將殿の軍以前より大事の傍とて讃州八幡へ渡らせ給ひこの度の向せ給はずとや者も達ていと細く語りやたは北の方るれも我等が事を心苦しう思ひ給て朝夕歎せ給ふが病となりたるよこと風の吹日今日を舟も召るゝやらんと肝を消し軍も聞ば今も討れ給ひしと告るやと心を竭す増て左様の傍誰か心易う扱ひや

へさ委く聞まはしくと宣へば若君姫君も何の傍と聞ざりしやと宣ふぞ良なる三位中將も通ふ心されば都への無心元なう思ふらん縦ひ首共の中よあくとも矢も中ても死し氷に溺ても死ぬらん今迄此世に在者といよを思ひ給ひ露の命の消やらで未淨世ありしを知らせんも使を仕たて三ツの文をぞ書ける先北の方への都に敵充滿身一ツの置所だもあらじを幼さをの具していかに悲しう座らん是へ迎へ一ツ所あていりにも成ばやと思へ共我身こそあらめ為病のしくてなど細く書たる奥も一首の歌ありて  
 何くとも知らぬあふせの藻掬草かさかく後を信とも見よ  
 稚き人との許への徒然を何としてか慰むらんやとて是へ迎へ取へしと言葉を替らす書送らる使都へ上り傍文共奉れば北の方始披き見給ひいと思ひや増りけん伏沈み泣給ふ人めもあれは傍使疾歸らんとすゆゑ涙を拭ひ返事認給ふ若君姫君も返事にあと今迄も迎へ給ひぬ餘り恋しう覺いとく迎ひ下されと同じ言葉も書れけるは使八島も歸り返事差上れば稚き方への返事見給ひいと爲方なくみへらさける抑是より穢土と厭ふも勇まし閻浮愛執の綱強ければ淨土を冀んを懶し唯是より山傳ひも都へ登り戀し者共

とも今一度見をし見へて後目害せんと泣々語り給ひける同十四日生捕本三位入道重衡都よ  
 入て大路を渡さる小八葉の車前後の簾を揚左右の物見を開く土肥實平木蘭地の直垂小具足  
 斗して隨兵三十餘騎引具し車を圍み行京中の上下是を見ていくらを在す君達の中は此人の  
 みりかやうふ成給ふよ入道殿二位殿よを覺のほ子よて一門方も重んじ院内へ参らせ給ふに  
 を老若所を置て款待すされしが今のくの躰の全く奈良を焼給ひし佛討とぞすあへり六條を  
 東へ河原迄渡し夫より歸つて故中御門藤中納言家成卿の御堂八條堀河へ居緊しう守護す院  
 御所より御使あり藏人左衛門權佐定長八條堀河へぞ向ひける赤衣よ劍笏をぞ帶したり三位  
 中將の紺村滋の直垂よ折烏帽子引立て御座す日來の何共思ひれざりし定長を今の冥途めて  
 罪人共か冥官に遇る心地せらる扱仰下さるゝ八島へ歸り度の一門の方へ云送て三種の  
 神器を都へ返し入奉れ然らば八島へ歸さるべしとの御氣色之中將すさるゝのさしも我朝の  
 重寶三種の神器を重衡一人よ替参らせんどの内府以下一門の者共よをすひのゝ女性あひへ  
 ばもし母儀の二品あどをさすひのん去なむら居ながら院宣を返し奉らん其恐もいへ  
 ば速にす送てこそ見ひのめとぞすされける院宣の使の侍坪の召次北方三位中將の使の

平三左衛門重國と云者之大臣殿平大納言への院宣の趣をすされ二位殿への文細々と書  
 て進らせらる私の文の赦されざるゆゑ人々の許への詞にて言傳らる北の方大納言典侍殿へ  
 を詞めてすされけり旅の空にてて人の我よ慰み我の人は慰みし物を引別れて後いか悲し  
 う坐すらん契の朽せぬ物とすせば後の世の必ず生逢奉るべしと泣言傳給へば重國を誠よ  
 哀れお覺て涙を押へ立まけり爰よ三位中將年來の侍木工右馬允知時と云者あり八條の女  
 院よ兼参の者よいひけるが土肥次郎實平が許よ行て是の年來三位中將殿よ召仕られいひし  
 者にいひが今日大路よて見いへば目を當られず餘り痛しう存い何か苦しかるべき知時へのり  
 の御免有て今一度見参よ入はかなき昔語よをすて慰め奉り度い弓矢取身ならねば軍の侍  
 供仕らず一度唯御身近う伺候せし斗よい夫を猶覺束さく思されば腰の刀を召れ侍許容樂り  
 度とすける土肥の情移る者にて足下一身の苦うをいひ去あむら腰の刀の無用たるべしと  
 請取せ通しける中將も知時を一向涙のそめて更に首句あし良有て昔今の物語し給ひ扱を汝  
 して物云し人の未内裏にとや聞さる承りいへ中將我西國へ下りし時文をやらせ云置と  
 もあかりしかば世々の契の皆偽あ成よきと思ふらん文を送んと思ふに届得させんや知時

安さ此事と中將悦び頼て書て渡されける知時罷出んとする時守護の武士共いかなるは文  
 むいや見すの叶まじと中將を見せよとやさるゝゆる武士に見せければ苦しうまじとて  
 取せけり知時晝の憚り黄昏よ紛れ入件の女房の局下口邊よいで聞べ此女房の聲と覺しく  
 わな最惜幾らおはす君達の中は此人一人かやうに成給ふとよ人皆奈良の伽藍の罰と云中  
 將をさぞ云し我心は覆ての焼ね共惡黨多かりしうは手よ火を放ち多くの堂塔を焼亡す末  
 の露本の甲の様あれは我身一ツの罪業よこそ成んをとありしが實よ左と覺るとて泣れぬ知  
 時はよも歎めるゝ最惜よと思ひ物やさうといへば何事と答ふ中將殿よりは文いとやせば  
 日來の恥て見へ給ぬが走出て手づらら多を取見給ふよ西國よて生捕れし有さま今日明日を  
 を知ぬ身の程を書つゝけ與よ一首の歌ありて

淺川うさ名を流と身なりとを今一度のあふせとをかな

女房此文を顔よ押書左右のとさく歎沈れける知時時刻を移りいへば返事給て歸らんとや  
 ん女房泣々書給ふが心苦しういふせく此二年を送りし有さまこそまゝと書て  
 君ゆるあ我を浮名を流すとを底のまぐつと俱み成あん

知時歸り参りされば守護の武士よ斷入んとす又も文を改め苦しうらすとて渡しければ三  
 位中將へ進せけるが是を見給ひいと、襟や増られけん土肥次郎を召て扱を此程各情深う  
 芳心せらるゝと辱く嬉しけれ今一度芳恩を蒙りたし吾一人の子あければ浮世あ思ひ置と  
 かし年來契し女房あ今一度對面して後生のとをを云置ばやと存るゝいりいあふんとやさる  
 土肥承つて女房あどの事い何か苦かるべきとて容しやせば中將大に悦び人あ車借て遣さ  
 れしに女房取取ず乗て参らる椽よ車やりよせ此よし斯とやたりければ中將車寄迄出向ひ武  
 士共見参らせいに下給ふべからずとて車の簾を打被さ手よ手を取組顔お貌推當暫しは左右  
 のとをも宣す唯泣より外どなき良有て中將文あを大方に云遣られし次第猶委しく語られ  
 今度一谷にていかよを成べきを生あから捕られ再び都へ上りいを見参して今生れ暇乞とも  
 や後世あ一篇の念佛を頼めとのとあらめと又も涙よ咽び給へば女房い何もいはれず泣て  
 のみ居られさる守護の武士ども此程の大路の狼藉をいと承るはや疾々どや中將力及せや  
 がて返し給ふ車やり出せば中將殿袖をひらへて  
 あふとを露の命ををるともよ今宵ばかりや限あるらん

女房涙おしぬぐひ取わへき

かざりとして立別るれば露の身の君より先は消ぬべきかは

さて女房の内裏へ参給ひぬ其後の守護の武士を宥さねば時々唯文ばかりぞ通ひける此女房の民部卿入道親範の女よて眉目形世は勝れ情深き人なれば中將の南都へ渡され斬れ給ひぬと聞へしうら頼て姿を替濃墨染に糞してぞ彼後世と吊ひ給ふぞ哀ある扱を日數経れば院宣の使花方中將の使重國同廿八日讃州八島の磯に着て院宣と取出て奉る大臣殿以下公卿寄合て披れけるに聖胎九重を出諸州幸し三種の神器南海四國埋れ數年を経ん朝家の歎き亡國の基之抑重衡朝臣の東大寺焼失の逆臣たれば頼朝朝臣の旨は任せ死罪を行るべき者之然といへども獨親族に別れ生捕と成て籠鳥雲を戀る思ひ歸雁友を失ふ心定て西海よを通せんか然らば三種の神器を都へ還入せしめば重衡寛宥せらるべしと有て大膳大夫成忠奉つて宛名の前平大納言殿とす又二位殿中將よりの文を見給ふは重衡を今生今一度御覽せんと思召れば三種の神器のほどを能様にやさせ給ひて都へ返し入させ給へさらすの旨よ掛るべきと叶まじと書れたり二位殿伊文を顔は當人の坐する後の障子を引明大

臣殿の御前へ倒伏暫し物をも宣す良有て起上り涙を押へ宣は是見給へ宗盛京より中將が云おこしつるとの無想さす實も心の中にいか斗のときか思ふらん只我も思ひ宥して三種の神器の事能様より都へ還し入奉らせ給へと宣へば大臣殿や給ふは宗盛も左こそ存じし得どもさしも我朝の重寶三種の神器を重衡一人は替參せんと且世の爲然るべからず且頼朝が返り聞ん所云がひなうい其上帝王の世と保せ給ふは事を偏に此内侍所の渡せ給ふ後故こそ余の子共親しき人よを中將一人は思し召替させ給ふべきか子の憐きとやを事おこそ依いへ努く叶ひぬまじと宣へば二位殿世にも本意なげよて重て宣ふは我故人道殿のかくれて後一日片時命生て世は有べしと思ひざりしうとを主上のいつとなく西海の波谷よて生捕よせられぬと聞し後いとい胸塗て湯水を喉へ入れられず中將此比世になき者と聞ば我を同じ道も趣んと思ふは二度物を思ひせぬ先に唯我を失へやとて喚き叫び給へば誠よ左こそいと痛のしくて皆臥目よぞあられる新中納言知盛卿の異見よやさされけるたとい三種の神器と都へ返入奉りよりとも重衡事なく返し給らんと有がたし唯其様を恐れ

かくは請文よやさせ給へと此議尤然るべしとして大臣殿は請文よさる二位殿の涙よくれて筆の立所も覺え給ひねど志をあるべし泣くは返事を書給へり北の方大納言典侍殿はとりのと宣す引かづひて泣臥給ふ其後平大納言時忠卿院の使は帝の召次花方を召れ汝法皇の使として多くの浪路を渡ぎ是迄下りたる験は汝一期が間の思ひ出一ッ有べしと花方が顔は浪方と云焼印をせられける都へ歸り上りたりけれは法皇御覽有て汝の花方かさんいよしくさらば浪方とも召かして仰られしが假初も院の使へかゝることをあす時忠が不届程さく思ひ知らせんと宣ひける諸諸卿を湊平家の請文を讀せ給ふは我君の故高倉院の御位を繼せ給ふ上の主上還御なさに三種の神器玉體を離し奉らん様なし一谷にて數輩の類を亡ばされ今重衡一人宥免あるとも悦ぶは足す故入道保元平治は君の爲一命と輕じたるに全く身の爲家の爲あむらすことと頼朝の父義朝謀叛は依て誅せらるべきを故相國入道慈悲の餘や宥たりし其恩義を忘れ東夷を語らひ峰起の亂をあす法皇いかに其猥なるも荷擔させ給ふや遠くは靈祖平將軍貞盛相馬將門を討帝王の靈襟と安んじ近くは亡父相國數度の忠節當家數代の奉公を思召忘れ給ひずり辱くも法皇四國へ御幸なつて臣等院宣と

承と再び舊都へ還り會稽の恥を清んをのこ然らすんは高麗震旦へも行幸の御供ささんふ日本の通路も難く入王八十一代の御宇は當り我朝神代の靈寶遂に空しく異國の物とあらん是らの旨奏聞透られいへとぞ書れたり三位中將も此由を聞れさこそ有んすれ一門の人々惡う思ひけん後悔せられけるは請文到來の上り重衡卿關東へ下さるべきお定ぬ都の名残も今更惜くや土肥と召て出家せんとを望る土肥九郎冠者へやすを院へ奏聞せられしは頼朝へ見せて後こそ左もあれ唯今の宥しがたしと仰之此旨を中將へやすさらば年來契たる聖は一度對面せんと願ひる實平をこれ誰いや黒谷の法然坊之僧の苦しかるまじとや中將歡て聖を請じやさるゝの今度西國にて囚となり登り後生いり仕らん響ふ都を出しより彼所此所の戦ふ人を亡し身を助らんと思ふ惡心のみにて善心聊も起らず南都炎上との王命武命相兼更に私の義もあらず君も仕へ世も隨ふ法通れ難く衆徒の惡行を静ん爲罷向ふの所不慮も伽藍滅亡も及ぬると力及すといへを時の大將はいひし間責一人は歸し身己の罪業とやあらん今かく愧を曝し則報ひと思ひ知ては然らば頭を剃乞食頭陀の行をし修法の道入んも斯る身の心も心を任せはらず罪業の須彌より高く善根の微塵を畜

なしかくて命果んふの火血刀の苦果疑ひあし願くの上人慈悲を起し憐れを垂給ひかゝる悪人も助るべき方便あらば示し給へとやさるゝ上人涙ふ咽び俯臥て兎角のともなく良有てやさるゝ誠受がたき人身を受あから空しく三途よ歸りましまさんと悲ひに餘りあり今も悪心を捐善心を起されば三世の諸佛隨喜し給らん出離の道區々といやせども末法濁亂の機に稱名を勝れりとする志を九品に分ち行を六字に縮てはかなる愚癡無智の者も唱るゝ便あり罪深しとて卑下すべからず十惡五逆迴心すれば往生を遂功徳少ければとて望を絶べからず一念十念の心を致せば來迎す專稱名號至西方と釋して専ら名号を稱すれば西方に至り利劔即是彌陀号を憑り魔縁近づかず一聲稱念罪皆除と念すればなし來る所の罪皆除とみへたり淨土門各略を存し大略を肝心とす只往生の得否の信心の有無に依る唯此教を深く守信し行住座臥時處諸縁を嫌す三業四威儀に於て心念口稱を忘れ給はずの畢命を期として此苦境界を出彼極樂淨土の不退土に往生し給はんこと何疑ひあらんやと教化し給へば三位際なく悦び願くゝ此次戒を持たえんが出家せで叶ふまじやとされしかば上人出家せ給人も戒を保つとの常の習として願ふ剃刀をあて剃まねあし十戒と授けらる中將隨喜の

涙と洗しつゝ是を受持給ふ上人を萬物哀れ覺へかき暮す心地して泣く戒を説けるは布施と覺しく日來おはして遊れける侍の許は預け置れし淨硯の有しを知時を以て取らば又奉り是をば人お賜いので常は淨目の掛らん所に置れ某が物ぞと淨覽の度は念佛下されかしとやさる上人涙よくれ左右の返事を出かね取て懐に入墨染の袖眼は押當黒谷へ歸られける件の硯の親父入道相國宋朝の皇帝へ砂金多く參らせ給ひしかば返報と覺しく日本和田平大相國の許へとて送られし處に松蔭の硯として類希ある名品應仁記に松蔭の硯と有を此と聞へし

重衡卿 關東下向小松三位維盛卿高野山にて剃髮す

本三位中將重衡卿を鎌倉殿より頻りよさるゝ故さらば下さるべしとて土肥次郎實平が手より九郎義經の宿所へ渡し奉る同三月十日梶原平三景時又具せられ關東へ下られける西國よて生害もせず都へ上らるゝさへ口惜りらん今更關東へ趣れけん心の中推量られて哀れ四宮河原よ成ぬれば愛の昔延喜第四の皇子蟬丸關の嵐よ心を澄し琵琶を彈給ひし博雅の三位と云し人風の吹日も吹ぬ日も雨の降夜もふらぬ夜を三年が間歩を運び立聞て彼三曲を

傳へけん葉屋の床の古も想像て憐之相坂山打越て勢田の長橋長くとも藤に渡す駒ならで  
 屠所の羊の歩かや雲雀昇れる野路の里志賀の浦浪春かけて霞も曇る鏡山比良の高根を北よ  
 して伊吹の嵩も近づきぬ心を留としあければを荒て中々優しき不破の關屋の板廂いかお  
 鳴海の潮干瀉涙も袖いまはれつ、彼在原の某のから衣さつ、馴よしと詠けん三河國の入  
 ツ橋おも成ぬれば蜘蛛手も物と思ひつ、濱名の橋を打渡れば松の梢も風牙て入江も噪ぐ浪  
 の音さらでも旅を物憂に心を盡す夕間暮池田の宿も着給ふ彼宿の長者が娘侍従が許も宿せ  
 らぬ侍従三位殿を見奉り日來り傳よだお思召寄給ひぬ人の今日はかゝる所へ入せ給ふと  
 の不思議さよとして一首の歌と奉る

旅の空赤土小屋のいふせよ故郷のよ戀しおるらん  
 重衡卿返しせられて

故郷も戀しくもあし旅の空都も終よすみうあらねば  
 良有て中將梶原を召れよても唯今の歌の主いかある者ぞやさしうを仕りたる  
 と宣へば景時守君いまだ知し召ればはやあわれこそ八島の大巨殿いまだ當國の守よてお

いせし時召れ御最愛いひしよ老母よ是よといめ置しかば常も暇を乞しと給ひらざりし比は  
 彌生の始よてもいはん

いのみせん都の春を惜けれとあれし吾妻の花や散らん

と詠て暇を賜り下りいひし此海道一の歌人よていどやける 熊野が女侍従なるを直も熊野と  
 云傳ふるの親子を混すとやい

ん都を出で、日數歴れば彌生を半過ぎ春も既も暮んとて遠山の花の幾の雪とみへ浦々島々  
 霞渡り越方行末のと共思ひつ、いけ給ふもこのいさればいりある宿業の方見ぞと盡せぬもの  
 の涙も御子一人もおはさぬを母の二位殿も歎れ北の方大納言典侍殿を本意なしとて萬の神  
 佛も祈られしが馳あかりし賢うぞあかりける子だもあらいいか斗か思ふとあらんと宣  
 ひける佐夜中山にかゝり給ふにを又越べしとを覺ねばいと哀の歎をひて袂にいさく濡増  
 る宇津の山邊の萬の道心細くも打越て手越をも過行よ北よ遠ざがり雪白き山有問バ甲斐の  
 白根といふ其時三位中將落る涙を拭ひ

惜のらぬ命なれ共今日迄よつれなきかひの白根ををみつ

清見が關を打越て富士は裾野も成ぬれば北に青山峨々として松吹風索たり南よの蒼海



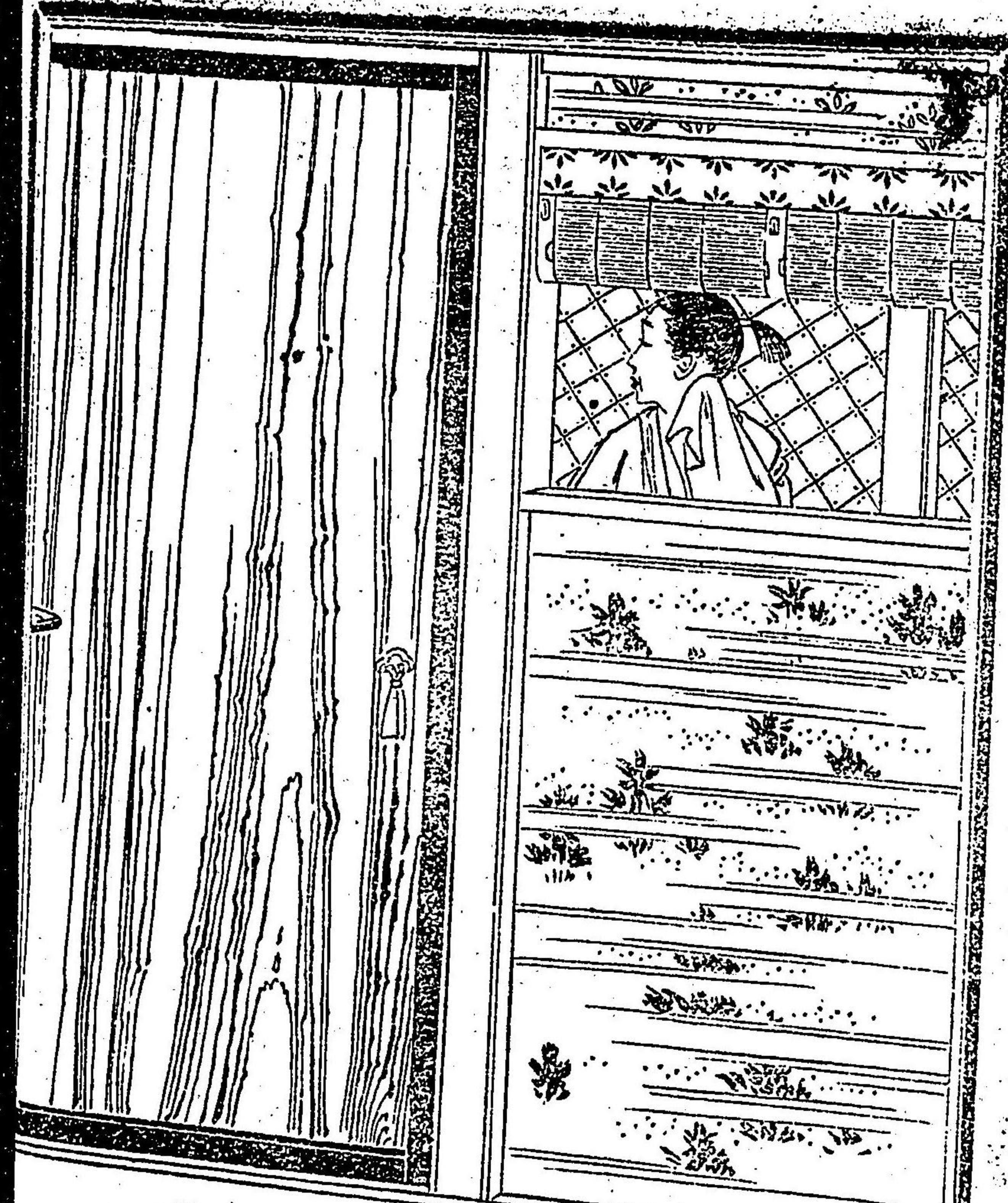
漫として岸打浪も花々たり戀せバ瘦ぬべし戀せずをありけりと明神の歌ひ始給ひけん足  
 柄の山を越小餘綾の森鞠子川小磯大磯の浦々砥上が原御興が崎を打過急ぬ旅どの思へと  
 日數重きバ鎌倉へ着たり去程に鎌倉殿中將に對面してやさるゝ抑頼朝君の恨  
 を休め奉り亡父の恥をも清んと思ひ立し上の平家を亡し堀んと案の内との存せしが正しう  
 かやうに目も掛らんと存ひの此定ならバ八島の大巨殿の見參りを入ぬべし備南都炎  
 上のこと入遣相國の成敗もひしが時取ての計ひか以外の罪業もははめとやさ  
 れけれバ三位中將聊臆する跡なく答らるゝ機先南都回祿のと亡父入道の成敗も某が  
 私の發起にもいはず衆徒の悪行を静ん爲向ひし程も不慮の燒亡も及し及ざる次第之事新  
 しき事もい得共昔の源平左右別れ更朝家の汚堅めたりしも近比源氏の運傾より  
 し事人皆存ず就中當家の保元平治以來度々朝敵と平げ勅賞身も餘り添くも一天の君の御  
 外戚として亡父入道帝の傍外祖たるも依て人臣の位を究め准后の宣旨を賜り一族の昇進六  
 十餘人廿餘年が以來の官加階天下も肩を比る者もいはずとせよ付ひて帝王の仇敵を討た  
 る者の七代迄朝恩盡きとア事極て僻事もてぞいひける其故の親故入道相國君の爲に命

を失んとすると度々及ぶささをも其身一代の幸めて子孫かやうも成べきやの運世  
 亂れて都と出し後の骸と山野も曝し憂名を西海の波も流さばやとこそ存せし生ながら四  
 れ是迄下るべしどの努々存ひの唯先世の宿業こそ口惜ういへ但し般湯の夏臺に囚れ文王  
 の羗里も囚るゝと云文移り上古猶かくのびとし況や末代も於てをや弓箭取身の敵の手も渡  
 つて命を失いんと全く辱もて愧ならを唯芳恩に疾々首を刎らるべしとて其後の物をや  
 されず梶原是を承りて天晴大將軍やとて涙を流と侍共も皆袖を濡しける鎌倉殿も誠ひ  
 哀も思ひれけれバ抑平家を頼朝が私の敵との努々思ひやさす唯帝王の仰の重うころい  
 へ去ながら南都を亡ぼされたる伽藍の敵もれバ大衆定てや旨をやあらんと伊豆國の住人  
 狩野介宗茂も預られける其跡冥途もて娑婆世界の罪人を七日くも十王の手へ渡さるらん  
 もかくやと覺て哀もされとを狩野介の情ある者もて緊しうを當りやさす様々勞り參せ 剩  
 湯殿飾あんどして湯引せ奉る中將道すからの汗甚しけれバ身を清先失いれんと思ひ  
 給ふ處二十許もて色白う髪のかゝり誠も美しき女房目結の帷子染付の湯巻し浴室の戸開て  
 大其跡も十四五の女の童髪も袖長ありけるが楸盤も櫛入て持參先の女房介錯すて湯引



三百六十五

新



三百六十四

重衡  
湯あり  
しふ  
圖

髪洗ひなどし奉りて扱申様男こそよからじ女の苦しうらじとて鎌倉殿より進らせられぬ  
 何ゆても思召事あらば承りやせといひつれとや中將今のかゝる身の何をか思ふべき唯出  
 家仕度と申さるゝ彼女房鎌倉殿へ申けるは其儀の叶ふまじ朝敵とて預りたれば私の敵  
 とハ異あるを仰ゆる其よし中將へ申し立行しるは中將守護の武士は唯今の女房の優も  
 見ゆるもの哉名の何と云やと問れける狩野介あれの手越の長者の娘は眉目姿心さまじり  
 なさ者として此二三年鎌倉殿召置れ千手前と申しとを答ける其夕雨少し降て物聞しける折ふ  
 し件の女房琵琶琴持せ参りたり狩野介を家子郎等十餘人引具し中將のほ前近ういひけるが  
 酒を勧め奉り千手前酌を取中將少し請いと興なげおはしければ狩野介申ける聞し召  
 れてもいらん宗茂本伊豆の者よていへば鎌倉の旅めていへども心の及んほどの奉公仕りい  
 べし何事を思召あらば承りやせと鎌倉殿仰しそれ何よてをやて酒勧めいへと云ければ千  
 手前羅綺爲二重衣一類無情於機婦と云朗詠を二兩反したりければ三位中將此朗詠をせん  
 人を北野の天神毎日二度翔て守らんと誓せ給ふとなりされとも重衡の今生よていはや捨  
 られ奉りし身なれば助音しては何かせん但し罪障輕みぬべきことならば隨ふべしと宣へば

千手前やがて朗詠二十題一齋引攝すと云朗詠をして極樂を願ふ人の普彌陀の名號を唱ふべしと  
 云今様と四五返唄ひ澄したりければ其時中將盃を傾けらる千手前給つて狩野介よさす宗  
 茂が飲時ふ琴を彈澄したる中將普通ふり此樂をば五常樂といへとも今重衡が爲より後生樂  
 とこそ觀すべけれ頼て往生の急を引んと願れ琵琶を取點柱を捨て皇座の急ぎを彈れける  
 かくて夜を漸更萬心のすまふあな思はずや吾妻よをかゝる優ある人の有ける何事  
 よても今一聲と宣へば千手前重ねて一樹の陰は宿り合同に流れと掬をみな是先世の契と云  
 白柏子を寢よ面白ふかぞへたりければ三位中將を燈 闇 數行虞氏涙と云朗詠とせられけ  
 る此朗詠の意ハ昔唐土ハ漢の高祖と楚の項羽と天下を争ひ合戦すると七十二度戦ふ度ハ項  
 羽勝ぬされども竟より項羽戦ひまじ亡し時離と云千里の名馬に乗虞氏と云寵愛の美夫人を  
 具し逃去んとするよいかゝしてか馬働かず項羽涙を流がし我威勢盡たり敵の襲ふハ數なら  
 ず唯虞美人ハ別れんことのみ歎れぬ燈 闇 成しかば虞氏心細げに涙を流す夜を深行ま  
 軍兵の四面ハ鬨を作る愁の迫るさまを橘相公の作られし詩也中將是と思ひ出口号し優し  
 らも聞へしかくて曉 近くをあれは狩野介殿やて出ぬれば千手前を罷ぬ其朝鎌倉殿ハ持佛

堂は法華經を讀て坐ける處へ千手前歸參たり鎌倉殿打笑さて夕べ中人をば面白うしつ  
 るもの哉と宣へば齋院次官親義御前に物書て侍ひけるが何事よていやらんとすければ鎌倉  
 殿宜ふ平家の人々此二三ヶ年の軍合戦の營より外又他事あるまじと思ひしよ中將の琵琶  
 の撥音朗詠の口遊終夜立聞ゆるあ優艶しき人よて座けりと親義すけるに誰を夜部承  
 り度いひしが折節相勞ることのいひて承らず此後立聞いべし平家の代々歌人才人達よて渡  
 らせ給ひい先年あの人々を花よ喩ていひしよ此三位中將殿とば牡丹よ喩ていひしとすぬ  
 鎌倉殿の後々迄も度々云出て此中將の琵琶朗詠の類希あるとよ宣ひける其後中將南都へ  
 渡され斬れ給ふと聞へしかば千手前は中々物思ひの種とや成よけん聽て容を變濃墨染よ糞  
 果信濃國善光寺あ入て行すまじ彼卿の後世菩提を吊ひけるぞ哀ある倍又小松三位中將維  
 盛卿の身の八島よ在て心の都よ通ひ故郷に留置をし北の方稚き人々の御身よひしと立添  
 忘るゝ間をあかりしまゝ有よかひなき我身かゝとて壽永三年三月十五日曉よ八島を紛れ  
 出與三兵衛重景石童丸と云童船よ心得たりし武里と云舎人三人のみ具して阿波國結城浦よ  
 り船よ乘鳴門の沖よ過紀伊路へ趣き和歌吹上衣通姫の神と願れ給へる玉津島明神日前國懸

の御前を過て紀伊の湊よ着是より山傳ひ都へ上り戀しき者共をも今一度見ばやと思われけ  
 れども叔父本三位中將殿生捕よせられ京鎌倉に耻を晒し給ふたよ口惜きよ此身を囚られバ  
 父の亡骸よ迄耻を被しめんを心愛しとて千度心のすゝめども心よ心をうらかひて高野御  
 山へ參り給ふこゝよ年來知給ふ聖あり三條の齋藤左衛門茂頼が子よ齋藤瀧口時頼とて本  
 小松殿の侍たりしが十三の年本所へ參り建禮門院の雜司横笛と云女あり瀧口是に最愛  
 す父此よし傳聞世よ有ん者の婿にをなし出仕なども心安うさせんと思ふよ由なき者を思ひ  
 初てなど強に諒ければ瀧口やけるやう西王母と云し人を昔に在て今いなし東方朔と聞し  
 者も名のみ聞眼に見ず老少不定の境の唯石火の光よ異あらず縦ひ人長命といへども七十八  
 十をば過す其中に身の盛んなることは縦よ廿餘年也夢幻の世の中み醜き者を片時を見て  
 何かせん思ひしき者をみんとすれば父の命を背く是善知識也しかば浮世を出て實の道よ入  
 んよはとて十九の年誓を切嵯峨の往生院よ行ひ澄し居たり横笛是を聞我をこそ捨め姿よ  
 換けんことの恨しさよ縦ひ世を背くともなにかくと知せざりし人こそ心強くとを尋て  
 恨んと或暮方都を出嵯峨の方へあくがれ出比の如月十日餘り梅津の里の春風よ餘所の匂も

の御前を過て紀伊の湊より着是より山傳ひ都へ上り戀しき者共をも今一度見やと思われけ  
れども叔父本三位中將殿生捕ませられ京鎌倉に耻を晒し給ふだも口惜きも此身を囚られ  
父の亡骸は迄耻を被しめんを心憂しとて千度心すゝめども心よ心をうらかひて高野御  
山へ参り給ふこゝも年來知給ふ聖あり三條の齋藤左衛門茂頼が子も齋藤瀧口時頼とて本  
小松殿の侍たりしが十三の年本所へ参り建禮門院の雜司横笛と云女あり瀧口是に最愛  
す父此よし傳聞世も有ん者の類にもなし出仕なども心安うさせんと思ふも由なき者を思ひ  
初てなど強に諫ければ瀧口やけるやう西王母と云し人を昔に在て今いなし東方朔と聞し  
者も名のみ聞眼に見ず老少不定の境の唯石火の光も異ならず縦ひ人長命といへども七十八  
十をば過す其中に身の盛んなることは縦ひ廿餘年也夢幻の世の中も醜き者を片時を見て  
何かせん思ひしき者をみんとすれば父の命を背く是善知識也しかば浮世を出て實の道も入  
んよはとて十九の年誓を切嗟嗚の往生院へ行ひ澄し居たり横笛是を聞我をこそ捨め姿と  
換けんことの恨しさも縦ひ世を背くともなとかいなくと知せざりし人こそ心強くとも尋て  
恨んと或暮方都を出嗟嗚の方へあくがれ出比の如月十日餘り梅津の里の春風も餘所の匂も

愛衰く大井河の月影を霞は籠て臍也一方ならぬ哀さを誰ゆゑとこそ思ひけり往生院とは聞  
つれどを何れの坊共知されば愛かしては徘徊しが住われたる僧坊は念誦の聲するを瀧口  
入道夕聲と聞澄具したる女は云せては姿の換りしを見もしみへん爲りしは是迄参りていと  
謂せければ瀧口入道胸打噪き障子の間より覗みれば裾の露袖の涙は打絞つゝ少し淨瘦たる  
顔は誠は訊難たる形勢いかなる大道心者を心弱う成ぬべし瀧口入道入と出し全く是のさ  
る人あらず門進よひんと云せければ横笛の情なく恨しけれども及ず涙ながら歸りけり其  
後瀧口入道同宿の僧は語りけるにこそ世は閑なれば念佛の障障のいねとをわかで別れ  
し女は酒居を見られぬ一度の心強くとも又も暮ふことわらば心も動さぬひさく暇すにて  
高野へ上り清淨心院お行ひ澄し居たり横笛も頼て姿を替しと聞へしかば瀧口入道一首の歌  
を送りける

横笛が返事よ

そるまでい恨しのを梓弓眞の道よ入ぞうをし  
そるとても何かうらみん梓弓引とひへさ心ならね

其後横笛の奈良の法華寺に在しが思ひの積みや程なく身罷ぬ瀧口入道是を聞哀さ増り彌  
行ひ澄したれば父も不孝を免し親さ者共皆高野の聖と呼けり維盛卿是も尋逢て見給ふよ都  
も在し時の布衣立烏帽子衣紋縞ひ髪搔撫花やかなる男ししが出家の後今日初て見給ふよ  
三十よも成ざるが老僧姿は瘦衰へ袈裟衣香の煙は入薫り思ひ入たる道心者之中將を見奉り  
この現ども覺ひぬね何として此御山へいと問進するよ中將さればとよ西國遠の人あみく  
よ落下りし故郷は留し妻子の御身に立添忘るゝ間なき襟の心や謂す大臣殿を二位殿を此  
人の池大納言の襟は願朝よ心を通し二心有なんと思ひ隔給ふ間いと心留らで是迄ゆくが  
れ出しこれよて出家し火の中氷の底へを入りやと思へとも熊野参詣の宿志われれば是を果  
して後いと語られける瀧口入道すけるの夢幻の世に左ても右てもいねん唯永き世の闇こそ  
心愛かるべくいと扱此僧を先達よて堂塔を巡禮し奥の院へ参らるゝ抑高野山の帝都を去  
と二百里郷間と離れて人聲絶晴嵐梢を鳴し夕日の影閑に入葉の峯入の谷賦よ心も澄ぬべし  
花の色は林露の底は綻ひ鈴の音は尾上の雲は響瓦は松生ひ垣は苦茂し星霜久しく費らる君  
延喜の時御夢想有て檜皮色の御衣と参らせ給ふ勅使中納言資澄卿般若寺の僧正親賢を相具

し此御山に登り御廟の扉推開き御衣を着せ奉らんとするも霧厚う隔て大師拜れ給えず觀賢  
 深く愁涙して我慈母の胎内を出師匠の室へ入しより禁戒を犯さずさればもとか拜奉らざる  
 べからして五體を地へ投發露啼泣し給へば漸露晴て月の出るがごとく大師拜れ給ひけり其時  
 觀賢喜の涙と流し御衣を着せ奉り御髪長う生延しを剃奉るぞ有がふら勅使を僧正を拜  
 れしよ石山内供淳祐其時の童形よて供奉せられしが大師を拜せ奉らず深う歎き沈る僧正  
 手を取て大師の御膝へ推當られたれば其手一期が間顔ばかりし其移香石山の聖教は残り  
 て今も有とぞ三位維盛卿一山を拜禮して其夜は瀧口入道が庵室に昔今の物語し深行まゝ聖  
 が行儀を見給ふも至極甚深の床の上の眞理の玉を瑩らんとみへ後夜晨朝の鐘の聲よの生  
 死の眠を覺せらんと世を遁れば斯をやあらまほし明れば東禪院の知覺上人と請じ出家せん  
 とて與三兵衛重景石童丸を召我の人の思ひを身よ添かから道狭う遁れがたき身なれば  
 いかも成とも汝等の立去べし此比の世よ有人ふも多けれ我なき後都へ上り身をも扶け妻  
 子を育み且の維盛が後世をも吊べしと宣ふ重景はらくと涙を流し某が父與三左衛門景康  
 平治逆亂の時故殿の御供仕三條堀河の邊よて録田兵衛と組て悪源太又討れぬ某其時漸二歳

故更も覺いぬす七歳よて母も後れ情を掛べき者一人もいぬさりを故大臣殿御憐れり我命よ  
 替りし者の子なればとて朝夕御前も養育られ九歳の時君の御元服ありし夜忝くも頭を取上  
 られ盛の字の家の字なれば重の字を松玉よと宣ひて重景といひ召れぬ初又幼名松玉とせし  
 ん生れて五十日父抱て参りし此家を小松といへば祝て付ると仰られ下されし名あていひ  
 し先殿御臨終も御前へ召汝の重盛と父が形見と思ひ重盛の汝を景康が形見とて遇し今度  
 の除目も鞆負尉もなし父を呼し如くせばやと思ひしよわな無想と御涙よくれ給ひ相構て少  
 將殿の心も違ふあよと仰ありし昨日のおとくなり日來の自然の事あらばまつ先よ命  
 の奉らんと存在しを見捨参らすべき者と思ひ入せ給ふと耻しうこそいへ此比の世よある人  
 多しとの仰の源氏の郎等共と仰いひや君の神よを佛も成給はん後其尊万年の齡を保子  
 々孫々無量劫樂榮いぬめこゝに善知識のいへば先姿を替て迹のよと仕らんとて手づから  
 髻剪て瀧口入道お剃せければ石童丸も髻際より推切て同く入道お剃せけり此童を八歳  
 より不便と加られし者も維盛卿是を見給ひぬと心細く流轉三界中恩愛不能斷棄恩入無爲  
 眞實報恩者と三反唱へ終に剃下し淨圓と改給ふ中將と與三兵衛の同年あて廿七石童丸の十

八之扱舎人武里を召汝り是より八島へ参端亦さも敷添て覺へしまゝ、いゝも知らせ  
 ずささかやう相成ていと西國みて左中將失ひひぬ一谷まで備中守討れぬいか各便なき  
 思召れいんと夫のみ心苦ういへ抑唐皮の鎧小鳥の太刀の平將軍貞盛以來維盛迄嫡々傳  
 へて九代よ此後後選開けは上洛の折をいひ六代み給べしとすべし都へい沙汰なせそ終  
 り隠れも有まじけれと此有様を聞バ願て姿を替んと覺ふゆゑと宣ひける武里泪に咽び  
 なから畏ていへとも何地迄を供中参前途見参らせて左も右を仕んとすよと其まゝ召具せ  
 られ瀧口入道をも具せられ高野をバ山臥修行者の様に立立同國山東よかゝり藤代の王子よ  
 り王子々々を伏拜み千里の濱北岩代の王子の前まで待裝束ある者七八騎は行遇ひ搦捕んと  
 するにや腹切んと各刀よ手を掛たる馬より下深く畏て逃此邊よも見知参らせたる者有よ  
 こと雖なるらんと耻しく足早に遇給ふ是の當國の住人湯淺權守宗重が子湯淺七郎兵衛宗光  
 之郎等共われいのかよと問けるよ小松大臣殿の嫡子三位中將殿よ何としてか八島を通れ  
 給ふやとや姿替させ給ふり與三兵衛石童丸も同く出家しては供せりとや近付見参よ入  
 んと思ひしが却て迷惑をあらんとて通りしが哀なるゆゑまやと袖を顔もおし當雨々と泣け

れバ郎等共皆狩衣の袖を濡しける

小松三位中將維盛入道入水宗清義氣佐々木守綱藤戸の海を渡す

中將維盛入道熊野の岩田河を渡り本宮證誠殿に上て静法施し給ひ御山の跡を詠給ふよ心  
 言よ及がたし大悲擁護の霞の熊野山の靈靈靈無双の神明の音殘川よ跡を垂一乘修行の岸  
 よの感應の月隈をちく六根懺悔の庭よの忘想の露も結はずいづれか頼母しかさるいあし  
 夜深人定て後啓白し給ふの亡父重盛入道淨蓮此寶殿よ籠り命を召て後世と助け給へと祈誓  
 し奉り感應ましくさ殊よ當山の本地阿彌陀如来よ浮座攝取不捨の本願誤す淨土へ導  
 き給へ且の維盛故郷よ留置し妻子に於ての安穩堅固よ護たび給へと祈らるゝと悲しける浮  
 世を厭ひ寶の道よ入給へ共妄執の猶盡すと覺て哀ありし事とをへ明れば本宮より船めて新  
 宮へ参られ神藏を拜み給ふよ綴松高竝へて嵐妄想の夢を破り流水清く渡ぎて浪塵芥の垢  
 と滌らん明日の社佐野の松原打過て那智の御山よ入給ふよ三重に張り落る懸泉の水數十丈  
 攀上り觀音の靈像の岩の上よ願れて補陀落山とを謂つべし霞の底よ法華讀誦の聲聞え靈  
 鷲山とをすべし抑權現當山よ跡を垂給ひて以來我朝の貴賤上下歩を運び首を傾け掌を合



せ利生よ預すと云となし僧侶を双へ道俗袖を聯たり寛和の夏の比花山の法皇十善の帝位をすべらせ給ひて九品の淨刹を行せ給ひけんは庵室の舊跡より昔を忍ぶと覺しくて老木の櫻開よける那智籠の僧共の中より此三位中將殿を都て見知りしと思して同行に語るは是る修行者誰ぞと思ひ居たりしよゆな事もろかや小松大臣殿の嫡子三位中將殿への殿いまだ四位の少將ありし安元の春の比院の御所法住寺殿にて五十の賀ありし父小松殿内大臣左大將は叔父宗盛卿の大納言右大將にて階下は着座せられ其外知盛卿重衡卿一門の公卿殿上人今日を曠と時めき垣代も立給ひし中より此中將殿櫻の花を挿頭て青海波を舞出られしかば露も溜たる花の姿風も翻る舞の袖地を照し天も輝く計之女院より關白殿を召使ひて御衣と掛られしかば父の大臣殿座を立て是を賜り右の肩よりけ院を拜し給ふ傍の殿上人いか斗羨く思れけん内裏の女房建より深山木の中の楊梅と覺ゆるなど云れ給ひし人ぞかし唯今大臣大將を待かけ給へるとこと見奉つりしよ今日のかく蜜果西海の潮汐風の中より起臥し色黒み其人どもみへ給ひされとを流石凡下といみへ給ひ移れば變る世の中とい云あがら痛のしき事と涙を浮べ語るを聞同行等しく衣の袖と絞ける三山拜禮終り

濱の宮王子の御前より三位入道殿上下一葉と棹さし遙の沖は山なりの島と云處ありしへ船を寄岸より大なる松の樹ありしを削て名跡を書付られける祖父太政大臣平朝臣清盛公法名淨海親父小松内大臣左大將重盛公法名淨蓮三位中將維盛法名淨圓二十七歳壽永三年三月廿八日於三那智沖入水と書付又舟あて沖へ漕出給ひける思ひ切ぬる道なれとを今日の時よも成ぬれば流石心細う悲しうらすと云とあり海路遙く霞渡り唯大方の春だよも暮行空の物憂も況や是の今日を最後唯今限のとなれば沖の釣船浪も消入とみれば沈みを果ぬを見給ひても御身の上と思ひれけん已が一列引連て今日と歸る厂がねの越路をさして鳴行を故郷へ言傳せまほしく蘇武が胡國の恨まで思ひ残せる隈もなしといされば何事ぞや猶妄執の盡ぬよことを思ひ返し西へ向ひ手を合せ念佛し給ふ心の中よりさて都より今を限とい争か知べきされば風の便の音信をを今やくと俟ならんと思ふれば合掌も亂れ念佛を留め聖に向ひ憐れ人の身も持まじさい妻子も今生も物思とするのみならず後世菩提の妨もあるぞ口惜さかやうのことを心も残せば猶罪深からんと懺悔すと宣へば聖を哀も思ひながら我心弱てい叶いまじと生者必滅の理を説運速の不同ありとも後れ先立別れい竟もなくて叶

ふまじ縦ひ百年の齡を保せ給ふとを此侈別の何を唯今も替ると有べからず驪山宮の夕の契  
も終よの心を摧く端とあり甘泉殿の生前の恩を終さきよらざれば和漢例の同じ第六天の  
魔王と云外道の欲界の六天を我物と領し中よを此界の衆生の生死も離るゝことを惜み或の妻  
とあり或の夫となり是を妨んとするよ三世の諸佛の極樂淨土不退轉の地に勸め入んとし  
給ふは一切衆生を子の如く思召ゆるゝ妻子の無始曠劫より以來生死も輪回する縲されば佛  
の重く戒め給ふされば心弱く思召べからず源氏の先祖伊與入道願義の勅命よて奥州の夷  
安倍貞任宗任を責給ひし時頸と斬と一萬六千餘人其外山野の獸江河の鱗其命を絶て幾千  
万をしらざれども終焉の時人一人の菩提心を發せしよ依て往生の素懷を遂られしとかや就  
中淨出家の功德莫大なれば先世の罪障の皆亡び給ふらん七寶の塔を建高さ三十三天に至る  
とを一日出家の功德も及べからずといへり願深かりし願義も心猛がゆるゝ往生正念之  
君のよせるは罪業を坐まじ紀州證誠殿の本地彌陀の名号一遍若くは十遍信心堅固疑心なく  
唱給ふものならば六十万億那由多恒河沙の化身を縮め丈六八尺の淨形にて觀音勢至無數の  
聖衆化佛菩薩百重千重も圍遶し妓樂歌詠して唯今極樂の東門を出引接來迎し給はん淨身こ

そ蒼海の底に沈むと思さるゝとを紫雲に乗給ふべし成佛得脱して悟を開き給ひし娑婆の故  
郷に立歸て妻子を導き給はんと還來穢國度人天とあれは少も訛給ふべからずと頻に鐘打  
鳴し念佛を勤め奉れば中將も然るべき善知識と思ひれ忽ち妄執を翻し西も向て合掌し高  
聲よ念佛百返ばかり唱へ給ひ南無と唱ふる聲共よ海も飛込給ひける與三兵衛石重丸も同じ  
く御名を唱つゝ續て海も沈みける舍人武里を續て海も入んとしけるを聖取留君の御遺言を  
ば違へられまじ今いかにを存命て御菩提を吊ひ參らせよと或の叱又の省けるがいかに  
夫を心得ながら悲しさの餘り何事を覺ずとて船底に轉び倒れ喚き叫ぶ其形勢の悉陀太子檀  
特山へ入給ひし時車匿舍人金泥駒を賜つて王宮も還りし悲を是の過じとみへよける淨  
をや上り給ふかと暫し船を推廻し見けれど三人共深く沈てみへ給ひを暫し經讀回向する  
内日を入海を聞くなれば空しき舟を漕販る門渡る船の權の車聖が袖より傳ふ涙見きて何  
れとみへざりけり聖の高野へ歸武里の八島へ參けり御弟新三位中將殿資盛も御文取出し奉  
るに開見給ひあぢ心愛や我思ふ程人の思ひ給ぬ事よさらば引具して一所よを沈果給ひでど  
をいかに歎き怨給ひ扱外も御詞のなかりしやと尋らるゝ御詞を侍ふとて遺言の次第一々且

唐皮小鳥の事逸具に語りけり今我身とて存ふべしと覺ぬを袖を顔に推當泣給ふ大臣殿も二位殿も此人の頼朝の心を通ひし都へ行れしとのみ思ひ居られたれば今更悶焦れ給ひけり四月朔日都を改元有て元暦と號す其日除目行れ鎌倉征夷大將軍頼朝卿從五位下より五階昇て正四位下に叙せらるる同三日崇徳院と神を祀られ昔御合戦有し大炊御門が末お社を建て宮移しあり是の院の御沙汰にて内裏より知し召れせとぞ五月四日池大納言頼盛卿關東へ下向あり是の鎌倉殿常々情をかけ全く疎に存せず故尼御前と思ひいとて八幡太神をかけ誓状をも遣されしが此度使者を以て急ぎ下り給へとあるゆゑに相傳第一の侍も彌平兵衛宗清と云者わり相具せられんと有しかば君のか久渡らせしへとも御一家の公達西海より深ひ給ふが心苦しくは程も世間の様をも見上は跡よりを參ひいんと頼盛卿耻かしう想ひれ一門も引別れ留りしを吾身ながら美と思ねとも流石身も捨がたく命を惜さよかく在し大小の一向汝も云合する上の請す思ひも落留りし時など左の謂ざりしを遙の旅も趣をいかでの見送らざるべきとやさるる宗清居直り畏て人の身も命程惜さのあきを留りてを惡うとい存ひのや右兵衛佐も命を助けられてこそ今幸も逢ひへ流罪せられし時故尼

御前の仰にて江州篠原の宿送送りしと今に忘れずとやよしは供も下らんも定て櫻應引出物などしひいん夫も付てを西海の傍一門又の同隸其の回聞ん所云がひなく覺へは遙の旅に趣せ給ふとも頼朝を攻め下ならん先陣も進んで討死しべし此度の參ずともは事欠いまじ某も於て右兵衛佐が一飯より共賜んと致まじくは某がことを相尋は所勞有と仰いべしとやよ力及ず殘し給ふ同十六日頼盛卿鎌倉も下着頼朝卿對面有て先宗清のいかよと問れければ折節相勞といと宣へはいかよ何を勞りいやらん猶意趣を存じはにこそ先年彼が許に預け置れいひし時事も觸情深くいしうは常に忘置ずは供も下いへかしと戀しう待いに怖しうを下いぬもの哉とて知行すべき庄園狀共餘多成儲さまの引出物給んと用意せられしかい東國の大小名我をくも引出物の用意せしに下らざれば上下本意なき事共も有ける六月迄善美盛して頼盛卿も響應あり同九日暇乞わり暫しおくても坐せのしと宣へども都にも覺東意く思ふらんとて頓て立給ひぬ知行の私領庄園一所を相違有べからず大納言も成返さるべきよし法皇へやさる扱鞍置馬三十四匹襦馬三十四匹長持三十枝も金巻絹染物風情の物を入れて進せらる東國の大小名面も引出物有て馬ばかりも三百匹迄有けり頼盛の清盛入道の弟もて

命生給ふのみにあらず、旁、徳附て歸洛有し之同十八日肥後守貞能が伯父平太入道定次を始  
 伊賀伊勢兩國平氏隨從の族江州へ打出たり源氏の末葉等發向して合戦に及び同廿日攻敗  
 たる昔の好みを忘れざるの殊勝なれども思立おほけあけれ世も三日平氏と云あらしせり扱  
 又都も在し三位維盛卿の北の方の絶て久しき音信なきまゝ、使を任立八島へ遣されしに高野  
 よて剃髮熊野三所詣し給ひて那智の沖へ主従入水ありしと具に知けれ扱こそとて聲よ  
 喚叫び悲れしが若君六代御前の乳母涙あがらずの今更歎せ給ふべからず本三位中將殿の  
 ごとく、囚と成京鎌倉も耻を曝し給ひいか計必憂くいん是の尊き神佛も後世を願  
 ひ給ひ伊出家迄遂給ふとの歎され中の御歡共やべし今早くは姿を變られ追福の  
 營第一と諫らるゝゆる漸、誦給ひ尼とあり後世三昧し給ふぞ哀なる鎌倉殿此由を聞れ  
 隔なう打向ひても座たらば命斗りの助やさん故池禪尼の使として頼朝を流罪も宥られし  
 の偏も彼内府の芳思之其名残の人なれば疎も思ひやさずまして出家をせられん上の子  
 細も及ざりしと涙を流さしとかや却説讚州八島よて東國より大軍寄るとも沙汰し鎮  
 西より臼杵戸次松浦等押寄る共聞へけるよ一谷も將士多く亡び力を盡たるよぞ阿波民部少

輔重能が兄弟四國の者共を語ひしと高き山深き海とを頼れぬ七月廿五日も成けるが女房  
 指淺ひ去年の今日の都落つてあいたしく淺猿かりしと共語出泣つ笑つし給ひける廿八日  
 都も新帝御即位あり三種の神器なくて即位の例八十二代是を始と承る同八月六日除目行  
 れ浦冠者受領有九郎冠者左衛門尉も成使の宣旨を蒙て九郎判官とやける去程も萩の上風  
 をや、身も入萩の下露を彌繁く恨る蟲の聲、稻葉打戦ぎ木葉かつ散けしき深行秋の旅の空  
 の悲しうるべしとして平氏の面々昔の雲の上も春の花を、翫び今も八島の浦も秋の月も悲  
 ふ凡、皎月を眺ても都の今夜いかならんと想像涙を流し心を澄し明し暮し給たる左馬頭  
 行盛の世も早くす其嫡子之  
 君すめ、愛を雲井の月あれど猶戀しさい都なりけり

同九月十二日大將軍從五位下範頼平家追討として西國へ打立る相伴ふ人々足利藏人義兼北  
 條小四郎義時齊院次官親義侍、大將も土肥次郎實平子息彌太郎遠平三浦介義澄子息平六  
 義、畠山庄司次郎重忠同長野三郎重清佐原十郎義連和田小太郎義盛佐々木三郎盛綱土屋三  
 郎宗遠天野藤内遠景比企藤内朝宗同藤四郎義員八田四郎武者朝家安西三郎秋益大胡三郎實